
陸士訓練学校のドタバタな日常

ラモン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

陸士訓練学校のドタバタな日常

【Nコード】

N5850X

【作者名】

ラモン

【あらすじ】

管理局の魔導師を目指す少年少女たちが集う、第4陸士訓練校。これはその訓練校の日常を描いた、ドタバタ学園コメディである。基本的に「こまけえことはいいんだよ！」の精神でお読みくださいませ。

皆様の暇つぶしにどうぞ。

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』（前書き）

いよいよ始まりました、コラボ小説『陸士訓練学校のドタバタな日常』。

他作者さんのキャラクターが沢山出演していますので、その全員を魅力的に書けるかどうか心配ですが、全力でやってみたいと思います。

では、『陸士訓練学校のドタバタな日常』が始まります。

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』

時空管理局が運営する第4陸士訓練校。

この陸士訓練校は、様々な意味で数ある訓練校の中でも名の知れた訓練校だった。

様々な意味で、というのは文字通り良い意味も悪い意味も含んでいる。

良い意味は、数多くの優秀な陸士たちを輩出していること。

講師陣に未だ現役で最前線に出ている、歴戦の管理局員が居ること。

総じて訓練校とは思えないレベルの人間が揃っていること。

これだけ聞けば、さぞかし優秀な訓練校なのだと思うだろう。

しかし、この第4訓練校の管理局内での評判は、実はそれほど良くはなかったりする。

何故か。

それは——まあ、これから語るこの第4陸士訓練校の日常を見ていただければ分かることだろう。

●陸士訓練学校のドタバタな日常
第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』

「やっぱ時代は“けいおん！”だと思っわけよ。

正直音楽とか全くわからん俺だが、とりあえず漣たんと同じベイス買った。

目指せ武道館ライブ！！むしろ世界進出！」

訓練校のある教室の中央で、短めの金髪を揺らす少年——ハヤト「ロックウエルが新品のベースを持ち、得意げな顔をしてポーズをとっていた。

ただし持ち方は完璧に間違っていたりするけれど。

「放送終了と共にネットオクに出品されてる未来が見えるぞ。それとお前右利きじゃん。

「つか、お前先々週まで「時代はハチワンダイバー」とか言っって、将棋やってたじゃねーか」

そんなハヤトを見て溜息を吐くのは、ハヤトと同じ金色のくせっ毛を持った少年、ルーク「リーゼンベルグだ。間違った持ち方のままポーズを決めるハヤトを見ようとせず、手元で広げた漫画に視線を落としたままルークは言葉を続ける。

「先月あたりは「時代はARIA」とか言ってゴンドラ漕ぐ練習してたし、その前は「時代はバンブーブレイド」って剣道やってたし、もうオチが見え見えすぎて泣けてくるわ」

「いや、今度は本気だ！ やつと気づいたんだよ、俺は澪さんの生まれ変わりだつて！」

「死んでねーし、いやそもそも生きてねーし、お前男だし」

「ふざくんな！ 澪さんはいつでも生きてるんだよ！ 俺の胸の中で！..」

「末期的な会話すんじゃないよ。あと“けいおん！”ならあずにゃんだろ」

「ちっばいに用はない！」

「おっばいに貴賤はない、ただそこにおっばいという概念があるだけ。」

その程度の事にも気づけんとは情けない、いい加減目を覚ましたらどうだハヤト？」

「大きい正義！ 貴様こそ目を覚ませルーク！」

何故か芝居がかった口調でぎゃーぎゃー言い合うハヤトとルーク。そんな2人の言い合いを遠くから眺めつつ、オレンジと紫のオッドアイを持った少女が、セミロングの黒髪を揺らして溜息と共に小さく呟く。

「……あやつらは何をしょーもない会話をしとるんじゃ、朝も早いというに」

やや年寄り臭い口調で呟いた少女の名は、高町ゆず。

自分の机に肘を突いてハヤトとルークのやり合いを眺める姿は、やや年寄り臭い口調も相まって本来の年齢よりも年上のような印象を受ける。

「知らないわよ。3馬鹿のスケベ共の会話なんて」

「ティア、それは酷いよ……まあ、あたしもそう思っけど」

呆れ返った表情をするゆずの言葉を受けて溜息と苦笑をもらすのは、橙色のツインテールが特徴的な少女——ティアナⅡランスターと、青いショートカットの活発そうな少女、スバルⅡナカジマの2人。

そんな3人の視線の先で、ハヤトとルークの議論は白熱していく。もちろん、果てしなくしょーもない方向に。

「なんでちっばいを否定する!? これでは、ちっばいの需要が減ってエロゲが少なくなる!」

エロの冬が来るぞ!—」

「ちっばいを肯定する者は胸ならば何でもいいとしか考えていない、

だから抹殺すると宣言した！」

「エロがエロに罰を与えるなどと……！」

「私、ハヤト」ロックウエルが肅清しようというのだ、ルーク……！」

「エゴだよそれは……！」

「むしろエロじゃね？」

「誰がうまいこと言えと」

間違った方向に熱くなる2人のボルテージが最高潮に達した頃、見計らったようなタイミングでハヤト達の教室の扉が開き、短く揃えられたブラチナブロンドを揺らす少年が入ってきた。

少年の存在に気づいたティアナ達は笑みを浮かべ、彼の名前を呼びながら手を振る。

「リオス、おっはよう……！」

「おはようなのじゃリオス」

「おはよ、今日は遅かったわね」

「あ、うん。おはよう、スバル、ゆず、ティアナ」

名前を呼ばれた少年——リオス」コーネルドは、誰もが見とれる

ような柔らかな微笑みを浮かべ、それから自分の登場にも気付かず、いまだに言い合いを続けているハヤトとルークへと視線を移しながらティアナ達の隣になる自分の席へと腰を下ろした。

そして視線をハヤトとルークに固定したまま、ティアナ達に向かって短く尋ねる。

「……また？」

「また、よ。朝っぱらから元気よね」

「ほんにのう。もう少し静かにしてもバチは当たらんじやろくに」

「あはは。まあ、あたしは元気でいいなって思っけど」

ティアナとゆずが揃って嘆息し、スバルは苦笑いを返す。

「ほれリオス、はよう止めてくるのじゃ。あやつらの後始末はお主の役目じゃろ」

「ゆずの僕に対する認識は甚だ遺憾だけど、否定できないのが悔しい……」

「遺憾とかはどうでもよい、はよう止めてきやれ」

「ううう……なんで幼馴染ってだけで僕が……」

「宿命と書いてさだめ、というヤツじゃな。なに、ちょっと行って

止めるだけじゃろ？

何も姉上と戦って勝てと言ってる訳でもなし、男ならささつと行くのじゃ。ほれほれ」

追い払うようなゆずの手つきに促され、リオスはガツクリと肩を落とし、トボトボと重い足取りでルークとハヤトの方へと近づいていく。けれど2人は既に周りの事など気にならない程にヒートアップしているらしく、真横までやってきたリオスに気付く気配は無い。

「ねえ、2人とも」

「そうか……！ しかしその希少価値をもったちっぱいが、ロリコンを生み出すんだ！

それを分かるんだよルークッ……！」

「分かってるよ！ だから、世界にロリコンの心の光を見せなければならぬんだろ！」

「ねえってば、ハヤト、ルークも」

言葉だけでは気付いて貰えないと悟り、ハヤトとルークの服を引っ張ったりするリオスだが、それでも2人は気付かない。ここまでくるとわざと無視しているのかと思う程なのだが、実際はただ単にヒートアップしすぎて本気で気付いていないだけだったりする。

「ちっぱいは！ 人間のエロ全部を飲み込めやしない！」

「おい」

「ちっぱいの良さはそんなもんだって、乗り越えられる!!」

「もしもし」

「ならば、今すぐロリコン共すべてに叡智を授けてみせる!」

「ルークさん、ハヤトさん」

「お前をやってから、そうさせてもらうつ!!」

「……駄目そうんだけど」

何度声を掛けても気付かぬ2人に、諦めた表情を浮かべて助けを求めるようにティアナ達を振り返るリオス。しかし、返ってきたのは無常な言葉だけだった。

「頑張れ」

「頑張きなさい」

「頑張るのじゃ」

「酷いよ3人とも……」

ニコニコと満面の笑みで手を振る3人に悪態を吐いてから、もう一度ハヤトとルークの方に向き直る。

どう頑張っても、こうなった2人を止められる筈がないと長年の付き合いで分かっているのだが、ハヤト達を止めるように言われた手前、無理とわかっていてもやらないと後が怖い。

ハヤトとルークだけが馬鹿騒ぎをしても、何故か最終的には幼馴染の自分まで一緒にたに説教されてしまうのだから。

「……よし」

諦めから一転、覚悟を決めたと小さくガッツポーズをして、リオスはもう一度ハヤト達に声をかけようと口を開こうとした……が。

「朝っぱらから何を大声出してるのかしらね、アンタ達は」

「あいだっ!？」

「ぎゃふっ!？」

それよりも先に、いつの間にか教室の中に入ってきていた濃いブラウンのセミロングを揺らす女性が、手に持っていた黒い名簿でハヤトとルークの頭を思い切り引つ叩いた。

スパーン! という小気味良い音とハヤト達の悲鳴が教室に響き、その音の大きさに驚いたリオスは口から出そうとしていた言葉を飲み込んだ。

「うっおおお……」

「いつてええ……」

「全くこれだからあんた達くらいの男は嫌なのよね。ほらほら、そんなところで痛がってないで、教室の隅っこにでも行っててくれない？ 朝から私のテンション下がっちゃうでしょ」

叩かれたハヤトとルークに冷たい視線を送りつつ、うえうえと舌を出す女性。

この女性の名前は左^{ひだり}舞^{まい}。第4訓練校の教官を務める1人であり、ハヤト達の担任でもある女性だ。付き合いやすい人柄で、訓練生からは人気がある。

ただ、ハヤトとルークの2人からの評判だけはすこぶる悪いのであった。

「おはようございます、左教官」

「はい、おはようリオス。その馬鹿2人の面倒、ちゃんとやってよね。幼馴染なんだし」

「幼馴染だからって面倒をみる必要は……いえ、わかりました」

ひらひらと手を振る舞の主張に反論しようとして、リオスはそのままと諦めたように溜息を吐く。

このあたりは、子供の頃からハヤトとルークの幼馴染として育つ

てきたリオスにしかわからない、一種の諦めというものだろうか。

「ほら2人とも、いつまでも大げさに痛がってないで席に戻ろうよ」

「痛がつてんじゃねーよ、ガチでいてーんだよ。手加減しねえとか
どいう了見だ、あの不良教官」

「まったくだぜ。あの教官、馬鹿力で遠慮なくぶん殴りやがって」

「2人ともそんなこと言っちゃだめだよ。教官に聞こえたら怒られるよ？」

「残念ながら聞こえちゃってるよ馬鹿。そんな酷いこと言われると、舞さん悲しくって思わずアンタ等の内申を最低値にしちゃうかもしれないー。そしたら進級はどう頑張っても絶望的かなー。

私としても本意じゃないけど、シヨックで思わずだから仕方ないよねー」

「横暴だ！ 権力の無駄遣いだ！」

「弱みを握って脅すなんて教官のすることじゃねーぞ！」

「ば、僕は関係ないじゃないですか！」

「をほほほほ！ お黙りむさ苦しい男子め！ くやしかったら美少女に生まれ変わってきなさい！」

そして、アンタ達の進級は私の指先ひとつに掛かってるってことを覚えておくのね！」

リオスの言葉に跳ね起きるように立ち上がり、猛然と舞に向かつて抗議するハヤトとルーク。

しかし舞は2人の抗議など知らぬふりで、胸を張って高笑いを響かせるだけ。本来ならもう少し騒ぎになりそうなのだが、リオスやティアナを始めとした教室にいる訓練生にとつて、毎朝のように行われるハヤトとルーク、そして担当教官である舞のこのやり取りは既に恒例行事。

今更あーだこーだと騒ぐのも馬鹿らしいというものだ。

「ルークがむさ苦しいのは認める！　だが俺はイケメンだろう！」

「ハヤトがむさ苦しいのは認める！　だが俺はイケメンだろう！」

「何で2人とも同時に同じ内容の事を、一字一句違わずに言えるの？　僕はそっちの方に驚きだよ」

「まあどっちも性格が壊滅的だから、どんだけ顔が悪くても意味無いのが悲しいところよね。」

どのみち私はアンタ達くらいの男は嫌いだから、顔が悪くても関係ないけどね。

やっぱ弄るなら女の子がいいわよね。柔らかいし可愛いし……あ、そういう意味じゃリオスは合格だから安心なさい。男にしろくのがもったいない位に可愛いもの！」

「嬉しくないです」

目を爛々と輝かせて、まるで女神のような笑みを浮かべる舞に対

し、リオスは片手を挙げて疲れた声を上げる。とはいえ、これもこの訓練校に入ってから毎日のことだったので、既に諦めが入っているのが涙を誘うところだ。

「差別は駄目でしょ教官！」

「そーだそーだ！ 俺等にはいつでも厳しくせに、なんでリオスには妙に優しいんだよ！」

「女の子>リオス>>>>（越えられない壁）>>>>あんた達」

「「すいませんでした……」」

「わかればよろしい」

きつぱりと言い放つ舞に、ハヤトとルークが膝から崩れ落ちる。これもまた、このクラスでは余りにも見慣れた光景であった。…うん、まあこれを見慣れるのもどうなんだという気持ちは大いにあるのだけど、見慣れた光景なのだから仕方ない。

「左教官は、あいも変わらず面白い人じゃなあ」

「アレを面白いで片付けていいわけ？」

「そういう事しておいた方が、わらわ達の精神衛生にとって健全じゃろ？」

「まあ……そりゃ、そうよね」

その光景を見ながらニヤリと笑うゆずを横目に、ティアナはやれやれと頷いた。

見ている分には面白いが、あそこに自分から突っ込んでいこうと思えるほど、ティアナは冒険心を持った若者ではない。むしろ危険からは遠ざかるべきだと考える人間だ。

わざわざトラブルに関わろうと思わないのは当然だろう。

「ま、いざとなった誰かが止めるでしょ」

「そうじゃな。わらわ達は、ここでこうして高みの見物といこうかや」

ただ、ゆずとティアナの隣で自分の席に座っているスバルだけは、心配そうな顔をする。

それはお約束となりつつあるこの後の展開について、彼女なりに心配しているからだろう。

「うーん、本当に止めなくていいの？」

多分、舞さんとハヤト達、また校長センセに怒られちゃうよ?」

「じゃあアンタが止めにいつてきなさいよ、スバル」

「そうじゃな。少なくともわらは教官に絡まれるのは御免じやもの」

「う……そ、そりゃあ、あたしだって嫌だけどさあ」

けれどゆずとティアナの声を受け、スバルは口を尖らせて言葉に詰まる。

心配は心配だが、馬鹿騒ぎに絡んだせいで朝から酷い目にあうのは勘弁願いたいらしい。

正しく懸命な判断だと言えるだろう。

「あの騒ぎはいつものことなんじゃし、放っておくのがよかる。わらわ達に出来るのは、こうして騒ぎを眺めながらのんびりしておくことなのじゃ」

「そ、そうかなあ」

「当然じゃろ。そも、アレはじゃれておるようなものじゃよ。左教官がその気になったなら、ハヤト達なんぞ一発で気絶させられとるしの。何せ格闘戦においては、主よりも遥かに強いんじゃし」

「確かに、それはそうなんだけどさ」

「心配せんでも、怒られるのも含めていつも通りということじゃ。そんなにやきもきせずに、この光景を楽しむくらいの余裕を見せんといかんのじゃ」

「……」

「それに——む？　どうかしたかの？」

ぽやんとした微笑を浮かべるゆずだったが、自分の方をまじまじと見つめるスバルの視線に、言葉を途中で止めて怪訝な顔で首を傾げ、スバルに向かってそう問いかけた。

問いかけられたスバルは「んー」と小さく唸ってから、感心したように呟く。

「やっぱりゆずって落ち着いてるよね。なんかおばあちゃんみたい」

「おば……っ!？」

「ばっ! 何言ってるのよ馬鹿スバル!」

「もがっ」

不穏な発言をしたスバルの口をティアナが慌てて塞ぐ。

ただ、スバルはもう『その単語』を口にしてしまった後なので、既に手遅れではあったが。

「お、おばあちゃん……わらわがおばあちゃんじゃと……?」

「この馬鹿! そう言われるのをゆずが気にしてるって知ってるでしょ!？」

「あわわ、そういえばそうだった! ど、どうしようティア!？」

「ふ、ふふふ……まだ16年しか生きておらんというに、まさかおばあちゃん扱いされるとはの。」

さすがのわらわも吃驚仰天じゃよ。まさに青天の霹靂というヤツじゃ」

ゆずは椅子に座ったまま俯き、プルプルと肩を震わせてぶつぶつと呪詛のように何事かを呟いている。

おばあちゃん呼ばわりされたのが、余程ショックだったのだろう。まあ、普通女の子なら誰でもおばあちゃん呼ばわりされればショックだけでも。

ただ、ゆずは殊更「おばあちゃん」呼ばわりされるのを嫌がつており、それはこのクラスの人間なら誰でも知っていることなのだ。それはもちろんスバルも知っている……筈のだが、彼女は時々こうしてそれを忘れ、うっかり彼女をおばあちゃんっぽいと言ってしまう事があるのだ。それこそ今回のように。

「吃驚仰天とか、そういう言い回しもおばあちゃんっぽいよね」

「なん……じゃと……!？」

「だから何でアンタはそういう不穏当な発言をするのよ、この天然馬鹿!」

「ひゃあ!? し、しまった! つい口が!」

注意されたばかりなのに、更にうっかり発言を重ねるスバル。

ティアナに思い切り頭を引っ叩かれるが、もうどう頑張っても時既に遅し……というかぶつちぎって遅すぎるというか、何というか。

「う、うう……」

「だ、大丈夫よゆず！ ちょっと単語の選び方が古くさ……新しくないだけで！」

「そうそう！ 物腰とか喋り方が年寄りくさ……大人っぽいだけだから！」

ぶるぶると肩を震わせるゆずの目に、涙が溜まっていく。

ティアナとスバルは何とか慰めようとするものの、慌てているせいか結局傷口に粗塩とからしを塗りこむような単語しか選べていない。やめて！ もうゆずのライフはとくにゼロよ！！

そして――

「わらわは……わらわは……っ！ まだピッチピチの16歳じゃもん……っつー！！」

「あ、ゆず。ピチピチっていうの、もう死語だよ」

「あんたはもう喋るな！」

「うわ………んっー！！」

——ガタンツ！ と席を立って涙目のまま教室の外へと駆け出していくゆず。

その背中にスバルがまたまたうつかり発言を投げかけ、ゆずは走る速度を一気にトップギアに入れ、目にも留まらぬスピードで廊下を駆け抜けていってしまふのだった。

「ゆ、ゆずーっ！」

「ごめんゆず！ 謝るから戻ってきてーっ！」

ゆずが走り去った廊下に、ティアナとスバルの声だけが空しく響き渡る。

ティアナとスバルが慌てて廊下に顔を出したが、そこにゆずの姿はもう無かった。

一方その頃のハヤト達と言えば。

「さあどうするのかしら！？ 私に内申という切り札を握られている以上、アンタ達に逆転する要素は無いわよ！ さっさと降参して私の視界に入らない教室の隅でガタガタ震えてなさい！」

「……ごちゃごちゃうつせー。ンなこたもうどうだっていいんだよ」

「あら？ 諦めたのかしら？」

「いいぜ……教官が俺達の内申を思い通りに出来るってんなら」

「まずはその幻想をぶち殺す!!」

「いや、ハヤトもルークもそんな権限ないよね？」

そげぶごっこで遊んでいました。

この後、舞とハヤト、ルーク、リオスの4人は漏れなく校長からのありがたいお説教をいただき、ゆずは訓練校を一周してからすつきりした顔で戻ってきたとき。めでたしめでたし。

さて、ここまで読んだ諸君に、は第4陸士訓練校の評判が思わしくない理由を理解して頂けたと思う。

優秀な人材を輩出し、教官に歴戦の管理局員を向かえ、レベルの高い人間が揃っているというのに、第4陸士訓練校が管理局内であり評判がよろしくない理由。

それは――。

――総じて、そこに関わる人間のキャラが濃いせいである。どっとはらい。

・今回のおまけ

『ハヤトとリオス』

ハ「……なあ」

リ「何？」

ハ「巨乳の定義って、やっぱりDカップから——」

リ「いいから反省文書きなよ」

『リオスとルーク』

ル「なあ、リオス」

リ「何？」

ル「黒縁眼鏡と三つ編みをした真面目っ子がガーターベルト着用っ

て、かなりエロくね？」

り「だから反省文書きなつて」

『舞とゆず』

舞「ねえ、ゆずちゃん」

ゆ「なんですか、教官？」

舞「私ってね、ポニテ萌えなんだ。だから――」

ゆ「仕事してください」

第1話 『朝8時だよ！ 全員集合！』（後書き）

初めましての方は初めまして。

私の作品を読んでくださった事がある人は、また読んでくださりありがとうございます。

どうも、ラモンです。

そんなこんなで、いよいよ始まっちゃいました。

今まで他作者さんのキャラを、しかもこんなに大勢動かした経験がないので、凄くドキドキしながら書かせてもらいました。

結構色々やらかしちゃった気もしますが、大丈夫だったんでしょ（汗）

今回登場したキャラクターの作者さん、問題があつたらメッセージなどで教えてくださいませ。修正させていただきますので。

ともあれ、これからこんな感じで『陸士訓練学校のドタバタな日常』は続いていく……筈です。

果たして私はどこまで頑張れるのでしょうか。

出来る範囲で、全力で頑張っていきたいと思います。

ちなみに『今回のおまけ』ですが、これは今まで登場したキャラクターが4コマみたいな感じで喋りあうものです。

ネタが思い浮かぶ限り毎話やるつもりですので、こちらも楽しみに。

それではまた、次の話で。

第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

「……」

「……」

早朝、まだ太陽が顔を覗かせたばかりの第4陸士訓練校宿舎。

口の字型になっている宿舎の中庭で、3人の少年が向かい合って立っていた。

うち2人はジャージ姿のハヤトとルーク。そしたもう1人は、同じくジャージ姿の、茶色の髪を肩まで伸ばした、青緑の瞳が印象的な少年——ユウキ・エレンリッドだ。

「いくぜ、ユウキ？」

「ああ。ルークも準備はいいか？」

「モチのロンよ」

3人はお互いの顔を見てから、不敵な笑みを浮かべた。
そして――

「おっぱい体操〜〜！ 第一〜〜〜〜！！！」

「まずは腕を上下させておっぱいを賛美する運動から！」

「さんはい！！！」

「「「（。。。）〇ミ。おっぱい！おっぱい！」「「

3人は腕を思い切り上下させ、宿舎中に響き渡る程の大声で掛け声を上げる。

おっぱいおっぱいと叫ぶ彼等の額には汗が光り、その表情にはやり遂げたかのような表情が浮かんでいる。そして、それを数十分繰り返していただろうか。

一応の終わりを見たようで、彼等は腕を振るのをやめて次の動作を大声で叫ぶ。

「次はー全身を回しておっぱいを崇める運動ー！」

「さんはい!!」

「○○(㇏≡、㇏)○ おっばい!おっばい!」「」

続いて3人は上半身をぐるぐる回しながら、再びおっばいおっばいと大声で叫ぶ。

そりやもう宿舎中どころか、近隣一帯に響き渡るような大声で。現在の時刻は早朝の4時を少しだけ回ったあたり。早朝訓練などがあり、比較的早い起床時間を決められている訓練校でも、極めて早すぎる時間である。

普通に考えればやらないし、仮にやったとしても、もう少し自重するものだ。

けれど、3人は自重しない………どここの騒ぎではなく、より一層声を張り上げていく。

「続いてー上下に飛び跳ねておっばいに感謝する運動〜!!」

「「「おっばい! おっばい!」」」

「さらに反復横跳びをしながら、おっばいへの敬意を示す運動〜!!」

「「「おっばーい! おっばーい!」」」

「更に更に、シャドーボクシングをしながら、おっばいの素晴らしさに感動する運動〜!!」

「おーっばい！ おーっばい！」

「ほいでもって、エアギターと共におっぱい賛歌を奏でる運動〜」

「おっぱいばーい」
「おっぱいばーい」

当然ながら、早朝からそんなに騒がれて平気な人間など居ない。しかも大半の訓練生は、前日の訓練や座学の疲れなどで朝は一秒でも多く情眠を貪っていたいのだ。

つまり、そんな朝に騒ぐ彼等に待っている物。それは。

「「「「「うるせー……っっっ！……！……！……」」」」」

「ちー!」

宿舎中の窓という窓から降り注ぐ、魔力弾の雨だった。

この物語は、第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

誰がなんと言おうとそうなのである。
そ、そうなんだったら！ やめて！ そんな疑わしい目で見ないで！！

●陸士訓練学校のドタバタな日常
第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』

朝の騒ぎから数十分後。
ハヤト、ルーク、ユウキの3人は宿舎で最も広い待合所に居た。
だが、その場に居るのは彼等だけではなく、他にも数多くの人間が顔を連ねていたりする。

「じゃあ朝練まで時間も無いし、とっとと裁判を始めろぞ。
被告人ハヤト、ルーク、ユウキは前へ」

やや跳ねた茶色の髪を持った少年が、その鋭い金色の瞳で3人を見据え、待合所でもっとも大きなソファに座ってそう促す。
どうやらここを簡易的な裁判所に見立てているようだ。
それに伴い、ざわざわと俄かに辺りが騒がしくなる。

「裁判長はコイツらと同じクラスのクラス委員である俺、氷上京谷が務めさせて貰う。」

問題が無ければ始めたいが、何か言う事がある奴はいるか？」

あたりを見回して確認する京谷の問いに、周りからの野次馬からは「異議なーし！」「さつさとやれー！」という声が返ってくる。どうやら宿舎にいる殆どの人間が集まっているようだ。

なんだかんだで皆暇人らしい。

「では、今回の事件の経過を私、アウルⅡアパレシオンから説明させていただきます」

そんな中、私服姿の多い野次馬の中から既に訓練生の制服に着替えた少年が歩み出る。

雪のように白いミドルロングの髪を首の後ろで括り、髪色とは真逆の黒い瞳を持ったその少年——アウルは、どこからか持ってきたファイルを片手に語り出す。

「事件が起きたのはつい先ほど。まだ朝の4時を過ぎたばかりの早朝に起きました。」

彼等は……詳しいところは冒頭の部分を読んでくださいね」

「おい、メタんな」

「失礼。それでは事情を説明させていただきます。」

かくかくしかじか、以上がこの『早朝睡眠妨害事件』の全容になりますね。

我々の睡眠時間はあまりにも突然に、そして無慈悲に奪われました。しかも彼等が奪ったのは、ただの睡眠時間ではありません。

昨日の訓練で疲れ果てた私達にとって、1分1秒でも長く貪っていた朝の睡眠を奪ったのです。

これは私が生きてきた中でも、類を見ない程の凶悪な事件ですよ」

アウルは目頭を押さえ、沈痛な面持ちで首を横に振る。

そんな彼の言葉にあちこちらから「そうだそうだー！」とか「ぶっ殺せー！」という声が上がった。

「待ってくれ！俺達に悪意は無かったんだ！」

「そうだそうだ！ちょっとおっぱいについての情熱が溢れただけなんだ！」

「おっぱいに罪はない！つまり俺達にも罪は無い！」

「しかも本人達に反省の色は無い。実に嘆かわしいことです」

頭痛を堪えるような仕草をするアウルに、野次馬達からは同情の声が聞こえてくる。

中々に堂の入った検事役である。本当の法廷でも戦えるのではないだろうか。

「ハヤト君、ルーク君、ユウキ君。もう少し反省したらどうか？
君達が騒ぐのはいつもの事としても、もう少し時間を考えるとか
……というかりオス君は？」

「あ、リオスなら昨日胃痛で倒れてまだ帰ってきてないぜ」

「何かマリーナ教官の話だと、ストレス性の急性胃潰瘍とかなん
か」

「おいおいハヤトにルーク。お前らどんだけ迷惑かけてんだよー」

「いや、そんなにかけてねーって」

「だよなあ。昨日だって、大したことしてねーって。ちょっとアイ
ツの部屋にエロ本を隠そうとして、それを左教官に見つかって3人
揃って怒られただけだし」

いつもならば、こうなる前に止めている筈のリオス「コーネルド
の不在に気付いたアウルが尋ねてみれば、返ってきた答えは予想の
斜め上……むしろ空の彼方なものだった。

悪びれもしないハヤト達に、アウルは呆氣に取られ、京谷は「お
いおい」と頭を抱えた。

それ以上に、いくらリオスが女装が似合う人間だからといって、
彼に女装させて心を癒すというのはどういうことなのか。虚しすぎ
るだろう、常識で考えて。

「何だ、いつも通りじゃん」

「「だろー?」」

「……検察側としましては。彼等に極刑を望みます」

「「「何で?!?」」」

反省の欠片もないハヤト達に辟易しつつ、アウルは溜息と共に結論を出した。

もちろんハヤト達がそれに納得する訳もなく、3人は思い切り立ち上がって抗議の声を上げる。

「ただ朝の体操をすることも出来ないなんて! この国はどうなっているんだ!」

「そうだ! 俺達には自由に生きる権利がある!」

「おっばいは正義!」

「黙れ」

「「「はい」」」

しかし、そんな3人の抗議は京谷のひと睨みで掻き消されてしまふ。

こうやってハヤト達を黙らせる事が出来るあたり、クセの強いハヤト達のクラスを纏めているのは伊達ではないという所だろう。

「では次に被害者達の声聞いてみようじゃないか。被害者代表、前へ出てもらえるか」

やれやれと溜息を吐く京谷に促され、2人の少女が前に出る。

1人は薄いブラウンの髪を肩の辺りで揃えた、勝気な印象を受ける少女。

そしてもう1人は、腰まで届く藍色の髪が特徴的な、悪戯好きな猫のような印象の少女だ。

「2人とも、名前を言ってもらえるか？」

「ミコト〓タツナミよ」

「草薙くさなぎ 蒼そうだ」

「知ってる。クラスメイトだからな」

「じゃあ聞くな！」

ぶっきらぼうに言い放つ京谷に、揃ってツツコミを入れるミコト達。

それから一度仕切りなおすように咳払いをしてから、2人はそれぞれ口を開く。

「被害者としてはふざけんなって話よね。

こっちは昨日、左教官にしごかれたせいで疲れてたっていうのに、
ねえ京谷、裁判とかいいから私達に任せない？ 私の電撃で一発
よ、こんなの」

「むしろ被害者全員に一発ずつ殴らせろ。私達はその権利を十二分に有している筈だ。

何、手間は取らせん。ものの数秒でカタがつく」

喋りながらポキポキ指を鳴らすミコトと蒼。

ハヤト達はそれを見て体を震わせながら思い切り後ずさって悲鳴を上げる。

「ま、まで！ 落ち着いて話し合おう！」

「そうだ！ 俺達には言葉があるじゃないか！」

「それに本気で悪気は無かったんだよ！ ちょっと徹夜でゲームしてて、テンションおかしくなってる衝動的にああいう事をやってしまっただけで！」

「へえ。じゃあアンタ達は、衝動的に私達の睡眠を妨害したわけね？
どーにもアンタ達、3人揃ってサンス・リバーを渡ってみたいらしいわねえ……」

「「「はうあ!?!」」」

何とか自分達を擁護しようとして、わざわざ地雷を踏み抜く3人。
ここまで見事だと、

もはやワザとやっているんじゃないか、と思ってしまう程だ。

まあ、実際にはただ単純に必死すぎて自分達が何を言っているのか分かっていないだけなのだろうが。

「蒼、やるわよ」

「いいだろう、たまには本気でいくとしよう」

「「「ちよつとおおお!?!」」」

ミコトが自分の周りにバチバチと火花を散らし、蒼はそれぞれ拳を固めて目にも留まらぬスピードで、空気を切ってシャドーボクシングを開始する。

どう見ても殺る気マンマンです。本当にありがとうございました。
野次馬達もそんな彼女たちに触発され、それぞれが拳を固めているようだ。

「まあ落ち着け。まだ判決は出ていないぞ」

「……ちっ」

「命拾いしたな。オマエ達」

しかし彼女達が手を出すよりも先に、京谷が手で制してそれを止

めた。

「被害者達の気持ちは痛いほどよくわかった。
では、今度は被告の弁護人に登場して貰うとしよう。弁護人、入
ってくれ」

「どうも、被告人達の弁護人を務めるアルトリア・ムーンライトで
す。

本日はよろしく願いしますね」

次に野次馬の中から歩み出たのは、少女と見紛う外見をしたやや
小柄な少年、アルトリア。

彼もまたアウルと同じく訓練校の制服に身を包み、長い金色のポ
ニーテールを揺らしながら地面に正座させられたハヤト達の前に出
る。

「えっと、ハヤト達は日頃からこういった迷惑行為を繰り返してた
みたいだよ？

こんな風に怒られるのも、1回や2回じゃなかったみたいだね」

「ふむ」

「ちなみに4日前の朝にも今日と同じ事をして怒られてるね」

「つまりは再犯、という事か」

「うん。そういうことになるかな。」

けど実際、悪気自体はないみたいだし、多少情状酌量の余地はあるかな。

掛け声の五月蠅さとか、叫んでる声の大きさとかはともかく、やってることは一応体操だしね。

その辺りも踏まえて、弁護側としては……」

アルトリアはそこで一度言葉を区切り、それから正座した3人を一度だけチラツと見つめてから、一度咳払いをして結論を述べた。

「特に弁護する価値を見出せませんので、死刑でいいと思います」

「「「おいイイイイ！！ 弁護しろよおおお！！」」」

「ぶっちゃけるとね、正直勢いで弁護人役をやったの後悔してるんだ」

「「「自分で言い出しておいて！？」」」

「安眠妨害は死刑っていうのが、ウチの家訓なんだよね。だから死刑でいいと思います」

「「「何で2回言ったし！！」」」

可愛らしく首を傾げて、ちよろつと舌を出しながら告げるアルトリア。

もちろん嘘だが、今この場にハヤト達のツッコミに同調する人間は居ない。誰だって、朝っぱらから馬鹿騒ぎをされて安眠妨害をさ

れば、文句のひとつどころか殺意だつて覚えるだろう。

仮に前日の訓練がなければギリギリ許して貰えたかも知れないが、現実是非情だ。

「よかるう。ではそろそろ朝練の時間も迫ってきたから判決といこう。」

検察側、弁護側、そして被害者側。その全員からの証言を纏めた結果……」

「異議あり！ 明らかに俺等が有利になる証言が無かった！」

「弁護人も弁護してなかったし！」

「この裁判は違法だ！ 正義が無い！！」

「異議は却下だ。裁判長役にも飽きてきたしな」

「『ええ』……」

身も蓋も無くハヤト達の抗議を一刀両断する京谷。

まあ実際この裁判（笑）が始まってから既に30分近く。飽きてきても仕方ないのかも知れない。

「……うん。やっぱり飽きてきたな。ミコト、蒼、後は頼んだ」

「りょーかい」

「いいだろう。任せておけ」

「結果は後で教えてくれ。俺は部屋に戻って授業の準備をしてくる」

どうやら本気で飽きていたらしく、京谷はひらひらと手を振ってソファから立ち上がってどこかに行ってしまう。立ち去る時の彼の指示に従い、ミコトと蒼の2人が裁判長席であるソファに腰掛けた。ただ、いくら大きいとはいえ1人掛けのソファに2人で座るのは、流石に細身の2人でも狭いようでありぎゅうぎゅう詰めだったりする。

「ちよつ、狭いわよ蒼！ アンタちよつと立ちなさい！」

「ふざけるな尻でか女。お前が立つべきだ」

「誰のお尻がデカイですつてえ！？」

「ふん、お前に決まっているだろう？」

余分な贅肉が胸ではなく尻に溜まっているのではないのか？」

「なななな……！？ だ、誰が貧乳よ！ アンタだって変わんないでしょ、この貧乳オブ貧乳！」

「よしいい度胸だ表に出ろド貧乳め」

席の狭さを発端として、お互いの胸を貶しながら怒鳴りあうミコトと蒼の2人。

ぶつちやけ傍目からはどちらも変わらないのだが、本人達は「自分の方が大きい」という自覚があるらしい。……どっちもAカップ未満なのにな。

「前々からアンタの態度は気に食わなかったのよ！」

今日こそ、私の方が大きいって事を、その貧しい胸に教えてあげるわ！」

「おかしな事を言うな超ド貧乳。私の方が大きいに決まっているだろうが」

「なによ！」

「なんだ？」

被告席に居るハヤト達をそっちのけで、2人はヒートアップしていく。

そのせいでグダグダになっていく空気を感じ、野次馬達も1人また1人と立ち去っていった。

実際のところ、全員そろそろ飽きてきていたのだろう。朝練の近いことも、原因ではあるけれど。

「あー、またグダグダになっちゃいましたね。どうしょっか？ アウル」

「うーん……仕方ない。私達で判決を下してしまうとしましょうか。ああ、ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん。逃げようなんて思

わなidekudaisai ne?

逃がしませんから」

「「ぎくっ!」「」

「許さないよ、絶対にだ」

騒ぎに乗じてこっそり逃げ出そうとしていたハヤト達の首根っこを掴み、アウルとアルトリアの2人がにつこりと笑う。

ハヤト達はこの時、2人の浮かべた朗らかな笑みが、死神の笑みに見えたと後に語った。

アウルとアルトリア。普段は温厚だが、怒ると怖い2人である。

「さて、判決はどうしましょうか」

「そうだな……あ、アウル。丁度いいのがあるよ」

「丁度いいもの?」

「あれあれ」

アルトリアの指差す方を見れば、そこには臨戦態勢のミコトと蒼の姿があった。

ミコトは全身に雷を纏い、バチバチと火花を散らす。

対する蒼はゆっくりと腰を落とし、すぐにでも飛びかけられるような体勢を取っている。

まさに一触即発。2人の間の空気が、ビリビリと震える程の殺気

まで感じる程だ。

そんな2人を見て、アウルは「なるほど」と頷く。

どうやら、アルトリアが言わんとしている事に思い至ったらしい。

「ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん」

「時間もそろそろアレだし、判決を言うね」

「「「……ごくり」」」

アウルとアルトリアはゆっくりと3人を振り返り、まず見た者全てを魅了する笑みを浮かべた。

次に彼等は、口を揃えて判決を言い放つ。無慈悲に、無感情に。

「ミコトさんと蒼さんの喧嘩を止めてください」

「ただし、2人を怒らせてからね」

「「「oh...」」」

「ちなみに従わなかった場合は、左教官に怒ってもらうからね」

「では、私達はそろそろ授業の用意をしなくてはいけないので、部屋に戻らせて頂きます。

頑張ってくださいね」

最後にそう言いながら手を振って、自分達の部屋に戻っていく2人。

呆然と彼等を見送ってから、3人は恐る恐る言い争っていたミコトと蒼を見た。

「最初っからフルパワーでいくわよ。消し炭になっても恨まないでよね」

「そっちこそ、私の一撃で骨が折れないように気をつけるんだな」

ミコトも蒼も、既に周りなど見えていないらしい。

その表情に浮かぶのは明らかな殺意だ。よほど貧乳を気にしている見える。

本当なら、3人は逃げ出したかった。

クラスメイトなのだから、ああなった2人が危険すぎるのは百も承知している。

しかもアルトリアの指示は、更にあそこから怒らせた挙句に喧嘩を止めなければいけない。そんな事が不可能だということは明白すぎる事。

けれど、2人を止めなければ、彼等にとって天敵とも言える左舞教官がやってくるのだ。

いくら嫌でもやらなければならない……世の中、こんな筈じゃなかった事ばかりだよ。

「怒らせる役は俺がやる。お前達は逃げる準備だけをしておけ」

「へっ……馬鹿野郎。ハヤト1人にいいカッコさせるかよ！」

「そうだが、旅は道連れ世は情け。俺たちも一緒にやるぜ！」

「お前ら……全く、幼馴染のルークはともかく、ユウキも大概だな」

「はっはっは！」

悲壮な決意を固めながら、お互いの肩を叩いてひとしきり笑いあ
う。

そして3人は顔を見合わせてひとつ頷くと、大きく息を吸ってそ
れぞれに叫んだ。

「ミコトのどひんにゅー！」

「蒼の胸はえぐれ胸ー！」

「お前ら揃って豊胸パッドでも使ってなー！」

「なああんだとおおおー！！！！？」

「ひいっ！？」「ひいっ！」

ハヤト達の子供じみた中傷に、ミコトと蒼は修羅の如き表情で振
り返る。

その顔を見た瞬間、ハヤト達は反射的に駆け出していた。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

……そうだと、いいな。

・今回のおまけ

『京谷とユウキ』

ユ「なあ、京谷」

京「ん？ なんだ？」

ユ「俺が頭良くなったらモテると思うか？」

京「不可能な夢を見るな」

『アルトリアとミコト』

ミ「ねえ、アリア」

ア「どしたの、ミコト？」

ミ「何をしたら、胸って大きくなるかな？」

ア「何で俺に聞くの？俺男だよ？」

『蒼とアウル』

蒼「アウル、少しいいか？」

アウ「何でしょう？」

蒼「さっき雑誌で、男と（自主規制）をすると胸が大きくなると書いてあった。

だから手伝え。今すぐにだ」

アウ「全力でお断りします」

第2話 『彼等は基本的にノリで生きています』（後書き）

キャラ崩壊ってレベルじゃねーぞ！
どうも、ラモンです。

だ、大丈夫かな今回…… 大分キャラ崩壊しちゃってる人たちが居るような…… 怒られたら即行で直そう。
そんな感じの第2話でした。

やっぱり人が多いと難しいですね。

しかもまだ紹介していないキャラクターを登場させているので、紹介とあわせると中々どうして難しい……。

今回は京谷さん、アルトリア君、アウルさんあたりが酷いキャラ崩壊をしちゃってる気がしますし。

ノリで書いていると、こういう時に困りますね。

ちなみに、クラスメイト枠の皆さん…… 特に男子は結構な勢いで3馬鹿枠みたいな動きをしてもらう場合があります。

基本的に3馬鹿は固定ですが、今回みたいに誰かが3馬鹿枠に巻き込まれる場合もございますのでご注意ください。大概酷い目にあります。

とりあえず今回で3馬鹿、クラスメイト枠の皆さんは殆ど出演させる事が出来ました。

次回からは上級生枠、生徒会枠、クラス委員（女）枠、女子クラスメイト枠の最後の1人、そして教員枠の皆さんをメインに据えたいと思っています。

どうなるか分かりませんが、頑張りますので怒らないで見てくださいます。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

陸士訓練校は、当たり前ながら陸戦魔導師を始めとした数々の魔導師を教育する機関だ。

しかしその反面、普通の学校としての側面も持っている。

その最たる例として挙げられるのは、生徒会がある事だろう。

生徒会のメンバーは、役職ごとに立候補した中から選挙で選ばれる。

とはいえ、生徒会と言えば「面倒ごとを押し付けられる」というイメージを持つ人間が多いため、実際は立候補すれば間違いなく当選という状況ではあるのだが。

そんな現状もあって、生徒会のメンバーは現在僅か4名。
しかもその全員が、中々に濃い面子になってしまっているのだ。

「ねえ、ハヤブサ」

「あん？」

その生徒会のメンバーである2人の少年、リョウガ「ヤマトとハヤブサ」ヴェヌーシアは、それぞれ自分用に宛がわれた机の前でパソコンに向かっていた。

「さっきから仕事が全然進んでないみたいだけど、何やってるの？」

青緑色の目でパソコンの向こうから反対側の席に座る人間を睨みつけるのは、リョウガ「ヤマト」。

若干10歳でありながら、飛び級でこの訓練校の最上級生として通い、生徒会では会計を任されている天才児だ。可愛い顔つきもあって、特に女子の訓練生からの評判がよく、この第4訓練校ではそこそこの有名人だったりする。

「あー？ ゲームやってる」

そんなリョウガの鋭い視線を受けつつ、平然とパソコンの画面を見つめているのがハヤブサ「ヴェヌーシア」。赤いウニのような髪形

が特徴的な17歳男子。

ハヤト達の上級生に当たる訓練生で、一応生徒会の書記を担当している。

「ねえハヤブサ。僕は必死になって君の倍以上はある書類をやってるのに、まさか君はこともあろうに生徒会室でエロゲをやってるの？ 何なの？ 馬鹿なの？ 死ぬの？」

「はあ？ いい加減リトバスをエロゲと勘違いしてる奴うぜえ。エロゲじゃないし。T O L O V Eとかの方がよっぽどエロゲ」

「エロゲじゃなかったら何なのさ」

「筋肉……かな？」

「うわぁ……」

パソコンの画面から窓の外へと視線を移し、遠い目でそう呟くハヤブサに、リョウガは本気でドン引きした。まあ、実際リョウガでなかったとしてもドン引きしただろうが。

ちなみにF a t eは文学、A i rは芸術、クラナドは人生だ。

「って、そんな恒例のやり取りは置いといて。仕事は終わったの？ 何か見た限りだと、全然進んでないように見えるんだけど」

「は？ 仕事とか超面倒くせえし。そんな事より野球しようぜ！ 俺達のチーム名は『ハヤブサバスターズ』な」

「仕事しないならへし折るよ？」

「どこを！？ つーか何で俺の股間をガン見なんでせうか！？ ちよつ、やめてえっ！！」

不穏な箇所を見ながら手をボキボキと鳴らされ、ハヤブサは慌てて自分の股間を押さえ、椅子ごと飛び上がって後ろに下がる。男の勲章をへし折られたらフラグも立てられないからね！

「はあ……別に仕事しないならそれでもいいけどさ。怒られるの僕じゃないし」

「えー。もう少し構ってくれよりヨウガ、俺達友達だろ？」

「10歳の子供に構ってくれって頼む17歳ってどうなの？」

「こまけえこたぁいいんだよ！」

「細かいじゃないじゃん」

ハヤブサの言葉に、リョウガは呆れた声で返しながら再び手を動かした。

実に手馴れた対応である。まあ、なんだかんだと殆ど毎日ハヤブサの相手をしているのだから、嫌でもリョウガにも耐性がつくというモノだろう。

本人に聞いたら、「こんな耐性欲しくないんだけど」と言うのは

目に見えているが。

「っと、そういや今日会長と副会長は？」

そこでふと気付いたとばかりに、ハヤブサが尋ねる。

ハヤブサの問いに対して、リョウガは今日何度目になるか分からない溜息を、これ見よがしに深々と吐いてみせてから渋々という感じで答えを返す。

「はあああああ……………会長と副会長は、学内の治安維持の為に回り中だよ。」

昨日さんざん言われたじゃない。聞いて…………無かったんだろうけどさ、ハヤブサは「

「ふつ、そんなに誉めないでくれたまへ。照れるじゃないか」

「誉めてない。まったく微塵も欠片も小指の先ほどすら誉めてないから」

「またまた、リョウガちゃんてば照・れ・屋・さ・ん」

ウザいスマイルを浮かべ、反対側の席まで手を伸ばしてリョウガの額を軽くつつくハヤブサ。

…………それはそれは、見るもの全てがイラッとする程、見事なモノであったと言う。

もちろん、それにイラッとしたのはリョウガも例外では無く。

「ねえ、ハヤブサ？」

「はいはい、なんでせうか？」

「全力攻撃と、全身全霊攻撃、どっちがいい？」

「……それ、どういう違いがあるんだ？ 説明願いたい」

「簡単に言つと、Die or Death」

「どっちも死んでるじゃん！？」

「大正解。じゃあ……死のうか♪」

後光が差してきそうな神々しい笑みを浮かべてリョウガがそう言った次の瞬間、生徒会室から灰色の光が溢れ、次いで凄まじい爆発音が轟いた。

第4 陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……の筈である。

多分、きっと、おそらく。

● 陸士訓練学校のドタバタな日常

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』

「ごめんねー、美卯。私の用事に付き合わせちゃって」

「いいよ別に。友達が困ってたら、手伝ってあげたいもの」

リョウガとハヤブサの2人が生徒会室で生死を賭けた戦いを繰り広げている頃。

訓練校から宿舎へと続く道を、2名の少女が歩いていた。

「にしし、優しいにゃー。だから美卯ってば大好き！」

そう言って嬉しそうに笑うのは、背中まである深緑色のポニーテールを揺らす活発そうな少女、ソフィアⅡジュリーストン。ハヤト達のクラスメイトであり、クラス委員でもある女の子だ。

ちなみに、低めの身長には不釣り合いな、たわわなおっぱいの持ち主でもある。

……え？　そういう情報知らない？　またまた、遠慮しないでいってば。

「もー、ソフィアはすぐそうやって誤魔化すんだから」

ソフィアの人懐っこい笑みに苦笑して、彼女の額を軽く小突くのは山城美卯。

彼女よりも短く、肩よりも少し上までしかないこげ茶色のポニーテールが特徴的な女の子で、ハヤト達のクラスメイトでもある。

「そういえば、ソフィアは今日この後どうするの？」

「んー？　宿舎に帰って、スバルとゆずの3人でゲーム大会でも、って感じかな？」

「またそんな不健康な……」

「だってー、あと数日後にはクラスのゲーマー全員対抗モンハン大会があるんだもん。」

今のうちから頑張って、いい装備整えておかないとね！」

「ああ、そういえばそんなのあったね。」

あれって結局誰が主催して……って、そんなのハヤトしかないよね」

「ううん？ 左教官だよ？」

「oh...」

衝撃の真実に思わず言葉を失う美卯であつた。

まさか、ゲーム大会を自分達の担当教官が主催しているとは夢にも思つまい。

むしろ十分に予想していたからこそその反応かも知れないが。

「今のところ、ハヤトとルーク、リオスの幼馴染組が優勝候補なんだよね。

だから、私もスバルとゆずの2人と力を合わせて、あの3人をぎやふんと言わせてやるのさ！

ふははははー！」

「……なんかそれ、先月も聞いた気がする」

「……だってあの3人強すぎなんだもん」

冷静にツッコまれ、ソフィアはしょぼーんと肩を落とす。

実はこの【クラスのゲーマー全員対抗モンハン大会】は毎月行われており、今のところハヤト・ルーク・リオスの幼馴染チームが3連覇中である。

「でも、ソフィアは先月ので2位だったじゃない？ 1位じゃないと駄目なの？」

「そりゃそうだよ。だって、1位になったら左教官からジューズ奢ってもらえるし」

「うわ、何とも即物的な……」

嬉しそうに顔を上げるソフィアだったが、美卯は彼女が話す内容を聞いてまた溜息を吐いた。

ちなみにこの1位の景品、ハヤトとルークは1度も奢ってもらった事が無かったりする。

舞曰く、「可愛くない奴に奢るお金は無い！」との事だ。それでも優勝してしまうあたり、ハヤトとルークは意外とMなのかも知れない。いや、単純にゲーム好きなのだろうが。

「先月はあとちょっとまで行ったからねー。今回こそは絶対に勝つよー！」

「無理だと思うけどなあ。リオス君はともかく、ハヤトとルークの2人は、成績……というか生活全般を犠牲にゲームをやっているとこあるし」

「ふふふ、だから私達も今回は成績を犠牲にする覚悟なんだよ！」

「いや、駄目でしょ」

自信たっぷりな顔で胸を張るソフィアにツツコミをいれ、美卯が苦笑する。

まあ本当に成績を犠牲に……とは美卯も思っていない。なにせハヤトとルークがどのくらい成績を犠牲にしているのかといえば、それこそ座学の最中でさえゲームをやるくらいだ。

ソフィアは根が真面目だから、そこまで馬鹿な事は出来ないと知っているのだろう。

「それじゃあ早く帰ろっか。ゆずやスバルも待ってるみたいだし」

「だね。一杯練習して、今度こそハヤト達をぎゃふんって言わせるんだ」

「はいはい、頑張ってね」

そんな風に楽しそうに言葉を交わしながら歩いていた2人だったが、ふと自分達の視界の端に妙なモノを見つけて足を止めた。

「……」

「……」

2人の視線の先——校舎から宿舎へと続く道の脇に植えられている街路樹の側には、コソコソと隠れてあたりの様子を伺っている1人の少年……ハヤブサが居た。

どうやら生徒会室でリョウガから攻撃された後、何とかここまで逃げ延びていたらしい。

それを見つけた美卯は、暫く彼の様子を眺めてから胸のポケットから携帯端末を取り出し――

「あ、警察ですか？ ええ、不審者です。第4陸士訓練学校の側の――」

――おもむろに警察に電話した。

「ちょーっと待った――ーっ!!」

「おっとー!? ここでハヤブサ先輩のちょっと待ったコールだー!!」

「なんでナチュラルに警察に連絡しようとしてるんでせうか!? 酷くない!?」

「ハヤブサ先輩、ご自分の今の姿を見てから言ってください」

「いやそれを言われると何も言い返せませんが!」

通報しようとした美卯に抗議するものの、どうやらハヤブサ自身も自分の格好が、どこからどう見ても不審者だという自覚はあったらしい。

「まあ大丈夫ですよ。本当に通報してる訳じゃないですから」

「え、そうなの？」

「そうですよ。ハヤブサ先輩がそうやってコソコソしてるのって、結構日常茶飯事ですし」

「私達……というか、訓練校の皆が見慣れてるしね」

「否定しきれないのが悔しい」

がつくりと肩を落として落ち込むハヤブサだが、決して自分の素行を改めようと思わないらしい。

そのあたりが彼の悪い点でもあるが、だからこそハヤブサは上級生でありながらハヤトと仲が非常に良かったりする。まあ、単純にハヤトが素行不良でよく生徒会室に呼び出されているのも一因だけれど。

ともあれ、ソフィアと美卯はきやいきやい楽しそうにハヤブサを弄る。

「ていうか今日はどっちから……ああ、隠れてるって事はヤマト君からですね」

「だね」。みっちー先輩からなら、こんなところで隠れてないで、もっと遠くまで逃げてるだろうし」

「俺の行動見破られすぎワロタ」

「それだけハヤブサ先輩が追っかけられてるって事ですょ」

やれやれと溜息を吐きながら、美卯が肩を竦めた。実際ハヤブサがこうして逃げ回るのは殆ど毎日で、ある種の恒例行事として訓練校中で有名なのだ。

もちろん“殆ど”毎日なのであって、本当に毎日な訳ではない。

せいぜい2日に1回くらいの……あれ？ これもう毎日でよくね？

「まあそれは置いといて——」

気を取り直したハヤブサが一旦話題を切り、次の話題につなげようとしたその時。

「待ていつ——！」

「「「!?!?!」」」

突如、凜とした声が辺りに響く。

その声に男達が慌ててあたりを見回せば、ソフィア達から少し離れた場所にある丘の上に、1人の少年が腕を組んで立っているのが見えた。しかし彼の顔だけは、不自然な逆光で見ることが出来ない。

「悪しき星が天に満ちる時、大いなる流れ星が現れ……」。

その真実の光の前に、悪しき星は光を失い、やがて墮ちる……。

人、それを「裁き」という……!!」

逆光に照らされたまま、少年はすらすらと口上を述べる。

そんな少年の口上に、ハヤブサが怯えの混じった怒鳴り声で問いを投げた。

「誰だアンタはっ!？」

だが、その問いに対する少年の答えは短く、明瞭なもの。

「貴様に名乗る名前はないっ!!」

言っが早いか、少年は高々とジャンプして空中に綺麗な放物線を描き、ハヤブサの後ろに着地する。

すると、逆光で見えていなかった少年の顔がソフィア達からようやく見えるようになり、その顔を見たソフィアと美卯は「あれ？」と声を揃えて少年の名を呼んだ。

「御剣副会長じゃないですか」

「みっちー副会長だ、やつほー」

「……っ、おいお前達。こついつ場面で名前をバラすな、お約束は守るべきだろう。」

それからみっちーと呼ぶなと何度言ったら……」

折角の登場シーンを邪魔され、不満そうに頭を振る少年の名は御^み剣^{けん}仁^に。

この訓練校の生徒会副会長であり、訓練校内でも5本の指に入る実力者として有名な少年だ。

「ごほんっ。まあ、それは今は置いておくぞ。それよりもハヤブサ、逃げるな」

「ぎくっ！」

咳払いと共に一度話題に区切りをつけ、それから御剣はかけている銀縁の眼鏡を軽く上げながら、背中の半ばまである黒髪をかき上げ、こっそりとこの場から立ち去ろうとしていたハヤブサを睨みつけた。

睨まれたハヤブサはギギギと音が鳴りそうな程にゆっくり振り向き、冷や汗をダラダラ流しながら愛想笑いを浮かべるのだった。

「い、嫌だなあ別に逃げないですよ？　これはちょっと前衛的な運動でして……」

「言い訳はいい。まったく、お前は何故わざわざリョウガを煽るんだ。」

お前のせいで書類が散乱して面倒なことになっているんだぞ。破けてたり燃えていない分マシとはいえ後片付けがどれだけ面倒だと思っっている」

「いやあ、リヨウガの反応が面白くてついつい」

「ついで毎回書類をあらされてたまるか。その後始末に私と朔也がどれだけ苦労しているか。」

くそっ、また胃薬を追加注文せねば……」

「みっちー副会長大変ですね」

「胃薬の量が増えたって聞きましたけど、大丈夫ですか？」

深い溜息を吐く御剣と、そんな彼の肩をたたいてのほほんと笑うソフィア。

美卯は心配そうな顔で彼の顔を覗きこみ、ハヤブサは「てへぺろ」と可愛らしく舌を出していた。男のてへぺろは死罪に値すると思うんだがどうだろう？

などという戯言はともかく。

胃の痛みに御剣が顔をしかめてくると、彼がさっきまで立っていた丘の影から、大きな照明用ライトを抱えたやや短めの黒髪をもった少年が、少しばかり覚束ない足取りで歩み出る。

「み、御剣君！ これ重いから手伝って欲しいんですけど……」

「な！？ 朔也！ それはそこに置いておけと言っただろう！？」

「いえ、ですがこのままここに置いておくと、帰るときに私が忘れそうだったので」

「私が覚えておくし、運ぶのも私がやると言っただろうが!？」

恥ずかしそうな表情を、そのやや大人びた顔に浮かべて現れたのは、この第4訓練校の生徒会長を務める月城つきしろ朔也さくや。怒る事が殆ど無く、誰にでも分け隔てなく接する彼は、一部では「仏の月城」と呼ばれている。

「ですが、御剣君の登場を演出するために借りてきたものですし、早めに返さないと……」

「だから返却は後で私がちゃんと自分でやると……ああもう、そんなフラフラしてまで抱えるな!

落としたら弁償になるだろう!? とりあえずそこに下ろせ!

……くう、また胃がキリキリと」

「す、すいません。それじゃあ……よつと。いやあ、重いですねこのライト」

持っていた大型ライトを地面においてから、朔也はもう一度照れくさそうに笑う。

そんな彼の声に頭を抱えて胃の辺りを押さえる御剣に苦笑しつつ、美卯は地面に置かれたライトと朔也の顔とを見比べ、首を傾げてみせた。

「月城先輩。そのライト、どうしたんですか？」

「ああ、御剣君が演出に使いたかったみたいで、ちょっと教官室から借りてきたんですよ」

「御剣先輩が……なるほど、さっきの不自然な逆光はコレが原因でしたか」

彼の説明に納得がいったのか、美卯はライトの方を見ながらしきりに頷く。

「わはー みっちー副会長は相変わらず手を抜きませんねー」

「当然だ。やる以上は何事も徹底的にやる、それが生徒会役員の血の掟だからな」

「いやいやいや！ 俺そんな物騒な掟聞いてませんけど！？」

「言っていないからな」

あっさりと言いきる御剣に、ハヤブサは右手で顔を覆って天を仰ぐ。

そしてハヤブサは天を仰いだまま、御剣に向かって問いかける。

「もし破ったらどうなるんでせうか？」

「なに、ちよつとしたペナルティがあるだけだ。具体的には他の生徒会役員に1週間学食を奢る、程度なものだな。軽いものだろう?」

「わーお、流石にこの事実にはヴェヌーシアさんも驚きを隠せませんのことよ?」

「気にするな。お前は良くも悪くも徹底的にやる人間だからな、問題ない」

「マジで!?!」

「マジで。そしてそれで思い出したが、そろそろ生徒会室に戻るぞ」

言いながら、御剣がハヤブサの制服の襟首を掴む。

そこでようやく「しまった!」と自分が逃亡中だったのを思い出したハヤブサだったが、捕獲されてしまった以上逃げる手立ては無い。

「ちいつ! 話に夢中にさせてから捕獲しにくるとは!! 汚いな! さすが副会長汚い!!」

「誰が黄金の鉄の塊か」

「まあまあ、ヴェヌーシア君もそんなに抵抗しないでください。ヤマト君がいつも通りかなり怒ってますから、先に生徒会室に戻って仕事をしていきましょう。」

そうすれば、ヤマト君も見逃してくれる可能性はあるでしょう?」

「む……絶対にありえない筈なのに、会長に言われると何故かありそうだと思ってしまう不思議」

「それじゃあ、帰って仕事を片付けてしましましょう」

言葉こそ穏やかだが、そう言った後の朔也と御剣の行動は早かった。

あつという間に御剣と共に彼の両腕を掴んでハヤブサを引きずっていきけるような体勢になると、2人は揃って事の成り行きを見守っていたソフィアを美卯のほうを見る。

そして、2人とも微笑を浮かべてソフィア達に挨拶をした。

「それでは山城さん、ジュリーストンさん、気をつけて帰ってくださいね」

「宿舍までの距離は近いが、この時期は変質者も出るという話も聞く。十分に注意しろ」

「はい。つきー先輩もみっちー先輩も、頑張ってくださいね」

「月城先輩、御剣先輩、頑張ってください」

御剣達の挨拶に笑顔で手を振り、ソフィアと美卯は宿舍に向けて歩き出す。

少女達の背中が見えなくなったところで、朔也と御剣は、ハヤブサを引きずりながら生徒会室に向けてゆっくりと歩き出した。

「ちくしょう、今日こそはうやむやの内に逃げられると思ったのに」

「逃げようとするな。まったく、お前はやれば出来るのに何故仕事をしないのか……」

「そこにゲームがあるから、ですかね」（どやぁ……）

「……………朔也。今度生徒会の予算で胃薬を買ってくれ、ダースで」

「検討しておきます。ヴェヌーシア君も、あまり御剣君に苦勞をかけないようにしてくださいね？」

「前向きに検討したいと秘書が申しておりました」

頭を抱える御剣と、困ったなあと苦笑する朔也。
第4陸士訓練校で名物となっている、そんなやり取りの一幕であった。

「あ、ハヤブサ見つけた」

「あ、ヴェヌーシアさん見つかった」

「見敵必殺」

「わーお、殺意ビンビンすぎて泣きそー」

「……………朔也。5ダースに増やしておいてくれ」

「了解しました」

この後、訓練校の敷地内でガチバトルを繰り広げるハヤブサとりヨウガ、そしてそれを全力で止める御剣と朔也の姿があったという。そしてこのガチバトルは、最終的に高町なのは教官が割って入るまで続いたらしい。

第4 陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4 陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語になる予定だったナニカだ。

・今日のおまけ

『ハヤブサと御剣』

ハ「副会長、俺思っんですけど」

御「何だ？」

ハ「リトバスは人生。そして俺の人生の主役は俺。

つまり、リトバスは俺と言っても過言じゃ無いんじゃない——」

御「消し飛ばすぞ」

『リヨウガと朔也』

朔「ねえ、ヤマト君？」

リ「どうしたの、朔也さん？」

朔「高町教官の砲撃って凄いですよね」

リ「思い出させないで」

『ソフィアと美卯』

美「じー……」

ソ「？ どしたの、美卯」(どたぶーん)

美「……」(ぽよん)

ソ「変な美卯」

美「大丈夫、まだ成長期。これからこれから……」

第3話 『生徒会役員共と、巻き込まれた少女達』（後書き）

正直に言おう。ロム兄さんがやりたかったただけだ。
どうも、ラモンです。

そんなこんなで第3話。

今回は生徒会メンバー全員と、出せていなかったハヤト達のクラスメートの女子2人に出演していただきました。

御剣さんを大分はっちゃけさせたが、大丈夫だろうか？

怒られたら即行で書き直そう……（汗）

応募して頂いた作者の皆さん、何か自分のキャラでご不満な点などございましたら、メッセーじなどで教えてください。

場合によっては最初から書き直しといたしますので。

それと、ここでちょっとお知らせ。

今回で3馬鹿枠、クラスメート枠、クラス委員枠、生徒会枠での出演メンバーは全員登場させることができました。

なので、ここら辺でこの枠のメンバー紹介を載せようと思います。

名前、年齢、髪型、外見、性格の5項目を載せたいと考えています。

さて、次回は残っている上級生枠、教員枠の皆さんに出演していただきたいところですが……教官枠全員登場はちょっと難しいかもです
すねえ。

流石に、教官が一気に登場となると、職員室の話になっちゃいそうですし。

あ、ちなみに教官としてなのはも出てきますので、そのあたりもよければお楽しみに。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

登場キャラクター紹介 その1（前書き）

今回は

- ・【3馬鹿枠】
- ・【クラスメイト枠】
- ・【クラス委員枠】
- ・【生徒会枠】

以上の4枠のキャラクターを紹介します。

登場キャラクター紹介 その1

・【3馬鹿枠】

【男子】

1.

名前：ハヤトⅡロックウエル

年齢：16

髪型：ボサボサの短い金髪

外見：目は緑っぽい青。ややツリ目がち

性格：楽天家。巨乳マニア。そしてエロい

備考：3馬鹿の馬鹿担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その1。

成績は下の中

2.

名前：ルークⅡリーゼンベルグ

【F20Cさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers Lost Memory 他】

年齢：16

髪型：金髪の天然パーマ。長すぎず短すぎず

外見：紅色の瞳。身長は3馬鹿で一番高い

性格：エロ魔人。気さくな性格。だがエロい

備考：3馬鹿のエロ担当。御剣の胃薬摂取量を増やす原因その2。

成績は下の中、上、下とムラがある

3 .

名前：リオス「コーネルド

【神崎はやてさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers
「氷翼の天使」他】

年齢：16

髪型：プラチナブロンドの短髪

外見：女の子と見紛うくらいに可愛い。金色の丸っぽい目。

身長は3馬鹿で一番低い。

性格：優しく誠実。苦勞人

備考：3馬鹿の理性担当。最近胃薬を飲むようになった。成績は上
の中

・【クラスメイト枠】

【男子】

4 .

名前：アルトリア「ムーンライト

【キャビア伯爵さん著：魔法少女リリカルなのは 新約・純白の騎
士姫】

年齢：15

髪型：金髪のポニーテール。長さは首の辺りまで

外見：リオスに負けず劣らず可愛い。緑色のたれ目

性格：そうそう怒らないが、涙もろい。そして総受け

備考：男の娘担当。弄る側、弄られる側どちらもこなす器用な少年。
成績はかなり良い

5.

名前：アウル「アパレション

【EXAMさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～
亡霊の弾丸～】

年齢：16

髪型：白色のミドルロング。首の辺りでひとつに纏めている

外見：黒く中性的な瞳。身長はルークと同じくらい。イケメン

性格：大人っぽく、面倒見が良い

備考：クラスのお兄さん担当で良心担当。成績はトップ10以内

6.

名前：ユウキ「エレンリッド

【結城光さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～運
命を背負いし者～】

年齢：16

髪型：茶髪で肩まで伸ばしている

外見：青緑色の瞳、身長はハヤトと同程度

性格：底抜けに明るいムードメーカー。しかしエロい

備考：クラスのムードメーカー。ハヤトやルークと一緒によく馬
鹿をやっている。

御剣の胃薬摂取量を増やす原因その3。成績は中くらい

【女子】

7 .

名前：高町ゆず

【あーちゃん後輩さん著：W I S H 王女が願う夢】

年齢：16

髪型：黒のセミロング。肩のあたりまで

外見：切れ長な右がオレンジ、左が紫のオッドアイ。身長は低め。
胸は大

性格：のんびり屋で落ち着いている。悪く言うとお婆ちゃんっぽい
備考：お婆ちゃん扱いされるとイジける。基本はツツコミ担当。成績は中〜上

8 .

名前：草薙 蒼くさなぎ そうつ

【Kの2乗さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers】紅
闇の少年と機人の少女〜】

年齢：15

髪型：藍色（濃いめの青）の、腰まで届くストレート

外見：水色の細い瞳。身長はゆずと同じ位。胸は貧

性格：人をからかうのが好き。ブラコン

備考：主に意地悪担当。胸の事をからかわれるとキレて凄いことに。
成績は中

9 .

名前：山城 美卯やましろ みつ

【検体番号10032さん著：告白 -アフターストーリー-】

年齢：16

髪型：こげ茶色の肩まで届くポニーテール

外見：明るい茶色のたれ目。身長はゆず、蒼と同じ程度。胸は小

性格：基本は面倒臭がりだが、根は真面目

備考：主にツツコミ担当。面倒見が良く、よく友人に相談を受ける。
成績は中くらい

10.

名前：ミコト「タツナミ

【ムーギネーターさん著：【習作】魔法少女リリカルなのはStr
ikers ～禁断の刃～】

年齢：15

髪型：肩にかかる程度のショートカット。茶髪

外見：やや釣り目がちの黒い瞳。身長はやや高め。胸は小

性格：負けず嫌い。ツンデレ

備考：主にツツコミ、ツンデレ担当。胸の大きさでからかわれると
キレル。成績は良い

・【クラス委員梓】

【男子】

11.

名前：氷上京谷
ひかみ きょうや

【Kyoさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～最強の魔導師は転生者～】

年齢：16

髪型：茶色の短髪

外見：大きめの金色の瞳。身長はハヤトと同じ程度

性格：面倒見が良く、ツツコミ気質

備考：苦勞人。主にハヤトとルークのせいで氣苦勞が絶えない。成績はトップクラス

【女子】

12・

名前：ソフィア「ジュリストン

【神崎はやてさん著：新魔法戦記リリカルAngels～The Rule of Gods～】

年齢：14

髪型：深緑色のポニーテール

外見：オレンジ色の瞳で垂れ目。身長はクラスで一番低い。胸は巨

性格：天真爛漫で無邪氣

備考：クラスの癒し担当。クラス最年少で、皆から可愛がられている。成績は中の上

・【生徒会枠】

【男子】

13・

名前：月城 朔也 つきしろ さくや

【雨凧 雪人さん著：魔法少女リリカルなのはStrikersとある年増の銃騎士】

年齢：19

髪型：黒のミディアム、首の辺りくらいまで

外見：黒い瞳で垂れ目がち。身長はやや高めでイケメン

性格：温厚で年下に甘い。やや天然気味

備考：生徒会長。仕事も出来て訓練生に絶大な人気を誇る……が、時々天然ボケな行動をしてしまう時も

14・

名前：御剣 仁 みつるぎ ひとし

【Hagalaさん著：とある最強系主人公達の放蕩記】

年齢：19

髪型：黒色で、肩甲骨あたりまでのロングヘア

外見：ツリ目な黒の瞳。銀縁の眼鏡をかけている。身長は高くイケメン

性格：悪に義憤し善を嗤うタイプ。保護者属性。ツッコミ

備考：生徒会副会長。仕事も出来るし人気もあるが、もの凄い苦勞人で最近はお友達が胃薬が友達。

生徒会の中では一番苦勞している人。

15・

名前：リョウガ・ヤマト

【十五郎さん著：魔王少年リリカルリょうが 他】

年齢：10

髪型：黒のショートで、前髪を分けて目に入らないようにしている
外見：垂れ目気味の青緑色の瞳。身長は年相応に低く、ゆず達よりも低い

性格：優等生を演じているが、腹黒。むつつりだったりもする

備考：生徒会会計。飛び級で訓練校最上級生になった天才。基本的にいい子だが、実は腹黒。

彼の本性を知っているのは極一握りの人間だけ。

16・

名前：ハヤブサⅡヴェヌーシア

【タケケさん著：魔法戦記リリカルなのは〜逆心を抱く戦闘機人〜】

年齢：17

髪型：赤色でウニ頭

外見：藍色でやや釣り目がち。身長は中くらい

性格：やや面倒臭がりだが、人のピンチは放っておけない

備考：生徒会書記。ハヤトやルーク達と仲が良く、よく一緒にゲームをやっている。

御剣の胃薬摂取量が増える原因その4

登場キャラクター紹介 その1（後書き）

とりあえず、簡単なプロフィール紹介をやってみました。
どうも、ラモンです。

年齢などは、もちろん訓練校の話ですので原作どおりではなく、ある程度若返ったり年を取ってもらったりしました。

魔力ランクなども一応決まっていますが、多分殆ど関係ないので載せておりません。

うーん、やっぱりコレだけ人数が多いと、流石に被っちゃう部分がありますねえ。画像などがあればいいんですが……（汗）
まあ、細かいところは本編中で書き表せるように頑張ります。

一応作者の皆様の名前と作品名を載せておきましたので、詳しいプロフィールなどが見たい場合は、原作の方で確認していただければ幸いです。

それと作者の皆さんへ。

このプロフィールなどで訂正して欲しい部分がありましたら、感想やメッセージで訂正箇所を教えてください。すぐに訂正致します。

ではでは。

第4話 『教育実習生が美人だと、何か嬉しいよね』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

突然ではあるが、この第4陸士訓練校に勤めている教官達は、その全員が『教官資格』という資格を持っている。これは時空管理局が発行している資格で、誰かに魔導師としての訓練を行う時には必ず持つて居なければいけない資格だ。

これとは別に『戦技教導官』という資格もあり、その受験にもこの『教官資格』は色々関わってくるのだが、この場ではその説明は割愛しよう。

そしてそれを取るには、厳しい試験と1年間の教育実習を受ける必要がある。

ちなみに教育実習は必ず訓練校で行わなければいけない。

試験と教育実習。

この2つを終えて、初めて『戦技教導官』という資格を得る事が

出来る。

戦技教導官を目指す人間は多いが、その殆どが実は教育実習で挫折することが多い。

というのも、実際に人に物事を教える難しさに打ちのめされてしまうからだ。

なにせ相手は訓練生。正規の局員になる前の、それこそ基礎から教えないといけない人間達。

そんな彼等に魔導師としての訓練をつけるというのは、生半なことでは出来ない。

毎年1000人以上の人間が戦技教導官を目指す中、実際になれるのは10人かそこらという凄まじい倍率を誇っているのには、そういう理由がある。

「……ふう」

“実習生用日誌”と書かれた冊子に何事かを書き終え、息を吐いて手に持っていたペンを置いた『高町なのは』も、そんな戦技教導官実習生の1人で、半年ほど前からこの第4陸士訓練校で実習をしている。

「えっと……うん、これで大丈夫かな」

彼女が見直している“実習生用日誌”とは、まあ言うなれば毎日の実習で実習生が学んだ事を書き記すノートのような物だ。1日の

実習が終わった後に、実習生はこれを自分の実習担当教官に渡し、簡単な評価をしてもらってその日の実習を終えるのだ。

なのは最後に軽く自分の日誌を見直してから席を立ち、自分の実習担当教官である女性の席へと歩いていく。

「マリーナさん、いま大丈夫ですか？」

「ん？ ああ、大丈夫なのはちゃん」

声を掛けられた女性——なのはの実習担当であると共に、模擬戦などの実戦訓練担当教官であるマリーナ「イシユバロン」は、その艶やかな黒のロングヘアを風に靡かせつつ、座っていた椅子を回転させてなのはに顔を向けた。

「今日の分の日誌、持ってきました。チェックをお願いしますか？」

「あら、相変わらず早いだね。ハヤトやルークとか、おばかさん達に見習わせたいわ」

「にやはは……」

日誌を受け取りながら溜息を吐くマリーナに、なのはは苦笑を返すしかなかった。

否定しないあたり、正直彼女も心の底では同意しているようだが。

「どれどれ……」

マリーナは日誌を受け取ると、金色の光る美しい目を細めて視線を動かす。

「うん。今日も特に問題なし、相変わらずいい出来よ」

「はやっ!？」

「速読は天才の嗜みよ? 覚えておきなさい、なのはちゃん」

「は、はあ……」

受け取った日誌に2秒とかからず目を通して、冗談混じりに片目を閉じつつ、持っていた日誌をなのはに返すマリーナ。ただ、その冗談がウケているかどうかは……なのはの苦笑が物語っている。

しかし言った本人は彼女の表情を気にした風も無く、話を続けるのだった。

「舞の紹介だつていうから少し心配だったけど、ホントなのはちゃんはいいい子ね」

「そ、そんなこと——」

「当然よ! なんとって、なのはちゃんはこの私が小さい時から、

手取り足取り腰取り胸取り色々なことをねっとりきっちり教えてあげてたんですから！」

「うひゃあっ!？」

うんうんと頷きながら誉めてくるマリーナの言葉を、頬を赤くしながらなのはが否定しようとした時、突然なのはの背後に腕を組んでふんぞり返っている舞が現れた。

「ま、ママ舞さん!？ 驚かさないでくださいよお……」

「えゝ？ いいじゃない、私となのはちゃんの仲でしょ？」

「誤解を招くような言い方しないでください、舞さん」

「そなたっ！ あの夜の事は遊びだったって言うの!？」

あんなに激しい夜と一緒に過ごしたのに……舞さん、なのはちゃんがそんな冷たい子に育っちゃうなんて悲しいっ！ 泣いちゃう！」

「だから、誤解を招くような言い方しないでくださいってば!！」

大袈裟な泣き真似をする舞になのはが慌てて抗議するが、もちろん舞は気にしない。

ちなみになのはと舞は、なのはが幼い頃からの知り合いで、彼女が戦技教導官を目指す時によく舞が相談に乗ったりした仲である。決してやましい関係は無い。

だから、長い付き合いであるのはも、自分がからかわれている

事は分かっているのだ。

ただ、内容が内容だけに無視する事が出来ないだけで。

「ちょっといいかしら、舞？」

「ん？ 何、マリーナ？」

「マリーナさん！」

そうして舞がなのはを暫くからかっていると、不意にマリーナが口を挟む。

割って入ってきた彼女に、なのはは味方が来たと目を輝かせた。しかし。

「ちょっと“腰取り胸取り”とか“ねっとり”とか、“激しい夜”のあたりを詳しく教えてくれる？」

「味方だと思ったらマリーナさんも敵だった!!」

「……いくらまでなら出せるかしら？」

「そうね……100円でどう？」

「安っ！？ 私の過去安っ！？ っていうか人の過去を売り買いしないでください！」

「そうよ。マリーナってばひどい」

「舞さんですよね！？　むしろ舞さんが主犯ですよね！？」

「全く、舞ってば酷いわねえ。なのはちゃんもそう思わない？」

「マリーナさんですから！　2人とも共犯ですから！！」

顔を真つ赤にして猛然と抗議するのは。

しかし、彼女の抗議が受け入れられることは終ぞ無かったという。

●陸士訓練学校のドタバタな日常。

第4話　『教育実習生が美人だと、何か嬉しいよね』

舞とマリーナによるなのは弄りがひとしきり続いた後。

なのはに抱きついたまま、彼女をからかい続ける舞の襟元が突然誰かに掴まれる。

「何を騒いでいるんだ、左にマリーナ」

「きゃんっ」

「あら、どうしたのエリス？」

「教官室で騒いでいるから見に来ただけだ……まったく」

舞の襟首を掴んだまま溜息を吐くのは、肩口で揃えられたグレーの髪と、左目につけている眼帯が特徴的な女性——エリスこと、エリスティン＝カルヴィン。

今襟首を掴んでいる舞やマリーナの同僚で、舞と同じ基礎訓練の担当教官だ。

「廊下の向こう側まで丸聞こえだったぞ。というか実習生をからかうな」

「別にからかってないわ。スキンシップよ、スキンシップ」

「あんなスキンシップがあつてたまるか」

悪戯っぽく笑うマリーナを責めるように見つめ、エリスは溜息を吐いて言葉を続けた。

「大体だな、マリーナはともかく左は年長者だろう。何故率先して騒いでいるのだ」

言いながら、エリスは次に自分が首根っこを掴んでいる舞のほう

に視線を向ける。

その視線を受けながら、舞は口を尖らせてぶーぶー不平を漏らした。

「だってー、なのはちゃんの反応が可愛いんだもん。私、可愛い女の子大好きだしー」

「可愛いって誉められてるのに全然嬉しくない！ 不思議！」

「なのはちゃん、すっかりツツコミが板について……」

「マリーナさんも原因の筈なのに、まるで第3者みたいな発言！ 不思議！」

「うんうん。この調子ならなのはちゃんも立派なツツコミ役になれるわね」

「私は教官資格の実習生なのに、ツツコミ役として認められた！ もうどうにでもなれ」

両手を挙げて何かが吹っ切れた笑顔のなのはに、マリーナは水口リと目元から零れた涙を拭う。彼女がそうだった原因の一端は自分にある、という事実は見ないことにしているらしい。

そんなマリーナに溜息を吐き、エリスは気の毒そうな視線をなのはに向けた。

「お前も大変だな、高町」

「うう、お気遣いありがとうございます。エリスさん」

「ツツコミ、頑張れよ」

「はい……ってそっちを頑張るんですか!？」

「冗談だ」

驚きに声を上げるのはを見て、エリスは小さく笑いながら彼女の肩を叩く。

それで自分がかかわれているのだと気づき、なのはが再び頬を膨らませ、舞たち3人はそんな彼女を見て謝りながら笑うのだった。

「も、もう！ エリスさんも舞さんもマリーナさんも酷いですよ！」

「くつくつ……いや、本当にすまないな高町」

「なのはちゃんの反応が可愛いから、仕方がないのよ」

「ねー？ 私達みんなのアイドルだもの」

「うー、エリスさん、助けてーっ！」

「まあそう言っな。左もマリーナも、どちらもお前が好きだからこそなのだし」

謝りながらも笑っているエリスと、満面の笑みで頭を撫でてくる舞とマリーナ。

なのはも抵抗はしてみるが、2人を相手に抵抗しきれものでもなく、何だかんだで頭を撫でられてしまうのだった。しかも、本能的にもちよつと嬉しかつたりするらしい。

高町家の末っ子という事もあり、基本的に愛でて貰うのは好きなのだろう。

ただし、なのはもただやられっぱなしで居ることを良しとする女ではない。

「エリスさん！ 助けてくれたらコレあげますから！」

「何を……っ！！ そ、それは……！」

エリスに助けを求めながら、なのはが差し出した物。

それは、『月刊 にゃんこ大百科』というタイトルの1冊の雑誌だった。

もちろん舞やマリーナは特に反応を示さないが、それを見た瞬間エリスは目の色を変えて声を上げる。

「にゃんこ大百科の中で唯一発行部数が少なく、いまや猫好きの間では数十万という値段で取引されることもある、付録として『等身大にゃんこぬいぐるみ』が付いている3月号じゃないか！！」

た、高町！ 本当にそれを与えるというのか！？ にゃんこぬいぐるみごと！？」

「助けてくれたら喜んで！」

「左！ マリーナ！ それ以上高町を弄るといふなら、私が相手になるぞ！！」

今の私は、阿修羅すらも凌駕する存在だ！！！」

なのはの返答を聞くや否や、目を輝かせてなのはを背に庇ってそう宣言するエリス。

そんなエリスを見て、舞とマリーナは苦笑が零れるのを隠せない様子だった。

「なんという変わり身の早さ、これにはおねーさんも思わず苦笑い」

「相変わらずの猫好きよねー」

もう読者諸兄はお気づきだと思うが、エリスは無類の猫好きである。

なにせ、以前訓練中に猫がグランドに入ってきた際、訓練をほっぽりだして時間が終わるまで猫と戯れていた……という逸話を持つほどだ。

エリスと付き合いの長い舞とマリーナからすれば、この程度は折込済みの事。

「で、どうするマリーナ？ なのはちゃんは十分弄ったし、今日はやめておく？」

「うーん、それはそれでいいけれど……どうせだし、もうちょっと

遊びたくないかしら？」

「あら、気が合うじゃない」

舞とマリーナは一度顔を見合わせ、それから悪役的な笑いを浮かべてエリスを見る。

ちなみになのはは、エリスの背中に隠れながら「計画通り」とでも言いたげな笑みを浮かべているようだ。意外と黒いのはであつた。

「いいわよエリス？ 私とマリーナ、2人同時に止められると思うなら、やってみなさいな」

「ただし、その頃にはもう貴女は八つ裂きになっているかも知れないけどね」

「なんか物騒なこと言ってる！？」

「もちろん私達が勝つたら、なのはちゃんを自由にさせてもらうわよ」

「【禁則事項】な事も、【検閲】とか【削除】とか、あと【巨乳こそ至高】みたいなことも」

「やめて！ この小説が18歳未満お断りになっちゃうの！-」

「よかろう！ 私に勝てたなら、好きにするがいい！-」

「やめてエリスさん！ 本人の意思を無視して承諾するのやめて！」

何故かノリノリで売り言葉に買い言葉を交わすエリスと舞たち、そしてその間に入って必死にツツコミを入れているのは。半分自業自得だが、少しだけ可哀想。

とにかく、3人の間に走る緊張が膨れ上がり、本当にぶつかり合う……そう思われたその時。

「左きょうかーん、やりたくもない補習のプリントが終わったんで持ってきましたー」

「ハヤト、自業自得なんだからもう少し反省しようよ」

「自業自得って、別にテストを白紙で出ただけじゃなーか」

「何故そんなことをしたし」

「前日ゲームで徹夜したせいで何も分からなかった。だからつい力ツとなってやった。」

後悔もしていないし反省もしていない。多分次のテストも同じような事をする」

「はああ……次はティアナとかにも手伝ってもらって、是が非でも勉強させなきゃ」

教官室のドアを開け、2人の少年達が絶妙なタイミングで入って

きた。

入ってきたのはへらへらと笑っているハヤトと、大方ハヤトに無理やり付き合わされたのであろう、憂鬱そうな顔で溜息を吐くリオス。

「ああ！ ハヤト君にリオス君、丁度いいところに！」

「「え？」」

「「「……………」」」

天の助けとばかりになのはが2人を呼び、2人はなのはの方……つまりは向かい合ってゴゴゴゴという擬音つきな効果音を出しているエリスたちを見た。

そして――

「左教官いなかったな。仕方ない、今日は帰るか」

「そうだね。帰ったら何しようか？」

「今日はパワプロでもやるかなー。コントロールG、最高球速200キロのピッチャー作ったんだよ。

もう全然狙い定まなくなつて死球連発しててマジ笑える」

「なにそれこわい」

見なかったことにして教官室から立ち去ろうとした。

「ちょっと待って！ この状況スルーしちゃうの！？ てゆーか待って！ 本当に待って！！」

もちろん本当に帰られては堪らないので、なのはは必死になって2人を呼びとめる。

呼び止められた以上さすがに無視する訳にもいかず、ハヤトとリオスは足を止めて、ちよつと嫌そうな表情でなのはを振り返った。

「なんですかー、高町教官」

「僕達、できれば帰りたいなーって思うんですけど」

「そ、そんな事いわないで助けてよう。このままじゃ私、凄い事されちゃうかもしれないの」

涙目になって訴えるなのは。

一応焚きつけたのは彼女だが、流石にここまで事態が大きくなるとは思ってなかったらしい。

まあ、普通あそこまで悪ノリするとは思わないだろう。

「助けるって言っても……なあ？」

「力になってあげたいのは山々ですけど、僕らじゃ舞さん達はちょ

つと……」

「ううう……確かに、冷静に考えてみればそうなの……」

ふざけてはいても舞もマリーナもエリスも教官なのだ。

さすがに訓練生達との実力差は歴然としている。そんな教官を3人も相手に止めろ、というのは些か無理なお願いだっただろう。しかし、なのはもなのはで必死なのだ。

「も、もし何とかしてくれたら、なんでもしてあげるから！」

だからなのはは、ついそんなとんでも発言をしてしまった。それが更なる混乱を呼ぶ事になるとは露知らずに。

「マジで！？ パンツ貰うとかもオツケーですか！？」

「えっちなお願いは却下！」

「なんだ、ただの嘘か」

「いや……普通にハヤトの想像が最低なだけだよ」

「男なら誰でもこういう発想するだろ………するだろ………」

自分の欲望を一言で却下されて泣き崩れるハヤト。

考えている事はアレだが、男ならば仕方ない。誰だってそうする、俺もそうする。むしろなのは程の美少女を前にしてそういう事を思わないほうが失礼だと思うのだがどうだろうか？

いや男ならばきつと誰しもが思うだろう。思わない奴は男としてどうなのか。

……閑話休題。

「じゃあ、止められたら次の模擬戦で手加減してもらって事で」

「うん。よろしくね、ハヤト君、リオス君！」

「どこまで出来るかわかんないですけど、頑張ります」

「頑張れリオス！」

「ハヤトも来るんだよ！」

「えー……」

暫くなのはと交渉を繰り返し、仮に止められた場合の報酬を約束したハヤトとリオスは、未だに睨みあっている舞たち3人の元へと向かう。

そして3人のすぐ側までやってくるが、睨みあっている3人はお互いを牽制するのに忙しく、ハヤト達に反応しようとはしない。それを確認してからハヤトとリオスは一度互いの顔を見て頷き、それぞれの懐から最終兵器を取り出した。

「左教官、やめてくれたらこの『ドキッ！ 美少女だらけの水泳大会、ポロリもあるよ！』のDVDを差し上げますぜ！」

「マリーナさん！ この『新型バイクモーターショー招待券』を上げますから、やめてください！」

「そしてカルヴィン教官には、こちらのゲーセン限定『にゃんぐるみ』各種を！」

どうやら舞とマリーナとエリス、それぞれが好きな物を餌に止めさせようという作戦らしい。

しかし、3人はハヤトとリオスの方を見て鼻で笑いながら答えを返す。

「はっ！ その程度で私たちが釣れると思わない事ね！」

「ええ。まったく、教官を相手にふざけた事をするわ」

「元々私は高町から貰う物があるからな、今更そんな物など……」

「くっ……やはり失敗か！？」

「やっぱり古典的過ぎたかな」

舞たちの反応に作戦失敗かとハヤト達が渋い顔をする。だが――

「さて、それじゃあ私は仕事があるから戻るわ。ハヤト、それは後で私の机に置いてね」

「そうね。私もちよつと仕事しなきゃ。あ、その招待券もらえるかしら」

「おっと、そういえばまだ片付けてない書類があつたな。仕方ないからそちらをやらねば。」

……ああ、にゃんぐるみは有難く受け取らせて貰おう。断るのも勿体無いからな」

—— 3人はそれぞれ適当ないい訳をしながら自分の席へと戻っていく。

もちろん、3人ともハヤトとリオスが提示した商品を受け取る事は忘れない。

「……ええー」

「ま、まあ作戦成功って事かな？」

「チョロすぎだろ教官達、明日からチョロインって呼ぼう」

「わ、私の気苦労って一体……」

「なのはさんのは自業自得じゃありません？」

「うう、リオス君が意外と辛辣なの」

最後にそんな感想を残し、放課後の教官室騒動は終わりを見せたのだった。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……だった気がしたが、そんな事は無かったぜ！

・今日のおまけ

【エリスとにゃんこ＋ハヤト】

エ「……」くっ

ぬこ「にゃーん」

エ「はぁぁ……可愛いにゃぁ、可愛いにゃぁぁぁ……」
ほーら、こっちおいで！。にゃんにゃーん♪

ハ「ぬう……！　これがギャップ萌えか……！」

エ「お前は失せろ」

ハ「（・ω・）」

【舞とマリーナ】

舞「……ねえ、マリーナ」

マ「なあに？」

舞「可愛い女の子って、いいわよね」

マ「そうね、素晴らしいと思うわ」

舞「同士よ……」

【なのはとリオス】

な「リオス君、さつきはありがとうね」

リ「あ、そ、そんなことないですよ!」

な「お礼に、今度一緒にデートしてあげようか?」

リ「うええっ!?!」

な「ふふっ、冗談だよ、じょうだん♪」

リ「……そういう心臓に悪い冗談はやめて頂きたい。死んでしまします」

第4話 『教育実習生が美人だと、何か嬉しいよね』（後書き）

やっと書けたー……けど、まだ教官枠全員出せてないという。
どうも、ラモンです。

今回は教官枠の女性3人と、原作キャラからは高町なのは嬢にご登場いただきました。

本当は教官枠だけで話を作りたかったんですが、中々上手く出来なかったので、何回かに分けてやる事に。

ちなみに、この作品でなのはの年齢は17歳です。

この頃は戦技教導官の資格持つてるだろ、とか年齢おかしくね？
と思われるでしょうが、こまけえことはいいんだよ！ の精神で見逃してくださいお願いします（汗）

応募して頂いた作者の皆さん、何か自分のキャラでご不満な点などございましたら、メッセージなどで教えてください。

場合によっては最初から書き直しかしますのです。

さて、次回は教官枠の男性陣と、上級生枠の2人を登場させたいです
すね。

活動報告で色々とアイディアも頂きましたし、それを元に頑張って
書きたいと思います。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなど
でお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第5話 『パーティーゲームの友情破壊率は異常』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

訓練校にも休日というものは、当然ながら存在する。

この休日を使って、訓練生達は実家に帰ったり友人と町に繰り出したり、それぞれが思い思いの方法で青春を謳歌しているのだ。中には恋人同士でデートとしゃれ込むリア充も居る。爆ぜろ。

ともあれ、そんな青春を謳歌する訓練生達の一日を追ってみよう。

「おい、さつきからヨッシー使ってんの誰だよ。いい加減崖んトコで人のこと卵にして捨てた上に、戻ってきたところで投げのコンボばつかすんのやめろ、ぶっ殺すぞちくしょう」

「ホームランバットを手に入れた、それまではまだ良いのじゃ。問題は、それを持った瞬間に画面端で待ちプレイをした拳句にハメ技を使ってくる奴がいることじゃな。」

いい加減にせんと、いかに温厚なわらわもキレルぞ」

「てゆうかさつきから私がピンチになると見逃さずに3人で集中攻撃ってなんなの？　これはあれ？

つまり私にリアルファイトを申し込んでるって訳なのかしら？

いいわよ？　買うわよ？

原型も留めないくらいに電撃で黒焦げにしてあげるわよ？」

「負け犬の遠吠えなんて聞こえないっていう。ででででっていう（緑の恐竜風に）」

いきなりギスギスした空気を醸し出しているのは、いまや懐かしい某大乱闘ソフトをやっている、ルーク、ゆず、ミコト、ハヤトの4人だ。4人の側ではリオスと美卯、京谷の3人が見学している。折角の休日に行くこともなく、青春真っ盛りの男女がこれでもいいのかと思わなくも無いが、まあこれはこれで青春ということなのだろう。

「ねえ、そういうギスギスしたのやめようよ。何で4人とも仲良くゲーム出来ないの？

楽しくゲームしようよ……」　　というかハヤトはマジで自重しようよ」

いますぐにでもリアルファイトに突入しそうな4人を見ながら、

リオスが盛大に溜息を吐く。

「ハヤトは格ゲーでも厨キャラを平然と使い、初心者相手に全力でくる真性の糞野郎だからな。

ある格ゲーの話だが、初心者の俺に対して迷いもせず『金ジョニー』を使ってきた時は、流石の俺もコイツ今すぐ殺してやろうかと本気で思った。むしろ止められなかったら殺ってた」

「桃鉄やった時も酷かったもんね……」

「ありとあらゆる妨害カードの断続的使用はもちろん、新幹線カードなんかの進行系カードを使いまくって他人に貧乏神をなすり付けた後の、躊躇の欠片もない全力逃走。拳句にわざわざキングボンビーにしてからなすり付けるなんていうのも日常茶飯事」

「あの時、僕が止めなかったら間違いなく美卯はハヤトのことぶっ飛ばしてたよね」

過去にあったハヤトの悪行を振り返り、怒りを新たにする京谷と美卯。

やってきた事を考えてみれば、正直今すぐぶん殴られても決して文句は言えないだろう。むしろ友人全員に絶交された拳句、クラス全員から無視されても何一つ文句は言えない所業だ。

「でも、その割にハヤトってこういうゲームだと1位はあんまり取らないよね？」

「別に1位狙ってる訳じゃねーしな。ぶっちゃけ俺の妨害に腹を立てて、復讐しようとして頑張った拳句に不本意な結果になって落ち込む様を眺めるのが凄く楽しいだけだ。

前回の桃鉄の時、ゆずが俺にキングボンビーをなすり付け返そうとした拳句、最終的に最下位になって凹んでいた時なんぞ絶頂すら覚えたね！」

「『最低だコイツ……』」

悪気の欠片も見せずに齒を輝かせるハヤト。

それを見て、リオス達見学組は頭を抱えることしか出来なかった。そうこうしている間にもゲームは続き、戦況はいよいよ終わりが見えてくる。

「くうっ、このままじゃわらわが負けてしまうのじゃ！ こうなったら……」

と、そこで最も追い詰められたいたゆずが、叫びながらおもむろに手を伸ばす。

そして――

「秘技！ コントローラー外し！！」

「ああっ！？ ちょっとゆず、何すんのよ!？」

「ちよっ、お前ソレ反則だろ!」

ハヤトとルーク、ミコトのコントローラー端子を思い切り引っこ抜いた。

もちろんコントローラーを挿してなければゲームは出来ない訳で、ハヤト達の操作していたキャラは画面の中で沈黙、ピクリとも動かなくなる。

「うはははは！ この隙にわらわが一番になるのじゃー！」

「ふざけんな、さつさと挿しなおして……っ！？ くっそ、あんにやろう！ 挿しなおせないように、コードを全部自分で持ってやがる！」

「卑怯よゆず！ ハヤトみたいなクソ外道じゃあるまいし、アンタそこまで堕ちたの！？」

「おい、ついでとばかりに俺をディスんな」

「何とでも言うがいいのじゃ！ 勝てば官軍、負ければ賊軍！ 終わりよければ全て良し！！」

過程や……！ 方法なぞ……！ どうでもよいのじゃあ……っ……！！」

勝利を確信して高笑いを響かせるゆず。

しかし、そうは問屋が卸さない。こういう場合、えてして他のメンバーが取る行動は決まっている……というかやる事はひとつしかあり得ない。

「共鳴術技、電源オフ」

「にゃーーーーーっ!?」

そう、電源を切る事だ。

これはコントローラーを抜かれた人間が行う最終手段であり、そして同時にリアルファイト開戦の合図ともなる危険な奥義。しかしルークはそれを一切の躊躇なく断行した。

恐るべき勇気である。

「くきーっ！ もう許さんのじゃ！ お主ら全員表にでるのじゃーっ！」

「じょーとーだゴルアッ！ ボッコボコにしてやんよ！」

「ゲームでの恨み、晴らさせてもらおうじゃないの！ 特にハヤト！ アンタは潰す!!」

「やれるモンならやってみるやド貧乳！ 前と後ろの判別もつかない奴になんざやられるか！」

「……やっぱりこうなったか」

歯をむき出しにしていがみ合う4人を見て、観戦組だった3人は盛大に溜息を吐くのだった。

●陸士訓練学校のドタバタな日常

第5話 『パーティーゲームの友情破壊率は異常』

さて、所変わって第4陸士訓練校のグラウンド。

そこでは4人の男女……ハヤト達が、それぞれ自分のデバイスを構えて向き合っていた。

どうやらあのままの流れで、本気の喧嘩をすることになったようだ。しかもデバイスまで持ち出すあたり、4人の全力振りが伺えるというもの。決して大人気ないと思っではいけない。

「ふん、どうやら本気みてえだな。まあいいさ。

前々からお前らとは、一度ちゃんと肉体言語で話し合いをしなきゃと思っってたんだ」

「あら、奇遇ねハヤト。私も前から一度、アンタをきちんとぶちのめさなきゃって思ってたのよ」

「ゲームの恨みは恐ろしいのじゃ！ ボッコボコにしてやるからの！」

「俺も流石に今回ので結構色々溜まってたからなあ……たまには発散させてもらっぜ」

もはや4人は臨戦態勢、ちょっとした合図があれば今にも戦いが始まりそうな勢いだ。

ゲームひとつでココまで本気になれるのも、ある種の才能ではなからうか。

「ああもう、やめなよハヤトにルーク！ 流石にみつともないってば！」

「止めないでくれリオス！ これは俺のプライドが掛かった、大事な戦いなんだ！」

「そうだぜ、こればかりはいくら幼馴染のお前でも止められん！」

「ええ」

「ゆずとミコトも落ち着きなさいってば、ゲームくらいで熱くならないで」

「美卯は黙ってて！ 負けそうになったからコントローラーを抜くとか、そういう卑怯な手を使うのってホント許せないのよね、私」

「なにを言うか！ そっちも負けそうになったからと言って、電源を切ったではないか！

お互い様……いやむしろミコトの方が性質が悪いのじゃ……！」

その4人の間に立って、リオスと美卯が必死に止めようとするのだが、どうにも上手く行かない。元々ハヤトに対する鬱憤が溜まっていたせいもあり、説得は中々難しい。

ちなみに京谷はと言えば、既に説得は諦めているのか遠くの方でベンチに座りながら携帯端末を弄っている。側にはどこからか買ってきたジュースやらお菓子やらがあり、完全に観戦モードだ。

「手は一切抜かねえからなハヤト。いつぞやの桃鉄でキングボンビーを10連続でなすり付けていった恨み、今ココで晴らしてやる！フルボッコだ！」

「はっ！カードも使わずにトロトロやってるのが悪インだろうが！ゲームじゃ俺に勝てねエクセして、吼えてンじゃねエぞ三下がアッ！！」

「大体前から微妙に許せなかったのよ！私より身長低いくせに、何でアンタの胸の方が【規制】センチも大きいのよ！Dカップ！？ふざけるなー！」

「ヲホホホ！持たざる者の嫉妬は見苦しいのう！？悔しかったら、わらわと同じくらいの“ないすばでー”になつてから出直してくるんじゃないか！」

最早売り言葉に買い言葉。4人のボルテージは留まるところを知らずに上がっていく。

リオスと美卯も何とか止めようとしているが、既に2人の言葉はハヤト達の耳には届いていない。

それでも諦めずに止めようとする辺り、リオスと美卯がいかにも苦
労性かが伺えるというモノだ。頑張れ2人とも、きっと未来は明
いぞ。

「うう、どうしよう山城さん。もう僕らじゃ止められそうにないよ」

「誰か教官がここに居てくれれば……」

「俺でよければ居るぞ？」

「「へ？」」

自分達では止められないと悟って嘆く2人の呟きに、背後から突
然の声が返ってきた。

「よし」

「あわわわ、バルトさん！？」

「な、なんでココに！？」

聞こえた声に2人が驚きながら振り返ると、そこには跳ねた短い
黒髪を撫で付けている壮年の男性がニヤニヤと笑って立っていた。
彼の名前はバルト＝アルヴェン。

第4陸士訓練校の校長を務めており、豪放磊落な性格で訓練生達
からの人気も高い。

「何でって、教官が訓練校に居るのは普通だろうがよ。まあ実際には仕事があったからなんだが、そんで来てみればなんか騒いでるから、気になって見に来たって訳だ」

「なるほど……でも助かりました。バルトさん、ハヤト達を止めてくれませんか？」

「何かゲームで白熱しすぎたみたいで……みつともないし、情けないですし」

天の助けと思えるタイミングで現れたバルトに、リオスと美卯が助けを求めてすがりつく。
確かにゲームが原因でリアルファイトというのはあまりにも情けない。

「ん？　どういう事だ、話が見えねえぞ？」

「実はかくかくしかじかで……」

「まるまるうまうま、って訳か。なるほど、ロックウエルの奴が見えたから、なんとなくそういう理由なんじゃねーかとは思ってたんだが……ホント情けねえな」

「返す言葉もありません」

リオスと美卯から事情を聞き、やれやれと大きな溜息を吐くバルト。

「ったく仕方ねーなあ。どれ、俺がちょっと言っただけやあ」

「お願いします!」

2人に頭を下げられ、仕方ないと言った表情で睨みあっている4人へとバルトが近づいていく。

その間にもハヤト達のボルテージは毎秒単位で上がっており、バルトが近づいた頃にはちょっとした刺激で爆発するような危険物的雰囲気さえ纏っていた。

「おうおう、物騒な雰囲気だなあお前ら」

「ガルルルルル……」

「フシュー……」

「にゃー!」

「キシヤー!」

「動物かよ、とりあえず俺の話を聞けって」

すでに言葉すら発することなく鳴き声で威嚇しあう4人に苦笑し、

バルトが口を開く。

その光景を見て、リオスと美卯はようやくこのくだらな過ぎる騒動にも終止符が打たれる、そう思って安堵の笑みを漏らした。

しかし、ただ1人この状況を遠くから見守っていた京谷だけは、違う感想を口にする。

「……絶対ややこしい事になるよな、これ」

自分で買ってきた飲み物やお菓子を口にしながら、楽しくなってきたと呟く京谷。

そして京谷の言うとおり、バルトは決して『ハヤト達を止める為』に近づいた訳ではなかった。

前述したとおり、バルトは訓練生達からの人気が高い。ただし、それは何も彼の性格だけが理由ではないのだ。

「なにはともあれ、まずはお前ら落ち着けよ。事情を聞いたから気持ちはわかる。

でもよお、そんなことしたって何も変わらねーぜ？ 少しは冷静になれよ。いいか？ そうやっていがみ合っていても何も始まることはねえんだ。

とりあえず、俺が何を言いたいのかというと……」

彼の人気が高い理由、それは――。

「ラウンド1！ ファイツー！！」

「えええええつつ!?!」

——異常なまでにノリがいいから、だったりする。

「見敵必殺うううつつ!」

「わらわのこの手が真っ赤に燃えるううう!」

「私が! 私達が! ガンダムだ!」

「気持ちだけで……一体何が守れるって言っただつ!」

バルトの合図と共に、ハヤト達全員が一斉にお互いに向かって全力の攻撃を放つ。

ある者は砲撃で、またある者は斬撃で。思い思いに自分が持つ最強の技を、憎いあんちくしょう目掛けて一切の遠慮なくぶつ放した。直後、お互いに放った技がぶつかり合い、グラウンドに大きな爆発音が響く。

「何やってんですかバルトさああんつつ!?!」

「い、いいから退避するよりオス! ハヤトはともかく、あとの3人の全力に巻き込まれたらちよつと洒落にならないから!」

こんな状況でも律儀にツッコむリオスを引っぱりながら、美卯が全力で爆発が起きている被害圏内から退避し、京谷が座っているベンチまで戻ってくる。

「お疲れ。やっぱこうなったか」

「きよ、京谷、こうなるって分かってたなら、もっと早くに止めてくれたって……」

「いやいや無理だって。バルト校長が見えた時点で絡んでくるのは分かってたし、そうなたら絶対に俺じゃ止められねーよ。クラス委員とかの集まりでも、絶対に誰も止められねーもん」

カラカラと笑う京谷にリオスが抗議するも、京谷は苦笑しながら肩を竦めるだけだ。

彼の言うとおり、京谷はクラス委員の仕事などでバルトに接する機会が多く、その度に色々と騒動に巻き込まれたりしているのだ。だからまあ、今回こうなるのも想定の範囲内だったのだろう。

「あの人、こういうトラブルとか結構好きだからなあ」

「あ、そういうば聞いたことあるわね。バルト教官って基本的には真面目なんだけど、こういう場面だとももの凄く悪ノリするって」

「そういう事だ。まあ見てる分には面白いし、いいんじゃないか？ どうせ後で怒られるのもハヤト達だけになるだろうしさ」

「問題の論点がズレてると思うけど……あれ？　そういえばバルト校長は？」

そこまで話したところで、この騒ぎの合図となった人物——つまりバルトがこの場に居ない事にリオスが気付き、辺りを見回した。しかしどれだけ見回しても、リオス達の近くにバルトの姿は無い。どこに行ったのかとリオスと美卯がキョロキョロ周りを探していると、笑いをかみ殺した京谷が「あっちあっち」と爆発が起きているグラウンドを指差す。

「「！？」」

そちらを向いた2人が見たのは、ボロボロになってグラウンドに倒れているバルトだった。

どうやら先ほどの爆発に巻き込まれてしまったらしい。

「真っ先に爆発に巻き込まれてあの状態になってたな。いやぁ酷い酷い」

「自分で煽っておいて真っ先に巻き込まれるって……」

「何そのやるせない結末……あれ？　何か涙出てきた」

あんまりと言えばあんまりなバルトの結末に、思わず涙する美卯とリオス。

もつともバルト自身はボロボロな見た目に反して実際ダメージは大したこともなく、倒れているのもなんとなく空気を讀んだからだったりするのだが。

「焚きつけた文句を言おうとしたのに、あんな状態じゃ何もいえないじゃない……」

「案外それが目的だったのかもな」

「バルトさん……作戦だとしても、わざわざそんな作戦選ばなくてもいいのに」

「いやー、どうせならひよっ子どもの成長具合も体で確かめてみようと思っただけ」

「……っ!?」「」

呆れた声でリオス達が呟く瞬間、3人の隣からグラウンドで倒れていた筈のバルトの声がした。

驚いた3人がそちらを向くと、そこには先ほどまでボロボロになつて倒れていた筈のバルトが、もはや喧嘩などという生易しい言葉では語れない惨状になっているグラウンドを見て、ニヤリと不敵な笑いを浮かべながら腕を組んで頷いている。

「バ、バルトさん!? 大丈夫なんですか!？」

「ああん? お前らひよっ子どもの攻撃なんざ、どんだけ喰らって

も痛くも痒くもねえよ」

「でも、さっきはボロボロになってたような……？」

「ネタだよネタ。お前らのリアクションも見れたし、満足したからやめただけだ」

「は、はあ……。でも、それをやる前にちゃんと止めて欲しかったです」

「むしろ焚き付けちゃったし……」

がつくりと肩を落として溜息を吐くりオスと美卯。だが、バルトはそんな2人の言葉を聞くと、いきなり真剣な顔になり、声を低くして口を開く。

「いいか、コーネルドに山城。不満ってヤツは、ぶちまけりやいいってモンじゃねえが、溜め込みすぎればいつか必ずどつかで爆発しちゃうもんだ。そうなる前に、こっやってちよくちよくガス抜きしてやるってのは、意外と大事なんだぜ？」

「バルトさん……」

「部隊で一緒に仕事してればな、こっいうくだらねえ理由が原因の喧嘩なんざしょっちゅうだ。」

俺もまあ、確かにちよいと悪ノリしちゃったけど、こっいうのも覚えという損はないぞ」

「そう言われてみれば、確かに……」

「すみません、私たちバルト教官を誤解してました。
てつきり、見ていて楽しいからやってるんだとばかり……」

真剣な面持ちで諭すバルトに、リオスと美卯は尊敬の眼差しを向けて目を輝かせる。

一見面白がってやっていたとしか思えない行動に、自分たちでは及びもつかない深い考え……しかも教官の鑑としか思えない理由があったのだから、当然かも知れない。

「いや、確かに楽しいからってのもあるんだけどな」

「「台無しだー……っ!?!」」

まあ、直後にバルトが漏らした言葉で、文字通り台無しになってしまったのだが。

「だってお前、こんな馬鹿騒ぎをあつさり収める手はねえだろ？
やっぱ騒げる時には騒いでおかねえとな!」

「だとしても、そういう本音は隠しておきましょうよおっ!」

「馬鹿野郎! 自分の生徒相手に隠し事なんて出来るか!」

「こんな場面じゃなければ、素直に感動できる台詞なのに……」

「さっきまでのギャップと相まって、駄目人間のいい訳にしか聞こえない……うう」

豪快に笑いながら教官としての威厳をどんどん削っていくバルト。そんな彼を見て、リオスと美卯はさっきとは別の意味で、ポロポロと涙を零すのだった。

さて、一方その頃京谷はと言うと。

（あー、ツツコミ役が他に居ると楽だわー。あ、ハヤトが3人の同時攻撃を受けて吹っ飛んだ。

アレは入院コースだなー……まあ、アイツ回復力は人間やめてるから、1時間もすれば普通に回復するんだるうけどさ。とりあえずあのまま巻き込まれると大変だし、回収しといてやるか）

カオスになっていく自分の隣と、戦場の様相を為していくグラウンドとを交互に見やりながら、自分で買ってきたお菓子を食べつつのんびり観戦と洒落込んでいた。

一応フオローなどをするあたり、ちゃんと心配はしているようだ。

ちなみに今回起きた喧嘩の最終的な勝者はルーク。

ハヤトは真っ先に吹っ飛ばされて脱落。その後、ゆずとミコトは持つ者と持たざる者、決して相容れない人種同士の激しい戦いの結

果ダブルKOとなった結果である。

その後、バルトも含めて全員が怒られたのは言うまでもない。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……じゃなくていいやもう。

・今回のおまけ

【バルトとハヤトとルーク】

ハ「こーちよー！ 左教官に追われてるんで、ちよいと匿ってくだ
せえ！」

ル「こつちには誰も来なかったって言うだけでいいんで！」

バ「ああ？ どうせまた何かやったんだろ。ちゃんと怒られてこい
よ」

ハ「そんな事言わずに助けて！」

ル「ポツチーあげますから！」

バ「左ー！ ここにロックウェルとリーゼンベルグがいるぞー！」

ハ&ル「ちくしょー！ 裏切りものー！」

バ「いや、教官として普通のことだろ」

【ゆずとミコト】

ミ「ねえゆず、どうやってたらそんな聞き分けの無い大きさになる訳
？」

ゆ「んみゆ？ よく食べてよく眠る。それが一番じゃな。それ以外
は何もしておらぬぞ！」

ミ「……チツ、頼りにならないロリババアだわ」

ゆ「ババアって言うにゃーっ！！」

【リオスと美卯と京谷】

リ「うう、今日も僕ツツコミばかりだった……」

美「ど、どんまいだよリオス。きっと明日はいいことあるって!」

リ「……そうだね。山城さん! これからも同じツツコミ役として頑張ろうね!」

美「あ、私ツツコミ役は勘弁して欲しいな……なんて思うんだけど」

リ「(´・ω・´) < 酷い裏切りを見た」

京「まあリオスが居るかぎり、俺と美卯はツツコミやらなくていいから助かるしな」

リ「京谷まで酷いつ!?!」

第5話 『パーティーゲームの友情破壊率は異常』（後書き）

桃鉄、スマブラ、人生ゲーム、ドカポンでの友情破壊率は異常。メーカーが狙って作っているとは思えない。
どうも、ラモンです。

今回は新キャラが1人しか出せませんでした……本当は、今回でまだ出せていない人たちを全員出すつもりだったのに……（汗）
それはともかく、今回初登場だったのは、男性教員枠で第4陸士訓練校の校長をやってもらう、バルト＝アルヴェンさんでした。

本当は、もっと頼れるナイスガイなのですが、ノリで書いていたらからかうのが大好きなおじ様に……。ジャンヌさん、問題ありそうでしたらすぐにお知らせください。書き直しますです。

さて。次回では今度こそ、まだ出せていない応募キャラの皆さんを全員出したいところです。そしてキャラ紹介を書いて、それからが本番……という感じですので、早いところ書きたいですね。

それではまた、次の話で。

自分のキャラの扱いに納得いかない場合、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。出来る限り修正します。

第6話 『学園のマドンナって、ゲームの中だけの存在だよね』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

「ちーっす」

「こんにちはー！」

一日の訓練が全て終わった後——つまり放課後。

訓練校で放課後は使われない教室のひとつの扉を開き、ハヤトとソフィアの2人が教室の中へと入ってくる。2人の挨拶に、教室の

中で自分の手元に視線を落としていた人物が、ドアの方へと視線を上げる。

「おー、お前らか」

女性と見紛う程に長い紫銀の髪を揺らし、髪と同じ紫色の瞳で2人を見て声を上げたのは、ハヤト達の1年先輩である少年、ヴィレイサーセウリオン。

やや気だるげな目で自分達を見つめるヴィレイサーの姿を見て、ハヤトとソフィアは感心したような顔で口を開いた。

「セウリオン先輩、相変わらずはええッスね」

「ねー。私もハヤトも、授業終わるのと殆ど同時に来たのに」

「あ？ あー、そりや当然だろ。お前らよりも俺の方がここに近いんだし」

ヴィレイサー達の教室はこの教室の斜め前。対してハヤト達の教室はひとつ下の階。

同時にスタートしたとして、どう頑張っても2人がヴィレイサーより先にこの教室にたどり着くのは、それこそ超能力でも使わない限り不可能だろう。

「つーか前にも説明したと思うんだが」

「いやあ、俺ってどうでもいい事は3秒で忘れる人なもんで」

「私も結構忘れっぽいんですよ」

「そうかい。まあ、どうでもいいさ」

似たような仕草で頭を掻くハヤトとソフィアに肩を竦め、ヴィレイサーは再び視線を手元に落とす。

それを見て、2人は自分の荷物を適当な席に置き、それぞれ鞆の中からBSPを取り出し、ヴィレイサーの近くの席へと座って楽しそうに声を掛けた。

「先輩先輩、何やってるんですか？」 良かったら、私と一緒に桃鉄やりませんか？」

「いやいや先輩、俺と一緒にモンハンか神喰やろうぜ！」

「どっちもやらねえよ、めんどくせえ」

「「えー！」」

手元のBSPを操作しながら、ヴィレイサーはハヤト達の誘いを短く断る。

断られたハヤトとソフィアが抗議の声を上げるが、取り合おうともしない。

「いいじゃないですか、一緒に遊んでくださいよヴィレイサーせんぱい」

「そうだそうだー！ 後輩いじめは良くないぞー！」

「「あーそーべー！ あーそーべー！」」

「……ガキかお前らは」

声を揃えて遊ベコールをしてくる2人に、ヴィレイサーは深々と溜息を吐いた。

まだ14歳、しかも可愛い女の子であるソフィアはともかく、16歳の男のハヤトが遊ベコールをするのは見苦しくて仕方ない。死ねばいいんじゃないかな。

しかし、暫くやってもヴィレイサーが反応しないのを確認すると、これ以上騒いでも仕方ないと思ったらしく、2人揃って口を尖らせながらそれぞれ席に座る。

「ちえー。それじゃあ仕方ないから……ハヤト！ モンハンで対戦しよー！」

「おうよ、仕方ないから俺っていうのが悲しいけど気にしない！ さあ、かかってこんかい！」

「私ランスね」

「カウンター専門の待ちプレイですね、わかります。俺は双剣で行

くかね」

「防御？　なにそれ美味しいの？　的な脳筋プレイですね、わかります」

「当たらなければどうという事はない！」

「私にも敵は見えるんだよ！」

さっきまでヴィレイサーに遊ベコールをしていた割に、あっさりと自分達だけで遊び始めるソフィアとハヤト……とは言っても、この2人がヴィレイサーに遊んで欲しいとねだるのも、それをヴィレイサーが断るのも、この3人の間では日常茶飯事なので特に気にしない。

さて。ここまで読んだ人の中には、この3人がどういう関係なのか気になった人もいるだろう。

実は……と言う程でもないが、この訓練校にも『部活』はある。ハヤト、ソフィア、ヴィレイサーの3人は数ある部活の中の『ゲーム部』に所属しているのだ。

他の部員はユウキにリオスなど、結構な人数がいたりする。ちなみに部長はヴィレイサー。

ゲーム部を作ったのはハヤトだが、信用問題云々でヴィレイサーが部長という事になった。

何でも、ゲーム部に所属する全員が「ハヤトはあり得ない」と声を揃えたらしい。泣ける。

「そついや、今日はユウキ達はどつしたんだ？」

「あいつ等なら、ゲーセンに行くって言ってましたね」

「私とハヤトは新作のゲームを買っちゃってお金ないから、今日はいけなかったんですよ」

「なるほどな……少しは計画的に使えよお前ら」

「ついカツとなって買った」

「でも、後悔も反省もしてません！」

ドヤ顔で高らかに宣言するハヤトとソフィアに、ヴィレイサーはやれやれと肩を竦めるのだった。

「よし、それじゃあ勝負だよハヤト！ 今日こそかーっ！」

「来いよベネット！ 銃なんか捨ててかかってこい！」

「ベネットって誰だよ。つかモンハン武器捨てられねえし、銃もねえから」

● 陸士訓練学校のドタバタな日常。

第6話 『学園のマドンナって、ゲームの中だけの存在だよね』

「ふっ、甘いぜソフィア！」

「にやつ！？ 何でそれ避けれるの！？」

「素人とは違うのだよ！ 素人とは！！」

「お前らうつせーよ。もう少し静かに…… あん？」

3人がこの教室に揃ってから暫く時間が経った頃、不意に教室のドアがノックされた。

聞こえた音にヴィレイサーが視線を上げると、ドアの向こうに人の影が見える。ノックされた時点で当たり前なのだが、どうやら誰かが来たらしい。

「お、誰か来たみたいだな」

「みたいッスね……うお！？ 俺の鬼人乱舞を防ぐとか、やるじゃねえかソフィア！」

「ふっふっ、私だって日々進化してるんだもん！ 男子三日会わざれば何とやらだよ！」

「お前女子だろ」

「こまけえことはいいんだよ！」

けれど、3人は誰もドアを開けに行こうとしない。

絶賛ゲーム中のハヤトとソフィアはともかく、一度視線を上げたヴィレイサーも、まあいいかともう一度視線を落としてゲームを再開し始めた。何故誰も動かないのか。

そして、少しの間を置いた後でもう一度ドアがノックされる。

「おい、ハヤト行けよ」

「いや今プライドを賭けた勝負の真っ最中なんで。ソフィア行けつて」

「いやーですー。ここで動いたら負けちゃうじゃん！

1人プレイしてるんだから、ヴィレイサー先輩が行ってくださいよう」

「やだよ面倒くせえ」

3人が座っている場所からドアまでは1メートル弱。その程度の距離を歩いてドアを開ける、その程度の行動を嫌がって互いに押し付けあうハヤト達。そうやって居る間に動けばいいのに。

「もういい、このままじゃラチがあかねえ」

「ですね。じゃあ、ここはひとつゲーム部らしくゲームで決めましようや」

「負けた人が出るんだね？ 負けないよー！」

「面倒だけど、まあいいぜ。かかってこいよ後輩ども」

ドアから響くノックの音を無視して盛り上がるハヤト達だったが、ノックをしている人物からすれば、いつまで経ってもドアを開けてもらえないどころか、完全に放置プレイ。

よほど精神的に大人な人でも、キレたところで文句は言われない状況だ。

「……すまないが、勝手に入らせてもらっぞ」

しかし、この時ノックをしていた人物の大人っぷりは半端ではなかった。

明らかにキレてもおかしくないこの状況で、語気ひとつ荒げることなく静かにドアを開き、一言断りを入れるほどの余裕さえ見せないから、その人物は教室の中へと入ってくる。

「にや？ あ、セイ先輩だ〜っ！」

「何だと！？ この訓練校の女子の中でトップの成績を誇り、眉目秀麗成績優秀スポーツ万能スタイル抜群と4拍子揃った完璧美人に

して、訓練校に通う女子の憧れの的であり、非公式ではあるがファンクラブさえ存在しているセイ「カルナード先輩か!？」

「なんでそんな説明台詞なんだよ」

「仕様です」

「そうか、仕様ならしかたないな」

教室へと入ってきたのは、ややウェーブの掛かったくすんだ、肩にかかる程度の長さをした桃色の髪を揺らし、キレ長な青い瞳が特徴的な少女。

ハヤトの説明台詞でお分かりの通り、彼女の名前はセイ「カルナード」。

ヴィレイサーの同期で、ハヤト達からすると先輩になる。

「セイせんぱーいつ!」

「おっと」

セイの事を認識した途端、ソフィアはBSPを机の上に置いて、彼女に駆け寄って勢いそのままに抱きついた。とはいえ結構な勢いがついていたのでタツクルに近かったかも知れないが。

けれどセイはそんな風に勢いをつけて飛びついてきたソフィアを、よろめく事無く受け止めた。

「こら、ソフィア。飛びつくのは危ないと、前にも言っただろう？」

「ふふふ。先輩のおっぱいが柔らかくてきもちーからいけないんですよ」

「訳がわからんぞ、というかセクハラだ」

自分の豊満な胸に顔を擦り付けてご満悦なソフィアの言い分に、セイは苦笑を漏らす。

本当ならもう少し色々と注意しなければいけないのだが、こうして懷かれてしまうと弱いのだろう。

「クール系巨乳美女×ロリ巨乳美少女……これは冬に薄い本が出るな！」

「……ハヤト、お前はホントブレねえな」

「巨乳が嫌いな男子なんていません！ セウリオン先輩だって好きでしょ！？」

「こつち振んなようぜえ。つーかお前そのうちマジで殴られるぞ」

「それはそれで！」

「うわぁ……ないわー」

一方ハヤトは抱きついていいるソフィアと、抱き疲れているセイを

見て大興奮。本人達を前にしてセクハラ発言をして、隣に居るヴィレイサーに呆れられている。

とまあそんな感じのやりとりをした後、ヴィレイサーがハヤトから視線をセイに移し、口を開く。

「ところで、何か用事か？ お前がこの部に来るとか珍しい」

「ん？ いやなに、君にちょっと用事があってな」

「俺に？」

「ああ」

首を傾げるヴィレイサーに頷きを返して、セイは自分の鞆から1冊の教本を取り出した。

それはついさっきまでヴィレイサーとセイが受けていた座学の教本で、『マリーナせんせーと学ぶ、ドキドキ 集束魔法応用編！』というタイトルが印刷されている。

なんだこれ。

なんだこれ。

「どうやらさっきの座学が終わった後、君の教本を間違って持ってきてしまったらしくてな。

帰る準備をしている際に気付いたので、こうして届けに来たんだ」

「そつなのか？ 別に俺の机にでも置いときゃいいのに」

「何を言う。教本は毎日ちゃんと持ち帰り、その日の復習をするのが基本だろうが」

当然の事を聞くなとばかりに、心底不思議そうな顔をして首を傾げるセイ。

ぶっちゃけそこまで真面目な事をしている人間は、この訓練校の中でも数える程しかないのだが、まあだからこそ彼女は訓練校でトップクラスなのだろう。

ちなみに最底辺の人間はと言うと。

「偉いッスね、カルナード先輩。俺教本とかもうどこいったか分かんねーッスよ？」

このような有様だ。

ちなみにハヤトの座学の成績は下から数えて片手で足りる上、教官全員から「コイツ本当に進級可能なのか……仮に進級したとして、管理局に入れるんだろうか？」と本気で心配されるレベルである。しかし追試でいい点を取るあたり、狙って追試を受けているのかもしれないけれど。

「……貴様はもう少し頑張れ。毎回最下位争いをしているのを、少しは恥ずかしく思っただろうだ」

「ゲームとエロこそ我が人生！そこに一切の後悔は無い！！！！」

「貴様は本当にダメだな……ヴィレイサー、同じ部の先輩として何

とかしろ」

「いや無理。つかめんどい」

ドヤ顔でサムズアップするハヤトに、呆れきった表情でセイがヴィレイサーを振り返る。

だが、ヴィレイサーはもう既に諦めているので彼女の要請を一刀両断。右手をひらひらと振って拒否してみせた。

「君はいつもそうだな。まったく……」

「大丈夫ですよ、セイ先輩。今回のテストは、絶対にいい点数を取らせるんだ！ ってティアナとか成績が良い皆で張り切っていましたから！」

「ふむ。確か君のクラスには成績優秀な人間が大勢居たな……ならば安心、か？」

「私も一緒にハヤトに勉強教えてあげますから大丈夫です！ 多分！ きつと！ そうだといいな！ 奇跡が起これば何とか！」

「どっちなんだ……やれやれ、仕方ない。何か困った事があれば私に言え。」

出来る範囲で、にはなるが手伝ってあげるから」

「やったあ！ だからセイ先輩大好きです〜！」

胸を張って自信満々に後ろ向きな発言をするソフィアの頭を撫で、苦笑するセイ。

座学の試験が近くなれば彼女も忙しいだろうに、それでもこうやって後輩の面倒を見てやれるのが、彼女が男女問わずに人気がある理由なのかもしれない。

「さて、それはともかく教本を返すぞヴィレイサー」

「あいよ。そこらへんに適当に置いてくれ。後で回収しとくわ」

「うむ。ではそうさせて貰おう」

相も変わらず適当な返事をしたヴィレイサーの言葉に頷き、セイは自分の持っていた教本を近くの机に置いて満足そうにもう一度頷いた。

「これでよし、と。それでは私はこれで帰らせてもらおうでしょうか。ヴィレイサー、ソフィア、またな」

「ああ、またな」

「先輩さよーならー」

「カルナード先輩、また来てくださいねー」

用事を済ませたセイは、最後にもう一度ソフィアの頭を撫でて教

室から出て行く。

にこやかにそれを見送ったハヤト達だったが、彼女の姿がドアの向こうに消えた後に、ハヤトはある事実に気付いた。

「あれ？ 俺いま名前呼ばれてなかったんじゃない？」

「呼ばれてなかったね」

「確かに呼ばれてなかったな」

「何で？ 俺ってカルナード先輩に嫌われてたっけ？」

首を傾げて不思議がるハヤト。

そんなハヤトを見ながら、ソフィアとヴィレイサーは一度お互いの顔を見てから溜息を吐く。

「そりやなあ……」

「セイ先輩って、五月蠅い人とか不真面目な人って嫌いなんだよ、ハヤト」

「はあ！？ 俺とか超もの静かで真面目っ子じゃん！」

「それは無いよ」

「お前、少し前の自分の行動と発言すら覚えてねえのか」

必死になつて真面目だとアピールするものの、ついさっきの発言やら行動やらを省みてみれば、その主張が図々しいモノであるかはお分かり頂けるだろう。

あれだけ騒いだ挙句に、座学では毎度最下位争いをしている男が真面目とか冗談でも笑えない。

「ちくしょう！ そんな2人してツツコミしなくてもいいじゃない！」

「ハヤトが変なこと言つのが悪いんだよ」

「そうだな。お前がトチ狂つた発言しなきゃ、俺達だってツツコミ入れねえっての」

「ねえ、ソフィアもセウリオン先輩も俺のこと嫌い？」

「嫌いじゃないが、時々ウザい」

「嫌いじゃないけど、ちょっと自重して欲しい」

「（ＴωＴ）ブワッ」

身も蓋も無い2人の発言に泣きそうになるハヤトだったが、事実なのだから仕方ない。

そんな感じでソフィア達がハヤトを弄って遊んでいると、教室のドアが再びノックされる音が響く。

「あれ？　また誰か来たみたいですね」

「千客万来だな……開いてるんで、勝手にどうぞー」

ドアに向かってヴィレイサーが声を掛けると、「失礼します」と控えめな言葉と共にドアを開けて1人の男性が入ってきた。

入ってきたその男性を見て、ソフィアは少しだけ驚いた顔をしてその人物の名前を呼んだ。

「わ、ネコ先生だ」

「こんにちは、ジュリーストンさん」

自分より年下のソフィアに向かって丁寧に頭を下げたこの男性は、コタロウ＝カギネ。

第4陸士訓練校の教官で、主に座学を担当している。濡れた烏の羽のような黒い髪と、寝ぼけているように見える黒い瞳、そして肩から先を失っている左腕が印象的な男性だ。

「どうしたんですか？　ネコ先生がゲーム部に来るなんて珍しいですねっ」

「はい。少々ロククウェルさんに聞きたい事がありましたたので、お伺い致しました」

嬉しそうに微笑むソフィアに、コタロウも微笑を返ししながら答えた。

ちなみにソフィアがコタロウを呼ぶ『ネコ先生』というのは彼の愛称で、彼と親しい人間は大半が彼をこう呼んでいる。彼が教える座学はわかりやすく、コタロウの座学を受ければ執務官試験突破も夢じゃないと噂される程だ。

それだけでなく、コタロウはある一点に置いてこの訓練校の中でも一目置かれている。

何故彼が一目置かれるのか。それは――

「お、俺ツスカ!？」

「はい。ロックウェルさんにです」

――この訓練校で唯一彼の授業だけは、ハヤトが真面目に受けているからなのだ。

サボリ居眠り早退と、こと授業に対する不真面目さならピカイチのハヤトが、コタロウの授業だけは欠片もサボる事無く真面目に取り組み、そのうえ成績まで良い……と言えば、彼の凄さがわかってくれるだろうか？

「何ですかね？ 俺ちゃんと課題は出しましたよ？ 今日の座学だって真面目にやりましたし」

「ええ、それはそうなのですが……その課題で少しばかり質問した

「事が」

「質問……ッスか？」

恐る恐る、という感じでハヤトが聞き返せば、コタロウは頷いて自分の手に持っていた一枚の紙をハヤトに見せ、そこ書かれていた文章の一箇所を指差してみせる。

「この所々に含まれている『（。。（。おっぱい！おっぱい！』という記号は、何なのでしょうか？」

『おっぱい』というのが女性の胸を指しているのは分かります。

ただ、それが今回の『効率の良い魔法集束に関する推論』という課題のテーマにどう関係してくるのかが分かりませんでしたから、こうして質問をしてお伺いした次第です。それで、どういう意味なのでしょう？」

「は？ 俺そんなのカギネ教官の課題に書いたつもり……あゝ」

コタロウの質問に首を傾げたハヤトだが、コタロウが指差す紙を見て濁った声を上げた。

それは間違いなく昨日ハヤトが仕上げた課題で、『（。。（。おっぱい！おっぱい！』という落書きは、丁度同じ日に提出予定だった舞の課題に書く予定だった悪戯なのだ。

——どうやら、間違ってコタロウに提出する課題に書いてしまったらしい。馬鹿だコイツ。

「えつとあのその…… すんません」

「？ 何故謝るのですか？ このように課題として提出された文章の中に何度も出てくる以上、何かしらこの課題のテーマに深く関係してくるのでしょうか？」

でしたら、それがどういう意味を表しているのかを理解できなければ、私も正当な評価を下すことは出来ません。これを理解せずに評価するのは申し訳ありませんからね」

「えーと……」

「せっかくハヤトさんが提出してくださった課題なのですから、正当な評価が出来なくては申し訳ありません。ですから、この『（。）。〇ミ。おっばい！おっばい！』がどう関係しているのか、それを説明してくれませんか？」

「いや、ですからその…… 勘弁してください」

語気も荒げず、特に責めるような声色さえ無く、心底不思議そうな表情で顎に手を当て、首を傾げてハヤトに質問するコタロウ。

ハヤトが彼の座学をキチンと真面目に受ける理由、それがこの怖いくらいに真面目な彼の性格ゆえなのだ。ちなみに嫌味に聞こえるかもしれないが、さっきの彼の言葉に他意は一切無い。

ただ純粹に、ハヤトが何故『（。）。〇ミ。おっばい！おっばい！』と課題に書いたのかを疑問に思い、それが自分が出した課題のテーマにどう関係してくるのか、それを知りたいと思っているのだ。

「あーあー、何やってんだかあの馬鹿は」

「にやはは、多分ハヤトってば舞せんせーの課題とかと間違えちゃったんでしょね」

「カギネ教官は悪意なんて欠片も無いから、余計に困るんだよなあ……」

「ですねー……とは言っても、変な事しなきゃ平気だから、私はネコ先生大好きですけど」

コタロウに尋ねられてたじたじになっているハヤトを見ながら、ヴィレイサーとソフィアは苦笑いを漏らした。実際、ソフィアなどの真面目な生徒からすれば、単純に座学の教え方の上手い素晴らしい先生なのだから、ハヤトが彼を苦手としているのは理解できないだろう。

だって不真面目にしてる方が悪いんだし。

「ふむ……。もしかして、女性の胸が魔力の集束効率に大きく関係してくる、という事ですか？」

「そういう訳じゃなくて、書き間違い一つかなんつか……」

「？」

「ホント、謝りますから勘弁してください……トホホ」

こうしてハヤトは、その後1時間に渡って『（。　。　。）〇ミ。おっばい！おっばい！』は、舞の課題にする予定だった落書きだという事をコタロウに説明する羽目になったのだった。

そしてハヤトの説明にコタロウが納得して帰っていったあと、ハヤトは「お疲れ」と自分の肩を叩くソフィアに、心の底から疲れた表情でこう告げたという。

「俺、明日から真面目に生きるわ」

それが実行されたかどうかは、想像に難くない。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語……だった筈なのになあ。

・今回のおまけ

【セイとソフィア】

ソ「ねえねえ先輩？」

セ「ん？ どうした、ソフィア」

ソ「先輩って、他の訓練校に彼氏さんが居るんですね？」

セ「あ、ああ。そうだな」

ソ「……なるほど、だからおっぱい大きいんですね！」

セ「はあ！？」

ソ「だって、揉んで貰うと大きくなるってハヤトが……」

セ「ちょっと奴に電気ウナギの気分を味わわせて来る」

【ハヤトとコタロウ】

ハ「うう、酷い目にあつた……落書きつて説明するだけで、あんなに時間掛かるとか……」

コ「ロックウエルさん、少し気になった事が」

ハ「へえあ！？ な、なな何でしょう！？」

コ「先ほどの課題に書かれていた『。。。』。おっぱい！おっぱい！」とは、どの位の大きさをした胸を指しているのでしょうか？」

ハ「どのくらいでもいいんで、勘弁してください！」

【ハヤトとソフィアとヴィレイサー】

ハ「しかし先輩って、いつも部室に居ますよね」

ソ「お友達と遊びに行ったりしないんですかー？」

ヴィ「あー、街中まで移動するの面倒だから断ってる。たまに行くけど」

ハ「さすが面倒臭がりの筆頭、セウリオン先輩だ！」

ソ「それでこそ先輩ですね！」

ヴィ「どういう意味だぶっ飛ばすぞ」

第6話 『学園のマドンナって、ゲームの中だけの存在だよ』(後書き)

コタロウ先生は、生徒思いの凄く良い人。

ただ、不真面目なハヤト達からすると、凄く苦手な先生。
どうも、ラモンです。

今回でようやく応募してもらったキャラクターを全員登場させる事が出来ました。

個人的にコタロウさんが今回上手く動かせなかったのも、そこが心残りですね……凄く真面目な人なのに、何か嫌味っぽい人みたくなってしまった(汗) sternさん、力不足で申し訳ないです。鮮血の刻印さんと飛鳥さんも、何か問題がありましたらすぐにご連絡ください。すぐに修正などしますので。

さて、いよいよ登場人物も全員登場し終わりましたので、早いうちに『登場人物紹介・その2』を書きたいと思います。

今回は上級生枠、教官枠の皆さんになりますね。

そして次回は……多分授業風景あたりになると思いますが、どうなるかはその時のノリ任せなのでわかりません！(笑)

それではまた、次の話で。

応募して頂いたキャラクターの扱い、設定などで問題や間違いがありましたら、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。
出来る限り修正します。

第7話 『（．．．）〇≡。おっばい！おっばい！』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

「……揃ったようだな、諸君」

まだ殆どの訓練生が登校していない、早朝の訓練校。

時間で言うなら午前5時という、呆れるくらいの早朝に、ハヤト、ルーク、リオス、京谷、ユウキ、アルトリア、そしてアウルの7人はそこにいた。

彼等は自分達の机を円状に繋げ、円卓を作ってそれぞれ腰掛けている。

その上座に座あるハヤトが、某エ。アのグラサン司令官と同じポ

―ズをしながらその場に居る全員を見回して口火を切った。

「揃ったも何も、てめえが無理矢理起こして連れてきたんだろうが」

「んにゅ……眠い……」

キリツという効果音が聞こえてきそうなドヤ顔のハヤトに対し、京谷はイラついた声で答え、アルトリアは寝ぼけ眼をゴシゴシ擦っている。とても可愛らしい。

「で、何で僕達を呼んだの？」

「ちゃんと納得のいく説明を要求します」

同じようにやや寝ぼけた顔のリオスとアウルも、あくびを噛み殺しながらハヤトに尋ねる。

「それについては！」

「俺達から説明させてもらおうか！」

その問いに勢いよく立ち上がって答えたのは、ハヤトではなく、彼の両隣に陣取っていたルークとユウキ。2人は立ち上がった勢いそのまま、無駄に元気な声で2人は高らかに声を上げる。

もはやテンションは天元突破。後でうるさいと怒られようとお構いなしだ。」

「今日集まって貰ったのは他でもない！」

「昨日の夜、俺達は徹夜で“ある事”について語りあっていた！」

「そして今朝になって、どうせなら他の奴等の意見も聞いてみようと思った訳だ！」

「……ねえ京谷どうしよう。僕もう嫌な予感しか感じないんだけど」

「安心しろリオス。俺もだ」

京谷とリオスが諦めきった顔で言葉を交わすも、それはハヤト達の耳には届かない。

いや、まあ仮に声が届いたとしてもハヤト達は聞く耳持たなかっただろうが。

盛り上がったお馬鹿達は、止めようとするだけ無駄なのだから。

「さて、君達も疑問に思っただろう俺達が徹夜で語り合っていた“ある事”！」

「それは……！」

「「女の子達のおっぱいについてだ……！！！！！！」」

スーパー戦隊よろしく決めポーズを取り、決まった……と悦に浸る2人。

だが、勿論リオス達はそのを見て感動も感慨も抱かない。抱くのは――

「……馬鹿だ馬鹿だとは思ってたけど、ここまでだったとは」

「屋上へ行こうぜ。久しぶりに……キレちまったよ……」

「ハヤトさん、ルークさん、ユウキさん。貴方達はいいいクラスメイ
トだったのに、残念です。」

まさかこんな形でお別れすることになるなんて……」

「死刑でいいよね？ 答えは聞いてないけど」

――そんな理由で朝っぱらから呼び出したんかい、という怒りだけだ。

「はぁ！？ 何なのお前ら、そのうつつつすいリアクションは！
？」

「おっぱいだぞ！？ 人類の夢と希望と浪漫と愛が詰まってる夢の
膨らみだぞ！？」

「それに反応しないとか何なの！？ 馬鹿なの！？ 死ぬの！？」

「むしろ俺らがぶっ飛ばしてやろうか！？ ああん！？」

しかし今回はルークとユウキも引き下がらない。4人の怒気を真つ向から受け止め、それどころか思いっきり威嚇しかえしている。エロの力は偉大だ。

「……よせ、ユウキ、ルーク」

そんなテンション天元突破状態の2人を、ハヤトが冷静な声で引き止める。

ポーズは相変わらず某司令のままだが、その目には確かに理性の光があった。いや、こんな状況で理性の光と言っても、全然カッコよく無いのは分かってるけども。

「司令！？」

「しかし、こいつらは……！」

「彼等はまだ、おっぱいの素晴らしさに触れていないだけなんだ。だから俺達は彼らにそれを伝えるため、今日こうして集まってもらったんだろう？」

「し、司令……」

「俺達が間違っていました！」

いい話っぱくまとめようとするハヤトだが、正直欠片もいい話じゃない。

その証拠に、リオス達はドヤ顔のハヤトとそれに感動しているルーク、ユウキを見てドン引き中だ。しかし、ハヤトはそんなリオス達は気にせず、ドヤ顔を保ったままに宣言した。

「では始めよう。第2次スーパーおっぱい大戦Z　く破界編くをな
！」

「いや、第1次をやった記憶が無いんだけど」

「つか俺達やるなんて一言も言っただけぞ」

「始めるぞ！」

「「おー！」」

「「「聞けよー！」「」」

リオス達の悲痛なツッコミは華麗にスルーされ、ここに第2次スーパーおっぱい大戦Z　く破界編くが開催されようとしていた。

何ともいえない表情をしたリオス、京谷、アウル、アルトリアの4人を巻き込んで。

……ちなみに、京谷とリオスは物陰でこっそり胃薬を飲んでいた。

●陸士訓練学校のドタバタな日常。

第7話 『。。。』。おっばい！おっばい！』

「……はあ」

「ん？ どうしたリオス。お前だっておっばいは好きだろう？
今日は存分に語ってくれていいんだぞ。なあに遠慮するな、俺たち幼馴染だろ！」

深々と溜息を吐くリオスに、ルークが爽やかな笑顔でサムズアップする。

溜息の理由は全く違うのだが、それをこうなったルーク達に言うだけ無駄だという事は、この場に居るほかの誰よりもリオスが良く知っている。伊達に16年も幼馴染はやっていない。

「うん、それはもうどうでもいいんだけどさ。それって教室でやってたら後で殺されるよね？」

結構早い時間だけど、もう少ししたら流石に女子の皆も来ると思うしさ」

「それなら大丈夫だ。教室の外にサーチャーを配置しておいた。
もし女の子が近づいてきたら、すぐに俺達に知らせしてくれるよう

になっている」

「久しぶりに全力でやったからな、準備は万端だぜ」

「よくやってくれた、同志ルーク、同志ユウキ」

ドヤ顔でサムズアップをしてみせるルークとユウキ、そして某司令のポーズをしたままニヤリと悪役的な笑みを浮かべるハヤト。ショートコントみたいな3人のやり取りに、リオスと京谷は深々と溜息を吐く。

何故その情熱を別の方向に向けられないのかと思うが、それが出来たら出来たでこの3人じゃないと思えてしまうのが悲しいところだ。

「あうあう、えっちいのはダメだよ」

「そ、そうですね。そういう話題はちょっと……」

一方のアルトリアとアウルの2人は、この手の話題が苦手なのか顔を赤くして戸惑った声を上げる。

しかし、それを聞いてくれるハヤト達ではないのは、他でもない本人達が一番良く知っているので半ば諦め気味ではあるのだが。

「お前らそれでも男か！？ 男ならおっぱいへの情熱を語るくらいの度量を見せなくてどうする！」

「お母ちゃん、アンタをそんな風に育てた覚えはあらへんで！」

「おっぱいの神様に申し訳ないとは思わないのかあっ！」

「ど、どうしようリオス。ハヤト達は何言ってるのか分かんないよ
う」

「大丈夫。僕も全然わかんないから」

カッと目を見開いて怒鳴るハヤト達に、アルトリアはちょっと涙目になってリオスに助けを求めた。そして助けを求められたリオスは、アルトリアを宥めるように軽く肩を叩き、悟りきった笑顔を浮かべている。そこに浮かぶ表情は、仏ではないのかと錯覚させるほど自愛に満ちていたという。

「アウル、お前も諦めた方がいいぞ。ああなったら、俺でもそうそう止められねーし」

「ですよね……ええ、分かってました。分かってましたとも」

アウルはアウルで、苦笑する京谷に言われて思い切り肩を落としている。

まあ、苦手とは言ってもアウルだって思春期の男の子。興味が無いという事は決してあり得ない。と、そんなこんなでリオス達はハヤト達に丸め込まれ、ここに第2次スーパーおっぱい大戦――破界編――が始まった。

「とはいっても、ここに居る奴等って、ハヤト以外は特に好みとかないんだよなあ」

「俺は自他共に認める、生粋の巨乳信者だからな!!」

「知ってるっつーの。なんせ訓練校に入った初日の自己紹介で、『ただの乳には興味ありません！ この中に巨乳、爆乳、大きなおっぱいが居たら俺のとこまで来なさい!』とか言っつて、その場で左教官にぶん殴られた男だしな」

「アレにはホント呆れたよ」

「おいおいそんな誉めんなって。照れるだろー」

「「誉めてないから」」

呆れた声でハヤトの恥ずかすぎる過去を語る京谷と、何度も頷いてそれに同意するリオス。

そんな3人を他所に、ルークとユウキは顔を赤くしているアウルとアルトリアを巻き込んでおっぱい談義に花を咲かせていた。

「まあ個人的にコレってのは無いけどさ、貧乳って結構いいなーと思うわけよ」

「そうかあ？ 俺は美乳もいいと思うが。なあアウル？」

「わ、私に振らないでくださいよ。」

大体、女性をそういう一部分だけで評価するのはどうかと思います」

「そうだよ！ おっぱいだけで女の子を評価するなんて間違ってるってば！」

アウルが発言に我が意を得たりと目を輝かせ、アルトリアが反論を返す。

けれど悲しいかな。変なギアが入っているルーク達に、彼等の反論は全く意味を成さなかった。

「いいからさつさと答えろよ。俺が思うに、アリアは訓練中にエリス教官見てるから、結構巨乳好きだと思っただよな。アウルはアウルで、蒼とか見てるところから考えるに貧乳好きがする」

「ななな、何でそんなの知ってるわけ！？」

「べ、別に見てませんから！！ 気のせいですから！」

「そこでそうやって必死に否定する時点で、認めてるようなもんだろ」

ニヤニヤ笑っているルーク達にツッコまれ、より一層顔を赤くして焦りまくるアウルとアルトリア。

そういうリアクションをするから余計に絡まれるのだが、初心な2人に対してこの手の話題で動揺するなというのは、少しばかり酷だろうか。

「大丈夫だって、この場で何を言ってもそれをネタにからかったりしねーから」

「そうそう。男しくないんだから、もうちょい素直になれって」

「ううう……」

「そういう問題じゃなくてですね……」

「これ以上ゴネるなら、お前らは女なら何でもいいという噂を訓練校中に流す」

「それはやめて！」

ルーク達がそんな感じで2人を弄っていると、ショートコントを終えたハヤト達が戻ってくる。

「ハヤトはホント自重しようよ。この際ほんの少しでいいから」

「え？ 俺今でもすっげー自重してる方なんだけど。俺が自重しなくなったら凄いよ？」

「なにそれこわい」

「それこそ顔を合わせた瞬間に、ソフィアのわがままロリ巨乳を気が済むまで揉み解すよ？」

「ンなことしたら、問答無用で管理局に突き出すからな」

セクハラを超えて、もはや性犯罪レベルの発言をするハヤトに、京谷は怒りとも呆れとも言えない何とも微妙な顔をして頭を押さえた。冗談だとは思うのだが、そうだと断言できないのが困る。

「おー、戻ってきたかハヤト。なあ聞いてくれよー、アウルとアリアが好みのおっぱいを答えてくれねーんですけど。なにコイツら、カマトト振りやがって!!」

「いい子ぶってんじゃねーぞ！ このむつつりスケベが!」

「なんか酷い言われよう!？」

「恥ずかしくて答えなかったただけなのに!」

戻ってきたハヤト達を見て、ルークとユウキはペツと唾を吐きながらアウル達を罵倒する。もちろんその罵倒は見当違いどころか逆恨みレベルなので、言われたアウルとアルトリアは驚愕するばかりだ。

それを見て、リオスと京谷は「気の毒に……」と沈痛な表情で俯いた。

「おっぱいの好みを答えるのが恥ずかしい!?! 舐めてんのかお前らは!」

「そうだそうだ！ その程度も答えられずに、管理局員になれると思ってるのか！？」

「この程度で恥ずかしいとか、これから先マトモに生きていけねぞ！」

リオス達がそうしている間にも、ハヤトを加えたエロ三人衆はヒートアップしてアウル達を追い詰めていく。言ってることは支離滅裂なのに、迫力のせいで何故か正しい事を言っているように聞こえてしまうのが恐ろしすぎる。

そして、それを間近で聞き続けているうちに、どうやらアウルとアルトリアも洗脳されてきてしまったようで……。

「そ、そうなんでしょうか？ それなら、恥ずかしいけど答えたほうが……」

「うん。俺も恥ずかしいけど、答えた方が良いんだよね？」

とか何とか、ハイライトの消えた虚ろな目で呟いていた。勢い任せで人を洗脳できるとか、まるで悪役みたいな三人組だ。

「さあ答えるアウル！ アリア！ 巨乳？ 貧乳？ 美乳？ 何でもいい！？」

「今夜の！」

「」注文は！」

「」DOCCCHI!？」」

今や懐かしい某料理番組の決まり文句が決め手となったのか、アウルとアルトリアの2人は虚ろな目のまま暫く考え、それぞれに口を開く。

「そうですね、私は“美乳派”だと思います。やはり形が綺麗な方が良いですし」

「うーん……………“何でもいい”かな？
好きになった人のなら、胸の大小は気にならないと思う」

「」YEAHHHHH!!!!」」

「」うおおい!？」 2人とも何マジメに答えちゃってんのおおお
お!？」」

大真面目な顔で答えた2人に、ハヤト達は立ち上がって大喜びし、リオスと京谷は驚愕の表情で思いつきりツツコミを入れた。けれど盛り上がっているハヤト達に、そのツツコミは届かない。

こういう場合、間違いなく苦労するのは真面目な人間なのは自明の理。

そしてリオスと京谷は、その苦労する側の人間なのだ。

「いやあ、アウルが美乳派とは嬉しいねえ。今夜はいい酒が飲めそうだ！」

「はははっ。恥ずかしいですけど、こういうのもたまには良い物ですね。あ、でもお酒はダメですよ。」

私もユウキさんも、まだ未成年なんですから」

「アリアが“何でもいい”ってのは驚いたけど、理由を聞いたら納得できんなあ。」

まったく純情な奴だぜ、お前は」

「い、いいじゃんか。女の人を胸だけで判断するのは、よくないんだよ！」

「素直になれよアリア！ おっぱいは人類の至宝だ！ それを区別無く愛するってのはな、男として誇っていいことなんだぜ！？ もっと胸を張れ！」

「……そ、そうだね。胸を張っていいんだよね！」

どうやら完全にハヤト達の勢いに押されて洗脳されてしまったらしく、アウルとアリアは顔を赤くしたままではあるが、ルークやハヤト、ユウキと和気藹々と話している。

間違いなく後で思い出して後悔すること請け合いだろうが、今の瞬間それは関係ない。

彼等にとってこの一瞬は、間違いなく青春のページなのだ。

……間違いなく黒歴史だろうけどな！

「京谷、どうする？」

「巻き込まれる前に逃げるのが得策だろうな。もう俺らじゃ止められん」

「だよな〜……」

円陣を組んで騒いでいるハヤト達を見て、リオスと京谷は頬を引き攣らせた。

下手にツツコミを入れようものなら、間違いなく今度の標的は自分達だ。このまま放っておけば、少なくとも自分達に害は無いのだから関わるだけ損というもの。

そう結論付けた2人は、ハヤト達に気付かれぬうちに教室から出て行こうとした。

「おーーっツとオ！ どこに行こうってンですか、リイイイイオスくんよオ！？」

「悪リイが……こっから先は一方通行だ。脱出は禁止ってなア！！」

「狩人を楽しませるならキツネになれよ！

食われるだけの豚で止まってんじゃねーぞ！ 三下アアア！」

「逃がさないよ、リオス、京谷！」

「一緒に楽しく語ろうじゃないですか！」

しかし、彼等が出て行くための第1歩を踏み出した途端、一瞬でハヤト達に囲まれてしまう。

更にご丁寧なことに、アウルとアリアは教室の窓やドアなど、逃げられそうな場所全てに結界魔法を張っているという徹底ぶり。これを一瞬でやってのけたと言うのだから驚きだ。

これが模擬戦だったなら、間違いなく最高判定を貰えるレベルの連携である。

「えー……何なのこのチームワークの良さ」

「お前らこんな時ばっか素晴らしい団結力発揮してんじゃねーよ！その団結力を、模擬戦やる時にもうちよつと使おうって気はないのかコラア！！」

「……そんなものは無い！！」「……」

「言い切んのかよ！」

「しかもアウルとアリアまで一緒になって！？」

もはや洗脳は完全に完了したらしく、常識人だったアウルとアルトリアの面影はどこにも無い。

その事に泣きそうになりながら、それでもリオスと京谷はツツコミを入れてしまう。リオスは16年という年月によって、京谷はこのクラスの委員になってからの月日によって、もはや脊髄反射的に

ツツコミを入れてしまう体質になってしまったのだ。

なんという悲劇。

「ああもう、わかったよ。俺らも話せばいいんだろ。話せば」

「ええ！？ 諦めちゃうの京谷！？」

「落ち着けリオス。お前、ここを抜けられる自信あるか？」

「アウルとアリアも洗脳されてあっちについてる、5対2つつー状態で」

「う……それを言われると……」

「だったらもう諦めて参加しようぜ。男同士でこういう話すんのも、たまにはいいだろ」

肩を竦めて苦笑する京谷の言葉に、リオスは何か反論しようと口を開きかけ、けれど反論しても仕方が無いと思ったのだろう。溜息を吐いて苦笑を漏らした。

「はあ……………うん、そうだね」

「お、リオスも京谷も乗り気になったか！」

「よっしゃー！ それじゃあとことん語り合おうぜ！ まずは貧乳についてだな！」

「貧乳っつーと……蒼とミコト、それから美卯あたりか？」

「いやいやそれより、ソフィアとゆずのロリ巨乳コンビについてだな……」

「待て待て、ティアナやスバルという美乳も捨てがたいだろー」

こうしてハヤト達は再び自分達の机で作り上げた円卓に座り、楽しそうに話し始めるのだった。

内容は下世話なものだったが、話している彼らの顔は実に楽しそうだった。いつか彼らが大人になった時、この日の事を思い出して笑いあう日が来るのだろう。

これは、そんな眩い青春の1ページだった。

一方その頃、ハヤト達が熱く語り合っている教室の前。

「……………」

そこには、中で行われている話し合いで名前が挙がっている少女達が勢ぞろいしていた。

表情と程度の差はあれ、そこに居る全員が顔を真っ赤にして俯いている。中でもミコトと蒼、ゆずとティアナの4人はプルプルと肩を震わせている。

何故彼女達がここに居るのか。

それは別にハヤト達が時間を忘れて語り合っていた訳ではなく、勿論ティアナ達がハヤト達の動向を嗅ぎつけた訳でもない。ただ偶然、彼女達が早めに登校した……それだけの事だ。

サーチャーもさつきからずっと彼女達の気配を察知し、サーチャーを仕掛けたルークとユウキに警告を送っているのだが、それを仕掛けた本人達は話す事に熱中しすぎて、まったく気付く気配が無い……何のためのサーチャーやねん。意味が無いにも程があるだろ。

「あうあう……」

「ま、まだ成長期なだけだもん。これから大きくなるんだもん」

「美乳って……喜んでいいのかなあ？」

顔を赤くして、照れたり涙目になっているソフィア、美卯、スバルの3人。

なんとも初々しく、可愛い反応だ。もしこの現場を誰が見たら、間違いなく一目惚れしてしまうだろう。

「な、何を大声で叫んどるんじゃ、あやつらはああ……！」

「貧乳？ あたしが貧乳だと？ ……いいわ、ならその幻想をぶつ殺してあげる」

「ふふふ、まさかこんな登校して早々、こんな屈辱を受けるハメになるとはな」

「男連中が全然居なかったから、おかしいなと思っていたけど……」

そんな3人とは対照的に、俯いていた顔をゆっくりと上げ引き攣った笑いを浮かべる4人。

どう考えてもマジギレ中です。本当にありがとうございました。そして、そんな4人の怒りの炎に油……どころかダイナマイトを放り込むようなハヤトとルーク、ユウキの声が、教室の中から聞こえてきた。

「まあどんだけ美人でも、あんなガキ臭い奴等はごめんだけどなー（笑）」

「「言えてる言えてる（笑）」」

ハヤトが呟いたその台詞は、ティアナ達4人の中に残っていたなけなしの理性を粉碎した。

「「「「「よろしい、ならば戦争だ」」」」」

その後ハヤト達がどうなったのか……それを語る術を私は持たない。

ただ、この日教室に入ってきた舞は、開口一番こう言ったという。

「……………なんで男連中が死んでる訳？ 別にいいけど」

ちなみにハヤト達はこの後暫く、クラスのマスコットの存在であるソフィアから、顔を合わせるたびに「えっちなのはダメだからね！」と注意され、恥ずかしさと気まずさで暗鬱とした日々を送る事になったという。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた……ごめん嘘。

・今回のおまけ

【あるあるネタ その1】

ハヤト「今日の朝さ、クラス中の女子から告白される夢見た」

ユウキ「俺もー」

ルーク「俺もだな」

ハヤト「なんだ、あるあるネタか」

京谷「あるある……？」

【自重は大事】

アウル「な、何であんな話し合いに参加しちゃったんでしょう、私は……」

アリア「ねえ……場の勢いって怖いね。ティアナ達にも凄く怒られちゃったし」

アウル「暫くは、ハヤトさん達にも自重してもらわなくては」

アリア「うん。京谷やリオスに頼んで、もっと監視して貰うようにするよ」

リオス「え？ 僕なの？」

アウル・アリア「もちろん」

リオス「……胃薬買ってきます」

【あるあるネタ その2】

ハヤト「パンを啜えた美少女と、曲がり角でぶつかって」

ルーク「空から突然羽を生やした美少女が降ってきて」

ユウキ「自称アンドロイドの女の子が、突然我が家にやってきて」

舞「……アンタ等、それが遅刻の理由だと？」

ハ・ル・ユ「「何か問題でも？」」「」

舞「ちょっと屋上来い」

第7話 『（・・・）〇ミ。おっぱい！おっぱい！』（後書き）

次回は授業風景と言ったな。アレは嘘だ。
どうも、ラモンです。

女子の皆は微妙なところですが、今回はクラスメート全員登場させてみました。

……うん、多すぎる。こんなに動かせない（汗）
身の丈にあつた事をするのが大事って事を思い知りました。

まあそれはさておき、今回は男子連中に馬鹿やらせてみましたが、
どうだったでしょうか。

まあ、流石にちよつと悪ノリが過ぎた気もしてますから、怒られる
覚悟は完了しています。作者の皆様、「お前ふざけんなよ！」とい
う苦情などございましたら、遠慮なくどうぞ。

次回は……次回こそ授業風景やりたいですね。
基礎訓練、実戦訓練、座学訓練の3つを、3話を使ってやってみ
たいところです。

今回みたいに、全然違う話になる確率も高いですが（笑）

それではまた、次の話で。

応募して頂いたキャラクターの扱い、設定などで問題や間違いが
ありましたら、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。
出来る限り修正します。

登場キャラクター紹介 その2（前書き）

この紹介では

- ・【上級生枠】
- ・【教官枠】

以上の2枠のキャラクターを紹介します。

登場キャラクター紹介 その2

・【上級生枠】

【男子】

1.

名前：ヴィレイサーⅡセウリオン

【鮮血の刻印さん著：魔法少女リリカルなのはStrikers - JIHAD】

年齢：18

髪型：紫色のロングヘア。所々、髪がツンツン跳ねている

外見：髪と同じ紫色で、釣り目がちの目

性格：面倒くさがり、あまり誰かと一緒にいることは好まない

備考：ハヤト達の先輩で、ゲーム部の部長（押し付けられた）

基本的につっけんどんなのだが、時々やたらと面倒見がよく
なったりする

【女子】

2.

名前：セイⅡカルナード

【飛鳥さん著：魔法少女リリカルなのは Strikers 銀色の騎士と漆黒の拳士】

年齢：18

髪型：くすんだ桃色。左側だけを伸ばしている

外見：青い釣り目。身長は女性にしては高く、ないすぽー

性格：クールで大人っぽい

備考：眉目秀丽、成績優秀、スポーツ万能と3拍子揃った第4陸士訓練校のマドンナ的存在。

その優秀さと大人っぽい雰囲気、男女問わず人気があり、非公式ながらファンクラブもある

・【教官枠】

【男性】

3.

名前：コタロウ「カギネ

【Sternさん著：魔法少女リリカルなのは Strikers
「困った時の機械ネコ」】

年齢：26

髪型：濡烏色の天然パーマ、髪の手までウェーブが掛かっている

外見：黒い瞳。寝ぼけ眼で眠いのかと心配される事が多い

また、事故で左腕の肩から先を失っている

性格：とても真面目で無表情。物事を論理的に考え、悪い方向には絶対に考えない

備考：第4陸士訓練校の座学訓練担当教官。訓練校で、唯一ハヤトが真面目に授業を受ける教官でもある

真面目な性格で、全ての事にはちゃんとした理由があるのだと考える人

ボケに対しても真面目に考察をしまつので、ある意味ハヤトの天敵

親しい人達からは『ネコ』の愛称で呼ばれている。その理由は原作で！

4 .

名前：バルトリアルヴェン

【ジャンヌさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers～永久の風～】

年齢：45

髪型：少々髪が跳ねている黒い癖毛を短く揃えている

外見：茶色でやや釣り目がち。年齢よりも若く見えるらしい

性格：面倒見がよいのだが、真面目な時とノリの良いときで起伏が激しい

備考：第4陸士訓練校の校長で、座学訓練を時々担当している

面倒見の良さとノリの良さ、公私をキチンと使い分けているという事で訓練生からも人気が高い

よくハヤト達の悪ふざけに付き合っ、他の教師に怒られていたりいなかったり……

【女性】

5 .

名前：左 舞ひだり まい

【辛島剛士さん著：仮面ライダーW×魔法少女リリカルなのは 本当の自分を始めるために】

年齢：26（本人は永遠の16歳と主張）

髪型：濃い目のブラウンなセミロング。スレンダー体型

外見：黒い瞳で、左目の下に泣きボクロがある。女性にしては高身長
性格：常にテンションが高く、賑やかで元気

備考：第4陸士訓練校の基礎訓練担当教官で、ハヤト達のクラスの
担任

可愛いものが大好きで、特にティアナ達くらいの年の可愛い
女の子が大好物

逆にハヤト達ぐらいの男は嫌いなので、時々理不尽な訓練を
させたりして遊んでいる

ただ、基本的に訓練生に対しては優しいので、ノリの良さも
相まって凄く人気が高い

6.

名前：マリーナ・イシユバロン

【アガイル・グレインさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers
蒼の重騎士の再誕】

年齢：24

髪型：黒のロングヘア

外見：金色でアーモンド型の瞳。だいなまいとぼでー

性格：掴みどころの無い性格だが、基本的には優しい

備考：第4陸士訓練校の実技訓練担当教官。なのはの実習担当教官
も務めている

基本的には抑え役なのだが、何だかんだと人を弄ったりする
機会も多い

なのはと共に彼女が行う実技訓練は、訓練生の間では『降り
止まぬ魔力弾の雨』と恐れられているとか

7.

名前：エリスティン・カルヴィン

【nonさん著：魔法少女リリカルなのはStrikers

紺

碧の姫】

年齢：24

髪型：グレーの髪を肩まで伸ばしている

外見：細めの黒い瞳。パツと見では睨んでいるようにも見える

性格：とある映画の影響から完全な軍人氣質。やや天然気味な面も

備考：第4陸士訓練校の基礎訓練担当教官。自分にも他人にも厳しく接する人

ただ、訓練生から嫌われている訳ではなく、時々飛び出す天然発言もあって結構好かれている

猫が大好きで、猫を前にとデレデレになってしまう

登場キャラクター紹介 その2（後書き）

これで、登場していただけるゲストキャラクターのプロフィールは、全員分紹介し終わりましたかね。

どうも、ラモンです。

年齢などは、もちろん訓練校の話ですので原作どおりではなく、ある程度若返ったり年を取ってもらったりしました。

魔力ランクなども一応決まっていますが、多分殆ど関係ないので載せておりません。

分かりづらいかも知れませんが、今後の話の中で徐々に出演している皆様のキャラクターを覚えていってもらう為の手助けになれば幸いです。

しかし、目の形とかって文字で書き表すの難しいですねえ。

今回も作者の皆様の名前と作品名を載せておきましたので、詳しいプロフィールなどが見たい場合は、原作の方を読んでいただければ幸いです。

それから作者の皆さんへ。

このプロフィールなどで訂正して欲しい部分がありましたら、感想やメッセージで訂正箇所を教えてください。すぐに訂正致します。

ではでは。

第8話 『俺のバトルフェイズは、まだ終了してないZ E!』

第4 陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4 陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

訓練校で行われている訓練は、大きく分けて3つのものがある。

体力作りや魔力増大訓練を基本とした、基礎訓練。

模擬戦を基本とし、様々な実戦的訓練を行う実戦訓練。

そして管理局で働く上で必要な知識などを教える座学訓練、この3つだ。

今日はそのうちのひとつ、実戦訓練の様子を見ていこうと思う。
実戦訓練は基礎訓練と1日交代で行われ、担当する2人の教官―

― 実戦訓練担当教官のマリーナ「イシユバロンと、教官実習生である高町なのはの2人が訓練生達を日夜鍛えている。

そして今日もまた、その厳しい訓練が幕をあげようとしていた…。

「はい、みんな準備はいいかしら？」

「せんせー！ 邪気眼が発動して止まりません！」

「せんせー！ 右腕が疼きます！」

「うん、準備は万端みたいね。感心感心」

第4陸士訓練校のグラウンドで、ジャージを着て一列に並んだ訓練生達の顔を眺め、訓練生が着ているのとは微妙にデザインの違う教官用のジャージを着たマリーナが満足そうに頷く。途中で聞こえてきた男子2人の声は無視されたらしい。

どっちが誰の声なのかは、本人達のプライバシー保護のために黙っておこう。

どのみち、誰が誰でも等しくしょうもない内容なのだから。

「それじゃあ今日も元気良く、模擬戦はじめるわよー」

「「ひぎい！」」

「今日のルールは……なのはちゃん、説明してあげてくれるかしら？」

「あ、はいっ」

マリーナに促され、彼女と同じ教官用のジャージを着たなのはが
一歩前出る。

「えっと、今日は高いランクの射撃型魔導師2人を相手にした場合
を想定した訓練です。」

私とマリーナさんは動かずに魔力弾による射撃で皆を攻撃するの
で、それを掻い潜って私達の体に触ることが出来れば皆の勝ち。逆
に一定時間が経過するか、全員が撃墜されたら皆の負けになるよ。
撃墜の判定は、判定役の舞教官とエリス教官がやってくれます」

「任せよう」

「判定は任せろー」バリバリバリバリバリ

「「やめて!」」

なのはに名前を呼ばれ、訓練生達から少し離れた場所に立ってい
るエリスと舞の2人が、軽く手を挙げて答えた。ちなみに、舞はち
ゃんとマジックテープの財布を開け閉めしてたりする。

どこから出したんだ? というツツコミはしないで欲しい。

「訓練は全員いっぺんにじゃなくて、いくつかのチームに分かれて
行います。」

1チームの人数は5〜6人。あらかじめ私達の方でチーム分けは決めていますから、この後こちらの指示に従ってチームにわかれてください。それと、最初のチームは模擬戦を始める前に20分間作戦を練る時間にとりまますから、その間にチームで作戦を練ってくださいね。

模擬戦を行う順番は、チーム分けが終わった後にくじ引きで決めます……えっと、説明は以上で大丈夫ですか？ マリーナさん」

「よくできました。はい皆、ここまでで質問あるかしら？」

「イシュバロン教官の3サイズはいくつですか！」

「いい女には秘密がつきものよ、知りたければ頑張って自分で調べなさいね。他にあるかしら？」

鼻息荒く手を挙げたハヤトの質問をうまくかわし、マリーナは訓練生達にそう確認する。

すると、今度はハヤトの隣に立っていたルークが手を挙げた。

「なのはさんに彼氏はいるんでしょうか！」

「ふえっ！？」

「つてリオス君が聞いてます！　すごく真剣に！」

「えええええっっ！？」

「そ、そうなのリオス君……？」

「いやその！ まったく興味が無いってわけじゃないですけど、別に今聞きたいってわけでもなくて！」

ああもう僕は何を言ってるんだ！？ つまりですね、あの、えっと！」

「お、落ち着いてリオス君。私、ちゃんと分かってるから」

唐突な質問をこれまた唐突に振られ、揃って顔を赤くして驚きの声を上げるリオスとなのは。

ただまあ、焦っているのは本人達だけで、他の全員はいつものことだとこれをスルー。なのはの満更でもなさそうな反応に「リオスもげる」という声も聞こえたが、これもスルー。

「はいはい、青春してる2人はそつとおきましようね。」

ああ、それと次に関係ない発言をしたらねじ切っちゃうからそのつもりで」

「我々の業界ではご褒美ですっ！」「」

「ハヤトとルークはちょっと黙ってなさいよ！」「」

「えーと、他に質問はないかしら？ 無いなら、チームわけを発表するわね」

とまあ、そんないつも通りのやりとりを終えながら、マリーナはもう一度訓練生達に確認する。

そして他に手を挙げる人間がないことを見ると、自分の手に持っていたバインダーを見ながら、あらかじめ決めていたチームわけを発表し始めた。

「まず第1班はリオス、ルーク……」

「だって美人にねじ切られるとかマジご褒美じゃねーか！」

「そうだそうだ！ 正直背筋がゾクッてするけど、それはそれで！」

「だから黙れって言うてんでしょうがー！ー！！！」

「……やれやれ」

こっちが話しているのに、自重せず騒ぐ訓練生たち。

それを楽しんでいる自分に気付き、マリーナは思わず苦笑を漏らすのだった。

●陸士訓練学校のドタバタな日常。

第8話 『俺のバトルフェイズは、まだ終了してないZEE！』

「つーわけで作戦会議です」

チームわけが終わって模擬戦が開始されてから30分ほどが経過した後。

分けられてチームとなった仲間達を見回しながら、ハヤトがそう切り出した。

「まずチームメイトを確認するぞ。番号と名前！」

「はい！ 1番、『堅牢なる』ソフィアちゃんです！」

「2番、『激動の』スバルだよ！」

「え、私も言うんですか？ えーと、3番『静かなる』アウルです」

「まあたまにはノってあげるわ。4番、『電撃の』ミコトよ」

「……アンタ達、なんでそんなノリノリなのよ」

ハヤトの声に通り名まで付け加えて答える自分以外の4人を見ながら、ジャージの上着を脱いで半袖姿になったティアナは深々と溜息を吐く。正確に言うならアウルとミコトはしょうがなくノっている訳なのだが、まあノった以上は同じということだろうか。

ちなみに模擬戦のほうは、現在リオスとルークが入っているチームが模擬戦をしていて、その次がハヤト達のチームである。

「おいおいティアナー、ちゃんと答えるよ。それじゃあお前が誰かわからんだろ」

溜息を吐くティアナにハヤトが肩を竦めると、待つてましたばかりにスバルとソフィア、そして何故かミコトの3人が目を輝かせて口を開いた。

「ご存知、ないのですか!？」

「彼女こそ訓練生からチャンスを掴み」

「管理局員への座を駆け上がっている」

「『超時空ツンデレラ、ティアナちゃんです!』」

「誰がツンデレラよ! 馬鹿にしてんのアンタ達!？」

「馬鹿どもがつ! 飼い慣らされやがつて!」

「馬鹿はアンタでしょうが!」

アホな事を言っているハヤト達と、それに一生懸命ツツコミを入れるティアナ。

そんな5人の隣では、アウルが肩を怒らせて怒鳴るティアナを「まあまあ」と宥めている。一応作戦タイムの筈なのだが、どう見てもそんな雰囲気じゃないのはある意味お約束とも言えそうだ。

だが、騒ぎながらも教官達に怒られないよう小声な辺り、さすが
というか何というか。

「……も、もういいわ。さっさと作戦立てるわよ」

「うーい」

そうして暫く小声で騒ぐという器用な真似をしていた6人だったが、これ以上騒いでいても時間の無駄だとティアナが諦めることで、馬鹿騒ぎはようやく終わり、ちゃんとした作戦会議が始まった。

「えーと、ソフィアがメイン盾、俺とティアナとミコトが防御と牽制。」

アウルが後ろから教官達をゴルゴって、隙が出来たらスバルがフルコンいれて勝利。

足りない分は勇気で補う……と。これで大丈夫だな」

「ごめん、通じる言語でお願い」

「い、一応なんとなくわかりますけど、その説明は流石に……」

「これだからゲーム脳は」

大真面目な顔でハヤトが作戦を述べるが、ティアナ、アウル、ミコトの3人から反論されてフルボッコにされてしまう。説明と言うのもおこがましい説明だったので仕方ないのだが。

しかしハヤト本人は反対……というか文句を言われるとは思って
いなかったらしく、少し戸惑った表情を浮かべた後に、口を尖らせ
て「何だよー」と声を漏らす。

「ちゃんとした作戦だろー。文句あんのかよー」

「その作戦の内容が全然わかんないつつてんのよ。なによメイン
盾とかゴルゴ13するとか。」

あたし達はアンタみたいにゲームやってる訳じゃないんだから、
言葉を選んで喋りなさいよね」

「ンなこたねえだろ。なあ、スバルにソフィア？」

「……………あはは」

同意を求めようとハヤトがスバルとソフィアに視線を送るが、2
人は気まずそうに苦笑いして視線を逸らしてしまった。やはりあの
説明で作戦の全貌を理解出来るのは、作戦を考え付いたハヤト本人
だけだったらしい。

「え？ マジで通じてないの？」

「う、うん」

「細かいところはちょっと……ていうか実は全然わかんなかったり」

「が、概要はわかりますよ？ けど、もう少し細かい説明をしてく

れた方が……」

不思議そうな顔で尋ねるハヤトに、苦笑したまま頷く2人。

そしてその隣では、ティアナとミコトも「当然でしょ」と呆れた声を漏らしている。アウルだけは、一応ハヤトをフォローしているものの、浮かぶ表情から察するに皆と同じように考えているのだろう。

まあ、アレで納得できる方がおかしいので仕方ない。

「マジかよ……ゲームやんねーティアナ達とはかく、スバルとソフィアには通じると思ったのに」

「いや、仮に伝わったとしても2人だけじゃ意味ないでしょうが」

「最悪俺も含めて3人居ればなんとかなるかなーと思った」

「無理に決まってんでしょうが、アンタどれだけ教官舐めてるのよ……」

「正直な話、ノリと勢いとフィーリングでいけると思っています」

「……はあ」

ドヤ顔で胸を張るハヤトに、ティアナとミコトは揃って頭を抱えて深々と溜息を吐いた。

そんな彼女達を見てさすがにこれ以上ふざけるのもアレだと分かったらしく、ハヤトは「しゃーねーなあ」と肩をすくめて、仕切り

なおすように咳払いをしてから、改めて考え付いた作戦を話し始める。

「げふん。そういう事なら仕方ない、ちゃんと真面目に説明してやんよ。」

まずは模擬戦開始と同時にソフィアはシールドを展開。教官たちの弾幕を受け止めてもらう。この6人の中で一番シールドが硬いかな

「えっへん！」

「つつても流石に連続で受け止めてると辛いだろうから、俺とティアナ、ミコトの3人で出来る限り弾幕を相殺してソフィアへの負担を減らす。ソフィアが潰れちまったら、実質そこで詰みだから気合入れてやれよ？ 多分一番辛い役目だと思うし」

「はいはい」

「了解よ」

「それから攻撃。アウルは俺達の後ろから教官たちを狙撃してくれ。向こうは動かないみたいだから、狙うの自体は簡単だろ？ ただ、攻撃を当てることにはこだわらなくていい。多分どうやってもシールドで受けられると思うしな。」

仮に当たればそれで勝ちだから良し、ダメでも最低限隙を作ってくれ」

「責任重大ですね……頑張りましょう」

「ラスト、隙が出来たらスバルはウィングロードで突撃。教官たちのどっちに触って勝ち……と。」

「どうだ？ これなら理解できただろ」

スラスラと、さっきの説明は何だったのかと思わざるを得ないくらいに完璧な説明をするハヤト。ティアナ達も「出来るなら最初からやれよ！」と思ったが、言うだけ無駄だと思うのと、言ったらそれをネタに間違いなくややこしい事態になるというのが分かってるので、ツツコまずに言葉を飲み込んだ。

「……うー？」

「えっと、つまり私はずっとシールド張ってればいいんだよね？」

ただ、スバルとソフィアの2人は一度に説明されて目を白黒させている。

理解できないのではなくて、単純に情報量が多くて整理するのに手間取っているだけだ。断じて2人がお馬鹿という訳ではない。だってハヤトの方が圧倒的に成績悪いし。

「やれやれついて来れなかったのか。まあお前らちっちゃいし、仕方ないよなー」

「「ちっちゃくないよー！」」

「はいはい、ちっちゃくないちっちゃくない」

「「むきー！」」

両手をピコピコと可愛らしく振って抗議してくるスバルとソフィアだったが、ハヤトはケラケラ笑いながら2人の頭を撫でるだけで、特に訂正しようとはしない。実際2人は訓練生の中でも小柄な方でここにいる6人の中でも大分小さい。

ただ、ソフィアのおっぱいだけは決して「ちっちゃい」とは言えない大きさだ。

もう一度言おう。

決して「ちっちゃい」とは言えない大きさなのだ。

大きいっていいよネ！

大きいは正義！ でもちっぱいも大事！

「うえええん、ティアー！ ハヤトが虐めるー！」

「ミコトー！ ハヤトが酷いんだよー！」

「「何であたしに言うのよ……」」

ハヤトに抗議しても無駄だと悟った2人は、ハヤトから離れてティアナとミコトに泣きつく。

泣きつかれた2人は溜息を吐きながら、それでもスバル達の頭を撫でて慰めてあげている。何だかんだで甘やかしてしまうティアナ達なのであった。

一方で、ハヤトはアウルにお説教されていたりする。

「ハヤトさん。他人の身体的特徴をネタにするのは、どうかと思いますよ？」

「うーい、すんませーん。反省してまーす」

とか何とかやっているうちに、6人の背後から「ぎゃー！」というルークの悲鳴と、エリスと舞の模擬戦終了を告げる声が聞こえてきた。

「そこまで！ 第1班全員の撃墜を確認！」

「はい、それじゃあ女の子達はこっちで手当てしてあげるわよー。男子は気合で我慢なさい」

「ひでー！」

「俺らも手当てしてくださいよー」

後ろから聞こえてくる声を聞きながら、ハヤトが「ククク……」と不敵な笑いを漏らし、それに釣られてティアナ達に泣きついていたソフィアとスバルも、同じように不敵な笑いを漏らして顔を見合わせる。

「リオスとルーク達がやられたか……」

「けど、リオス達は私たち訓練生の中でも最弱の存在」

「あたし達の手にかかれば、あの程度造作もない相手だよ」

「「「イエーイ！」」」

「……仲良いわね、アンタら」

「もういい、ツッコむのも疲れた」

「あ、あははは……」

四天王お決まりのセリフを言ってからハイタッチする3人を見て、ティアナとミコトは「もうやだ」と呟いてガツクリと肩を落とし、アウルはツッコむ訳にもいかずに苦笑を漏らすのだった。

一方その頃、なんだかんだと長時間模擬戦をやっていたマリーナとなのはの2人はと言うと、さすがにずっと空中に居るのもアレなので、一旦地上に降り、軽い休憩を取っていた。

今のところ2人とも模擬戦は負けておらず、挑んできた訓練生を全員叩きのめしている。

もちろん、一切の容赦なしでだ。

「……あの、マリーナさん」

「うん？ どうしたの、なのはちゃん」

木陰で軽く息を整えていたなのはが、不意に隣で水を飲んでいるマリーナに問いかける。

「訓練生の皆を相手に、こんな風に全力でやっちゃっていいんですか？

なんていうか、さっきまでの模擬戦も、殆ど私達が一方的に撃ってるだけでしたし……」

なのはの言うとおり、今日行われた模擬戦は全て、マリーナとなのはの教官コンビが魔力弾を驟雨の如く降らせて一方的に蹂躪される展開ばかりだったのだ。

模擬戦は実戦に近い形式で戦う事で、チームワークなどの確認をするもの……そう考えていたなのはからすれば、今日の模擬戦はおよそ模擬戦らしい内容ではなかったのだろう。

「あら、だからいいんじゃない」

「え？」

けれど、そんな彼女の考えをあつさりと否定して、マリーナは笑いながらそう答えた。

「自分たちではどうしようも無い相手もいれば、どうしようもない状況だってある。それを知っているのと知っていないのでは、実戦に出た時に随分と差が出るものよ。」

知っていれば、慌てずに落ち着いて作戦を練れるし、そうすればそんな相手でも何とか出来るかもしれないでしょ？」

「……あ、なるほど」

微笑むマリーナの言葉に、なのはが納得したように声を漏らした。彼女が言うとおり、そういう状況になる事や、そういう相手が居るという事を知っているという事は、現場に出た時に大きなアドバンテージになるだろう。

実際、彼女も今まで経験してきた中で、普段は冷静な人がそういう相手や状況を見た瞬間に酷く取り乱して使い物にならなくなってしまうた……そういう経験は多くあるのだ。

「せっかくどれだけやられても問題のない模擬戦をしてるんだから、こういう時はキツチリ叩きのめしてあげないと。下手に手加減なんかして、『自分達でも戦えるんだ』なんて変な自信を持たれたら、そっちの方が危ないじゃない」

「そ、そうですね」

「自分達の未熟さを理解させてあげて、それでも作戦次第ではどうにかなる設定の模擬戦をする。

これって、実戦教官をやる時には凄く大事な事だからね。覚えておきなさい？」

「はいっ！」

片目を瞑って微笑むマリーナに、目を輝かせたのはが大きく頷く。

それを見て「よろしい」と彼女の頭を優しく撫で、休憩は終わりと立ち上がる。

「さーって。それじゃあラスト、いっちゃいましょうか」

「わかりました！」

杖型をした自分のデバイスをそれぞれに起動させ、なのはとマリーナは同時に飛行魔法を使って開始位置である空中の開始位置にたどり着く。

そして、同じく訓練生用の開始位置に並んでいるハヤト達を見て、楽しそうに笑うのだった。

「今度はどんな作戦でくるのかしらね。悪ガキのハヤトが居るみたいだし、楽しみだわ」

「あはは……前みたいに、スカートの中を覗こうとしてくるのは、

ちょっと勘弁して欲しいですけど」

「確かに。ま、ハヤト以外の皆はまともだし、そこは安心して大丈夫だと想うわよ？ 多分ね」

「多分なんですか……」

「だってハヤトだもの」

「ですよね」

少しだけ頬を染めて肩を落とすなのはに苦笑しつつ、マリナーが構え、なのはもそれに続いてデバイスを構える。彼女達を対峙しているハヤト達もまた、それぞれが自分のデバイスを構えた。そして、両者の間に模擬戦とは言え肌を刺すような緊張感が生まれ、空気を満たしていく。

「どちらも準備は整っているな？」

教官側と訓練生側、どちらも構えたのを確認し、エリスが両手を挙げる。

それを見て、ハヤトとソフィア、スバルの3人が口を開いた。

「なにゆえもがき 生きるのか？」

「滅びこそ我が喜び」

「死にゆく者こそ美しい……」

「ちよっ！」

「何言つて——」

どこかで聞いたことのある台詞に、ティアナとミコトが反射的にツツコミを入れようとする。

「それじゃあ模擬戦最終ラウンド、開始っ！」

だが、それよりも先に模擬戦開始を告げる舞の声が響いてしまう。
そして——

「「「さあ、我が腕の中で息絶えるが良い！」」」

「「結局こんなか——っ！！」」

「もう、諦めました……」

情け容赦も一片の迷いも待ったも無く、ハヤト達VSマリーナ、
なのは組の模擬戦が始まった。

ツツコミ2人の絶叫と、アウルの諦めきった声を残して。

ちなみに結果がどうなったのかと言つと……。

「無理、あの人たち人間じゃねえ……」

「ふええん、怖かつたよ」

「あとちよつとで触れたのに！ くーやーしいー！」

「あそこでハヤトがふざけなければ……！」

「後でハヤトぶつ飛ばす」

「お、落ち着きましょう！ ね！？」

開始20分で、なのは、マリーナ組の圧勝だったという。

敗因は主にハヤトの悪ふざけ。この後彼がどうなったのか、それは誰も知らない。

「いい作戦だったけど、まだまだ負けてあげられないわよね」

「でもマリーナさん、流石に砲撃魔法の連発は大人気ないような……」

……」

「気にしない気にしない」

「いいのかなあ……」

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描……
けないって、無理無理。

・今回のおまけ

【付き合ってる？】

ハ・ソ・ス「キャツキャウフフ」

ティアナ「アンタ達、ホント仲良いわよねえ」

ミコト「もしかして、付き合ってたの？」

ソフィア「あはは、無い無い！」

スバル「ありえないよー」

ソフィア・スバル「ねー」

ハヤト「よしお兄さん3階の窓からI can flyしちゃうぞー」

【結成！ 胃薬愛好会】

リオス「あ、御剣先輩。この会社の胃薬、即効性があっていいですよ」

御剣「ふむ。ではこつちを生徒会室に常備しておくか……」

ティアナ「リオス、この胃薬って試した？」

リオス「うん、それって効き目は遅いけど効果は高いから、家で飲むといいかも」

ティアナ「なるほどねー」

アウル「……お疲れ様です」

【黒歴史】

ハヤト「くっ……！ 静まれ、俺の右腕！！」

ルーク「やめろ、出てくるんじゃない！ お前が出てきたら、皆が……！」

ユウキ「運が良かったな、今日はMPが足りないみたいだ」

リオス「見てごらん、ソフィア、スバル。あれが黒歴史だよ」

ソフィア「痛々しいねー」

スバル「数年後に思い出して、死にたくなるんだろうねー」

ハ・ル・ユ「……」

ハヤト「やめるか」

ルーク「だな」

ユウキ「何か涙出てきた」

第8話 『俺のバトルフェイズは、まだ終了してないZ E!』（後書き）

戦闘描写があると思った？ 残念！ ありませんでした！
どうも、ラモンです。

うーむ……なるべく同じキャラを出さないように、と気をつけてるんですが、どうしても使いやすいキャラクターは多めに出してしまっていますね。

ただ、10話くらい続けて「このキャラクターが出ていない」という状況にはならないよう、気をつけたいと思います。

次回の話になりますが、次回は何をやるかまだ決めてません。

私の気分がノってきた時に、書きたいと思ったネタをやるうと思います。

登場キャラは……生徒会卒の皆さんを出したいところですね。

それではまた、次の話で。

応募して頂いたキャラクターの扱い、設定などで問題や間違いがありましたら、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。
出来る限り修正します。

第9話 『生徒会役員の胃がストレスでマツハ』

第4 陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4 陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

訓練校にも部活があるということは、以前にも説明したと思う。

そして、この訓練校では部活の管理運営は生徒会に一任されている。これは別に教官の皆さんが管理するのが面倒臭いという訳ではなく、部隊運営に通じるところもあるので、その予行演習という側面を持たせているのだ。

繰り返すが決して面倒だから押し付けている訳ではない。

その証拠に、教官達は生徒会から部活の管理運営についての書類を毎月受け取っている。

さ、サボってる訳じゃないんだからねっ！

閑話休題。

そんな風に訓練生に全てが任されていると言っても過言ではない部活だが、当然ながら好き勝手に新しい部活を成立したり、予算を好き放題に確保できるという事はあり得ない。

今日はそんな部活の管理運営に頭を悩ませる生徒会の面々（一部除く）のとある一日をお見せしよう。

「……とうとうこの日がやってきたか」

自分用のデスクに腰掛け、御剣が重い溜息と共にそんな言葉を漏らした。

彼の呟きを受け、その隣に座っているリョウガもまた、同じように溜息を零す。

「部活動認定会議と予算申請会議、略して認定会……何度聞いても頭が痛くなる単語だよ」

「ああ。大半は問題が無いんだが……」

「一部の部活が問題なんだよね」

「一部というか、問題を起こす部活は2つだけなんだがな」

「それが凄く厄介だから困るといっか、なんといっか」

「……はあ」

御剣とリョウガしかいない生徒会室に、2人の溜息が響く。

その溜息の響きは、2人がどれだけ憂鬱な気分で居るのかを雄弁に物語っている。なにせ御剣に至っては、まだ何も始まっていないというのに胃が痛むのか、常備されている胃薬を飲もうか飲むまいか悩んでいる程なのだから。

「しかもその最難関が、何故一番目と二番目なんだ……」

「嫌な問題は早めに終わらせようってことなんじゃないかなー」。

下手に後に回すと、まともな人たちを相手した後だから余計にダメージ増えそうだし」

「……まったく反論できんあたり、いつそ感心してしまうな」

結局胃薬を飲むことに決めたらしく、常備されているペットボトルに入った水をコップに移しながら、御剣がもう一度深い溜息を吐いた。

それを見て苦笑しつつ、今日使う予定の書類を整理するリョウガ。ただ、リョウガの顔も随分と憂鬱そうなのが悲しいところか。

さて。ここで2人の話題に上っていた『認定会』について話そう

と思う。

部活動認定会議と予算申請会議の2つを合わせて行うこの会議は、半年に1度行われる。

まず『部活動認定会議』では、半年の間に新しく作られた部活や同好会が、正式な部活として認可してほしいという申請を行い、その部活や同好会が正式に認可するに相応しいものかどうかを話し合う。

正式に認可されると訓練校側からそれなりの予算が出るのだが、認可される条件が厳しく、なかなか正式に認可される事は無かったりする。

次に『予算申請会議』だが、こちらはまあ読んで字の如く予算についての会議だ。

部活に割り振られた予算が正しく使われているか、実績に見合わない予算を割り振っていないかなどを厳しく調査され、来年度の予算を割り出している。

ちなみにこちらは1年に1度行われ、毎回結構な予算の増減があったりなかったり。

中には予算が0になった部活もある程だ。

とまあ、こんな感じで行われるこの認定会は2日、3日に分けて行われる。

何故かというと、1日で行おうとすると、それこそ全ての訓練を潰してやらなければならないからだ。

管理局員になる訓練をする為の訓練校なのだから、さすがに訓練を潰すわけにもいかないだろう。

「はあ……言っても仕方ないが、何故奴等が1番目と2番目なのか

……」

「もうやめようよ。言っても虚しくなるだけだもの」

「わかっている。わかってはいるんだが、言わずにはいられないんだよ」

胃薬を飲みながら御剣がぼやいたのと同時に、生徒会長である朔也が「遅れました」と言いながら、生徒会室へと転がるような勢いで入ってきた。

どうやら走ってきたようで、息も少し弾んでいる。

「そんなに焦るな朔也。心配しなくとも、始まるまではまだ20分以上あるぞ」

「そ、そうですか？ 良かった、遅刻するかと思いましたよ」

「相変わらず心配性だな。まあちょうどいい、来たのなら書類に許可の判を押してくれ。」

書類の数もそれほど多くない、朔也ならすぐに終わるだろう」

「わかりました。いつもありがとうございます」

「なに、これも副会長の務めだよ」

自分に礼を言いながら机へと向かう朔也にそう言ってから、御剣もまた自分の席に腰を下ろす。

と、そこで席に腰を下ろしたばかりの朔也が顔を上げ、御剣とリョウガの2人に疑問を投げた。

「あれ？　そういえば、ヴェヌーシア君はどこに？」

「ハヤブサなら送れてくるって言ってたよ。用事があるみたいで」

「奴のことだから、どうせロクな用事ではないだろうがな」

書類に目を落としたまま答えるリョウガと、心底疲れた表情で溜息と共に答える御剣。

そんな2人の答えを聞いて、朔也は何ともいえない笑みを浮かべるのだった。

間違った苦笑だ。

● 陸士訓練学校のドタバタな日常。

第9話 『生徒会役員の胃がストレスでマッハな話』

「さて、2人とも準備はいいかな？」

「問題ない」

「こっちも大丈夫だよ」

「では始めましょうか」

朔也が生徒会室についてから20分後。

認定会の準備を終えた3人は、お互いに自分の手元にある書類の最終確認を済ませる。

そうして朔也の確認を合図として、認定会が開始された。

「最初は……まあ、部活認定申請だ。代表者、入ってくれ」

「失礼します」

うんざりした表情の御剣が朔也に説明しつつ、ドアに向かって声をかける。

それに促されてドアを開け、神妙な面持ちで入ってきたのは、蒼とミコトの無乳——失礼、スレンダー体型な2人だった。

「……ふう」

「ヤマト君、露骨に嫌そうな顔をしないで」

「してないよ。嫌そうな顔じゃなくて、嫌がってる顔してるだけ」

「それってどう違うんです？」

入ってきた2人を見て露骨に表情を曇らせるリョウガを注意するも、それを言っている朔也も微妙に困った表情をしていたりする。しかし入ってきた蒼とミコトはそんな事は気にせず、机に座る朔也たちに向かってビシッ！と指を突きつけ、好戦的な表情を浮かべながら高らかに声を張り上げた。

「さあ会長！ 今日こそ認めてもらおうじゃないか！！」

「そうよ！ 私達の同好会を立ち上げてからはや1年半！ 申請をしたこと幾星霜！！」

そろそろ根負けして認めてくれてもいいと思うわね！！」

「私達——」

「『豊胸同好会』の正式な昇格を！！！！！！」

「はい、不許可」

「何で！？」

ドヤ顔の蒼とミコトが台詞を言い終えた瞬間に一刀両断するリョウガ。

「何でって、部員数足りてないし。正式な部に昇格するには、最低

6人は部員が必要だよ？

申請書類に書いてあるのを見る限り、部員2人しかないじゃん」

「あ……」

書類を片手に淡々と告げるリョウガの言葉に、蒼とミコトは揃って間の抜けた声を漏らしてお互いに顔を見合わせた。どうやら規定数の部員を集めるという事をすっかり失念していたらしい。

そんな2人を見ながら御剣は頭を抱えて大仰な溜息を吐き、朔也は苦笑を浮かべる。

「ていうか前日も同じ理由言っただけだと思っただけだ」

「そ、それはアレよ、その……」

「忘れてた？」

「ミコトの言うとおりだ。ただその……そうだ、人数の足りない分は気合で補おうとしただけだ」

「ええ……」

しどろもどろに答える蒼とミコトだが、言い訳にすらなっていないのが悲しいところ。そうだ、とか言っちゃってるあたりで今考えたという事はバレバレなのに、最早それにすら気付いていない。

ちなみに、前回の認定会でも同じようなやり取りがあった事を、ここに追記しておこう。

「で、でも！ 正式に部活として認可されれば、きっと多くの部員が集まる筈よ！」

「その通り！ そして私達『豊胸同好会』は、多くの恵まれない女子に希望を与える事が出来る！」

「恵まれない女の子達に合いの手を！」

「愛の手では無いんですね……はは」

「合いの手だと意味が全く分からないがな」

苦笑する朔也と御剣のツッコミをスルーし、蒼とミコトがずいずいと3人に迫る。

「さあ！ いい加減認可してください！」

「しないと言うならば、半年後にまた来るぞ！」

もはやなりふり構わず、脅し（？）までかけてくる2人。だが、現実……というかりヨウガはそんな勢いに流される事無く、冷静に一言こつ告げた。

「お帰りはあちらです」

「なっ!？」

「屈しない! 私達は権力には屈しないわ!!」

淡々と告げるリヨウガだったが、その程度で引き下がるほどニコト達の情熱は甘くは無い。

2人は「屈するものか!」と更にリヨウガの座るデスクに詰め取り、尚も口を開こうとした……が。

「これ以上騒ぐなら、生徒会メンバー全員でお相手しますよ?」

「……………お、覚えてなさい!」

「半年後にまた来るぞ! 絶対にだ!」

につこりと笑いながら自分のデバイスを構えたりヨウガの迫力と脅しには逆らえず、悔しそうな顔で捨て台詞を残して去っていく。生徒会メンバー……特に御剣の強さは訓練校内でもかなり有名なもので、仕方ないといえば仕方ないだろう。

いくら自分たちにとって譲れない願いだとしても、怪我はしたくないものだ。

「はあ……………ようやく終わったか……………」

「最初からかなり疲れたよ……………」

「おふたりの熱意は買っんですけどね」

「熱意だけで何とかなるなら生徒会要らないよ、会長」

「確かに」

2人が出て行くと、御剣とリョウガはがつくりと肩を落として溜息を吐く。

その表情には、認定会が始まったばかりだというのに、既に疲労が色濃く浮かんでいた。

「ほ、ほら！ 気を取り直して次にいきましょう？ 次の方の案件はなんですか？」

「ああ、次は……予算申請だ。ゲーム部のな」

「ある意味、さっきの2人よりも厄介なんだけど……会長、帰っちゃ駄目かな？」

「頑張ってください、お願いですから。それじゃあ次の方、どうぞ」

「しゅっれーしまーっす！！」

「失礼します」

心底嫌そうに溜息を吐く御剣とリョウガを宥めつつ、朔也はドア

の向こうに声を掛ける。すると、ドアを開けてまずはソフィアが元
気良く、それに続いて頭を下げながらリオスが中へと入ってきた。
入ってきた2人を見て、朔也たちは意外そうな顔をする。

何故なら、普通この認定会に参加するのは各部活の代表……つま
りは部長が来るのが普通だ。

以前紹介したと思うが、ゲーム部の部長はヴィレイサー。

だというのに、何故かこの場にきたのは部員のソフィアとリオス
だけで、部長であるヴィレイサーの姿はどこにも見当たらなかった。
3人が意外そうな顔をしたのも、無理からぬ事だろう。

「あれ？ セウリオンさんはどうしたんですか？」

「あ、ぶちょーはめんどくさいって言って来ませんでした」

「ですから、副部長の僕と会計のソフィアが代わりに……あの、す
みません」

「アイツはまったく……まあいい、ある意味お前達の方が話が早く
すみそうだ」

事情を聞いて頭を抱えた御剣だったが、すぐに気を取り直すと居
住まいを正し、仕切り直したと一度咳払いをしてから話を進めた。

「それではソフィア。ゲーム部の来年度予算申請書を見せてくれる
か？」

「はい。どうぞ、みっちー先輩」

「みっちーと呼ぶな。私は別にバスケはしたくない。どれ……」

きやらきやらと笑うソフィアへ律儀にツッコミを入れつつ、御剣が予算申請書を彼女から受け取る。

申請書を受け取った御剣は、そのままそれに目を通していくが、読み進めるうちにみるみる彼の顔色は悪くなっていく。いや、悪くなっているというよりもむしろ、険しくなっていくという表現がしっくりくるだろう。

「……朔也、リヨウガ。すまんが、お前も目を通してくれるか」

「え？ あ、はい」

「了解ですよ」

少しの間申請書に目を通した後、御剣は頭を抱えて申請書を朔也とリヨウガに渡す。

この時、彼の様子を見ていたリオスは小さな声で「やっぱり」と呟き、ソフィアは何で御剣がそういう反応をするのか分からない、と首を傾げて不思議そうにしていた。

「……これは、ちょっと」

「幾らなんでもあり得ないって、これは」

そして御剣から渡された申請書に目を通し終わった朔也とリョウガも、御剣と似たような反応をして苦笑いを浮かべる。その反応を見た御剣は、2人の隣で頭を抱えたまま、呻くようにして自分の前に居るリオスとソフィアに問いを投げた。

「リオス、ソフィア。何故、ゲーム部の予算に100万も必要なのだ？」

どう考えても、私にはそこまで予算が必要な部活だとは思えないのだが」

「ええと、それはですね」

「私達がゲームの大会に出場した時の移動費とか宿泊費、後はゲーム機本体の購入費とか、ソフトの購入費などを計算したら、そのくらいになりました」。

それに、ちゃんと予算に見合うだけの実績は残したんですよ？ハヤトとルークは、こないだ開催された格闘ゲームの次元世界大会で1、2フィニッシュでしたし、ハヤブサ先輩やヴィレイサー先輩も、違うゲームの大会で優勝したりしてますし」

頬を引き攣らせて尋ねる御剣に、ソフィアが得意満面という顔で解説する。

「他にも色んなゲーム大会で入賞や優勝してます。多分、ゲーム部に入ってる全員が、何かしらの大会で結果を残してたんじゃないか

な？　ね、リオス！」

「う、うん。確かにそうなんだけど……」

「ああ、そういえばロックウェル君とセウリオン君の出ていた大会は、テレビで中継されてましたね」

「確かに見たことあるかも。何か気持ち悪いぐらいに上手くてドン引きした記憶が……」

ムン、と胸を張るソフィアの解説で思い出したのか、朔也とリョウガが確かにと頷く。

ゲームを殆どやらない御剣達は知らなかったのだが、ゲームの大会は毎年各地で相当の数が行われており、その日程も2日だったり3日だったり様々である。

それに全て参加するとなれば、移動費や宿泊費なのでそれこそ100万でも足りない位のお金が掛かるものなのだ……とソフィアは熱い調子で語るものの、それを大会に参加したことの無い人間に分かれというのも酷な話。

「なるほど、話は分かったが……」

「この予算は流石に……他の部の3倍以上ですからね」

「せめて半分くらいにならない？　それなら、ギリギリ交渉の余地があるけど」

事実、朔也たちは揃って難しそうな顔をして眉を寄せている。

割り振れる予算にも限りがあるので、このままこの予算を承認してしまえば、間違いなくどこかの部活が『予算無し』になってしまう。

「そ、それはわかるんですけど、実はこっちもコレで最低条件だったりするので……」

「そうだよ。私とリオスが、これでもか！　って位に削ったんですから」

「コレでか！？」

「昨年度はどれだけ使ったって言うんです？」

「使いすぎでしょ、明らかに」

衝撃の事実にも三度言葉を失う朔也たち。

100万で最低と言うなら、本気で請求してきた場合は一体どんな予算だったというのか。

想像するだけで恐ろしい。

「うー、でもでも、これで絶対予算を通してこいつでヴィレイサー先輩にも命令されてますし」

「アイツは……自分で来ないクセに、何故そんな余計な事を厳命してるんだ」

「すみません。うちの部長がすみません」

あっけらかんとした顔でそう言うソフィアに御剣は何度目になるか分からない溜息を吐き、リオスはソフィアの隣で心底済まなそうな顔で頭を下げた。

しかし、いつまでもこうしていたところで埒が明かない。そう考えた御剣たちは、一度3人で顔を見合わせてアイコンタクトで意思の疎通をした後――

「では、とりあえずこの申請書は保留と言う事で」

「最終日のラストに時間を取っておく。その時まで、そちらでも少し削れないか考えてくれ」

「こつちも何とかできないか、一応考えておくから。いちおう」

――問題を先送りする事にした。

これ以上は色々と限界だったらしい。主に御剣の胃が。

「はい。わかりました」

「すみません、ホントありがとうございます」

とりあえず却下されたわけではないので、ソフィアも特に異論は

挟まず、リオスは元から無茶な要求だと理解していたので、むしろ感謝しながら退室していった。

退室する際、リオスと御剣は一瞬だけ目を合わせ、「お互いに大変ですね」とアイコンタクトでお互いを労ったとかそうでもなかったとか。

「……………と、とりあえず問題だった2組は終わったか」

「うん、まあゲーム部は何ともいえないけど」

「まあまあ、とりあえず一息入れましょう。御剣君もヤマト君もお疲れでしょう？」

「いや、確かに疲れてはいるが、ゲーム部で結構な時間を取ってしまった。今日の予定を終わらせるためにも、休みはもう少し後にしよう」

「そうだよ会長。一番厄介なのが終わったんだし、後は楽なもんだしさ」

「そうですか？ まあ、おふたりが大丈夫だと言っなら、わかりました」

たった2組を終えたただけだというのに、既に疲労困憊な様子の御剣とリョウガを見て朔也が休憩を提案するも、そこは真面目な御剣とリョウガ。その誘いを丁重に断って、次の案件へと移ったのだった。

「次は部活昇格申請だな、名前は……SOH団？」

「資料によると、最近できた同好会みたいけど……なんだろ、名前からして既に嫌な予感が」

「し、心配しすぎですよヤマト君。それでは次の方、入ってください」

資料を見ながら不吉な事を言うリョウガに苦笑を返し、朔也がまたドアに向かって声を掛けた。

その瞬間、突然ドアが蹴破らんばかりの勢いで開かれ、同時に生徒会室の電気が突然消えてしまう。いきなりの事態に3人が「何だ何だ!？」と慌てて声を上げた。
すると――

「なんだかんだの声を聞き!」

――どこからともなく降り注いだスポットライトが、まず一番左端に居たハヤブサを照らす。

「光の速さでやってきた!」

そしてスポットライトは、そのまま真ん中と右端に立つハヤトとルークを照らし出した。

3人はそれぞれが思い思いにポーズを取って格好をつけているが、いかんせん観客側の朔也たちは突然の事態に呆然と見つめているだけで、反応は全く無い。

「巨乳よ！」

「普乳よ！」

「貧乳よ!!！」

しかし、ハヤト達はそんなことなど知ったことかと台詞を続けた。この3人、ノリノリである。

「世界に羽ばたけ（。。。）〇ミ。おっばい！おっばい！」

「宇宙に伝えよ（。。。）〇ミ。おっばい！おっばい！」

「誰もが震える魅惑の響き！」

そしていよいよ登場シーンも大詰めなのか、3人はカッと目を見開き、更にポーズを変えていく。

「ハヤブサ！」

「ハヤト！」

「ルークでニヤース！」

「時代の主役はおっぱいたち！」

「我ら無敵のー！」

「「「SOH団！ー！！」」」

最後の決めポーズと共に、ハヤト達の背後で巨大な爆発が起きる。校内じゃないの？ とか、どこに爆薬が？ というツツコミは遠慮してもらおう。

だってこれは『お約束』なのだから！ はいそこ、えーとか言わない。

「あ、ちなみにSOH団つてのは、

S——世界のおっぱいを

O——大いに愛でる

H——ハヤト＝ロックウエルの団

の略ですよ」

ドヤ顔でポーズを決めながら、ついではかりに解説するハヤト。それでようやく落ち着いてきたのか、朔也たちはずっこけそうになった格好を正し、それぞれ気を取り直すように自分の服を整えて深呼吸をひとつ。

そして、3人は揃ってこう言った。

「「「帰れ」「」」

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描くことを……強いられているんだ！

・今日のおまけ

【SOH団の活動内容】

ハヤト「SOH団の活動内容、それは……！」

ルーク「俺達が認めた貴重なおっぱいの安全を守り、保護することだ……！」

ハヤト「その為には、対象の行動パターンを把握しなくてはいい！」

御剣「それはもはやストーカーだろう」

ハヤブサ「なら、その幻想をぶち殺——」

御剣「いいから帰れ。頼むから」

【復活の豊胸同好会】

ミコト「まずは部員を勧誘するわよ、蒼」

蒼「ああ、そうするでしょう。最初に誰を勧誘する？」

ミコト「決まってるわ、私達と同じくらいの大きさといえば（ほにゃらら）教官よ！」

蒼「なるほど、確かに（ほにゃらら）教官ならば……」

「???」「へつくし!」

マリーナ「どうしたのよ舞、風邪?」

舞「わかんないけど、何かすごい侮辱されたような……」

【ゲーム部の活動実績】

ソフィア

「えっとー、格闘ゲームの次元世界大会で、ハヤト、ルーク、ユウキの3人がチーム戦5連覇中。あと、個人戦ではハヤトが5連覇中だね。リオスはモンハンの最短狩猟記録の世界記録保持者で、スバルはスポーツゲームの次元世界大会の殆どで入賞してるよ。あとあと、なにを隠そうこのソフィアちゃんもあるゲームで優勝してるんです!」

朔也「す、すごいですね……殆ど全員が何かしらのゲームで世界大会レベルとは……」

リョウガ「ここって陸士訓練校だから、その経歴全く役に立たないけどね」

ソフィア「リョウガちゃんが冷たい!」

第9話 『生徒会役員の胃がストレスでマッハ』（後書き）

今年のクリスマスは中止になりました。
どうも、ラモンです。

今回は部活に関する話題で一本やってみました。
ぶっちゃけ、最後のロケツ。団ネタをやってみたかっただけですが
（笑）

しかし、書いてて割と本気で生徒会の皆の心労が心配になってきた
私がいいます。次回は少しみんなに自重させよう、そうしよう。

さて、次回は——まあ何か適当にやりますw

ネタが思いついたらって形なので、どんなのをやるか、誰が登場する
のか、いつ更新かはちょっとわかりませんが、なるべく更新できる
ように頑張りますね。

それではまた、次の話で。

応募して頂いたキャラクターの扱い、設定などで問題や間違いが
ありましたら、すぐにメッセージなどでお知らせくださいませ。
出来る限り修正します。

第10話 『メリークリスマス 〜野郎たちの哀歌〜』

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校の厳しくも楽しい日常を描いた物語である。

今日は12月25日、地球で言うところのクリスマス。

恋人同士が甘い夜を過ごし、独り身の人間は「リア充爆ぜろ」と呪詛を吐く。そんな人類における格差社会をまざまざと見せ付けられる、そんな日だ。

その忌まわしき――げふんげふん、素晴らしい風習はミッドチルダにも存在していた。

元々は存在していなかったらしいのだが、第97管理世界、つまりは地球からミッドへと移住してきた人間達がそれを広め、現在で

は一種のお祭りとして催されているらしい。

そして、そんな25日の夜。とある訓練校宿舎の一室には――

「クリスマスいえ〜い！」

『クリスマスいえ〜い!!!』

――そんな野太い歓声が響いていた。

野太い、の部分で分かっていただけかもしれないが、この部屋に居るのは男だけ。

全員が思い思いのグラスを持ち、そこに入った飲み物を飲みながら大いに盛り上がっている。

「ちよっ、もう少し静かにしてよ！　いくら冬休みだからって、あんまり騒いだら怒られるから！」

「かてーこと言うなってリオス！　ほら、クリスマスソングメドレー一緒に歌おうぜ！」

「そっだそっだ！　今日騒がずに一体いつ騒ぐってんだ！」

飲み食いしながらギャーギャー騒ぐ仲間達に、辟易した顔のリオスが苦言を零すも、テンションが天元突破している男衆には全く効果が無く、むしろ絡まれて余計な被害を被ってしまう。

「やっぱクリスマスは、こうして男だけで集まって騒ぐのが一番だよな！」

「そーそー、女とかマジ不要！ 友情最高！！」

「リア充どもはこんな寒い日に外でデートだつてよプギャー！！」

集まっている中でも飛びぬけてテンションの高いハヤト、ルーク、ユウキの3人は、持ってきた飲み物を次々と飲み干しながらそんな言葉を叫んでいる。

何故だろう、目からしょっぱい水が溢れて止まらない。

それはともかく、テンションが天元突破している3人はともかく、絡まれているリオスからすればとてもいい迷惑なので、何とか脱出を試みる。

「と、とりあえず離してよ！ ほら、部屋の片付けするから！」

「んーなもん明日一緒にやってやるって！ ほらお前も飲めよ！」

「飲めねーってんなら、俺が口移ししてやってもいいぜー！？」

「いやそれはホントやめて！ やったら怒るからね！？」

さて、そろそろこの辺りで今現在この部屋に居るメンバーを紹介しよう。

まずはリオスに絡みながら騒いでいるハヤト、ルーク、ユウキ。

そして3人に絡まれているリオス。そんなリオスを気の毒そうに眺めつつ、巻き込まれたくないと隅の方に待機しているアルトリアとアウル。

以上の6名が、今この場に居る全メンバーである。

「リオス、大変だねー」

「そう思ってるなら助けてよアリア！ アウルも！」

「その……すみません。私も自分の身の安全が恋しいもので」

「裏切ったな！ 僕の気持ちを裏切ったんだ！！」

苦笑しながら我関せずを決め込む2人にリオスが叫ぶ。

しかし、彼には友人に見捨てられた悲しみにくれる暇など無かった。

「ほらほらリオス！ どうせだから今から24時間耐久ゲーム大会やろっぜー！」

「いいねエいいねエ最ツツ高オだねエ！！」

「テンション上がってきたああああ！！」

「もうマジ女とかいらねえし！ 男だけで十分だし！」

「ちょっ、まっ、どこ触って……うひゃああ！？」

なぜなら悲しみに暮れるよりも先に、ハヤト達テンション突破組にもみくちゃにされてしまうからだ。

3人はこれでもかと言いくらいにリオスに絡み、事情を知らない人が見たら「そういう関係」なのかと疑われるような格好になっている。腐女子大歓喜。

「……やっぱり、助けた方がいいんじゃないでしょうか」

「そうだね。流石にちよつと可哀想になってきた」

ハヤト達にセクハラをされまくり、涙目になりつつあるリオスを見て、これ以上はさすがに……と思っただけ、アウル言葉に答えてからアルトリアが溜息を吐く。

そしてアルトリアは、リオスに絡んでる3人に向かって、禁断の一言を放った。

「——3人ともさ、そんな事言ってるけど本当は凄く羨ましいんだよね？」

「「「……………っ！！？？」」」

アルトリアの放った一言——現実という名のナイフを胸元に突き立てられ、3人の動きが止まる。

「さつきは女の子はいらないー、って言ってたけど、実際は女の子と2人つきりで過ごしたかったんだよね？　だって今日、3人とも朝から知り合いの女の子に片っ端から電話してたし。ねえ、本当は羨ましいんでしょ？」

「「「……」」」

可愛らしく首を傾げ、最後にそう尋ねるアルトリア。
彼の質問にハヤト達は顔を俯いて沈黙し――

「「「（；；；）ブワッ」」」

一斉に泣き出した。

「ち、ちくしょおおお！　ちくしょおおおおっ！！」（C
V・若本）

「ああそつだよ、羨ましいよ！　京谷とかフィオネちゃんとクリスマスデートだし、聞いた話じゃ御剣副会長とか朔也会長とかもなんか女の子と過ごすらしいし！？」

「ヴィレイサー部長とかリョウガとか、さらにはハヤブサさんまで女の子と過ごすとか何なの！？」

しかも女子連中は、せつかく誘ったのに全員断ってくるしさあああああ！……！」

地面に蹲り、部屋の床をダンダンと思い切り殴りつけながら泣き叫ぶ3人。

拘束が解かれたリオスは、3人の様子を見ながら大慌てでアルトリアたちの方へと避難していく。

しかし、それを気にする余裕など今のハヤト達には残っていないかった。

「何が悪かったんだよ!? 俺は普通に「性なる夜でもどうですか」って聞いたのに、ティアナもスバルも揃って断ってくるしさあああああ!! ふざけんなよちくしょおおおお!!」

「いや、それは断られて当然でしょ」

「むしろ何でそれでいけると思ってたんですか？」

「つかアリアは何で俺らにこんな辛い現実を突きつけてくんの!？」

「てめえの血は何色だああ!!? アリアあ!!」

「俺達に何の恨みがあるってんだよ、ちくしょーっ!!」

泣き叫びながら、アルトリアに詰め寄るハヤト達。

そんな彼らに向かって溜息をひとつ吐いてから、アルトリアは短くこう呟いた。

「だって、本当は今日俺も用事あったんだもん」

「……てめえも裏切り者だったのかあああああ！！」

●陸士訓練学校のドタバタな日常。

第10話 『メリークリスマス 〜野郎たちの哀歌〜』

「ひぐつ、ぐすつ……えつぐ、えつぐ……」

「ちくしょう、俺が何したって言うんだよお……」

「奇跡も魔法もねえんだよ……ぐすつ」

アルトリアが現実というナイフをハヤト達に突きつけてから数十分後、3人は未だに泣き崩れ、涙で部屋の床を濡らしていた。しかし、そうさせた張本人であるアルトリアはと言えば、大して気にした風も無く、リオス達と一緒に持ち寄った飲み物や食べ物をつまんで楽しそうに笑っている。

「このお菓子おいしいね。リオス、これどこで買ってきたの?」

「あ、それは駅前のケーキ専門店で、クリスマス限定で売ってるみたいだよ」

「そうなんですか……今度買いに行こうと思ったんですが、残念です」

リオスとアウルも、今の状態のハヤト達に関わると余計にややこしい事になると知っているので、泣き崩れる3人をフォローしようとはしない。

「……………ぐすつ。なあルーク、ユウキ」

「なんだ、ハヤト?」

「今俺は悲しみのズンドコだから、ちょっと黙っててくれ」

「まあ聞けよ。俺、今ふと思ったことがある」

涙を拭いつつ、少し離れた場所で楽しそうに笑っているリオス達を見つめ、ハヤトが言葉を続ける。

「俺達が非リア充なのは、クリスマスに女と一緒に過ごせないからだよな」

「……やめろよ。そうやって現実突きつけんのやめろよ」

「落ち着けルーク。そこで諦めたら試合終了なんだ」

「？ 何か策があるのか、ハヤト」

どこか自信を孕ませたハヤトの物言いに何かを感じたのか、泣き崩れていたルークとユウキもまた涙を拭い、顔を上げて彼へと期待の視線を向けた。

そんな2人の視線を受け、ハヤトは「あるんだよ」と自信たっぷりに頷く。

果たして、彼が思いついた策というのは――

「――リオス達に女装させたら、それは即ち女と過ごしているのと同義ではなかるうか？」

「「……」」

とまあ、そんな意味不明な作戦だった。通常の人が聞いたら、どう聞いても無茶苦茶な理屈である。正直頭がおかしくなったと思われるでも仕方ないだろう。

そもそも女装させたところで男は男。けっして女にはなれないのだ。

ルークとユウキも、そんな風に馬鹿にして却下すると思われた。

「ハヤト……」

「お前……」

が、しかし。

「天才じゃね!?!」

この2人もまた、ハヤトに勝るとも劣らないくらいに悲しい野郎共だったらしい。

明らかに馬鹿な彼の作戦を聞き、ルークとユウキは目を輝かせて歓喜の声を上げ、ハヤトの手をしっかりと握り締める。その顔に浮かぶのは、心の底からの賞賛の表情だ。

「そうだよ！　そうすれば俺達も端から見ればリア充の仲間入りだよ！」

「しかも丁度リオス、アリア、アウルの3人がいるからな！　数もぴったり3：3だ！」

「やっべハヤトお前マジ天才！　今日から兄貴って呼んでいい!?!」

「はっはっは！　それは断るがもっと誉めてくれていいのよ!」

「イヤッファー！　マンマミーア！」（赤い配管工風に）

「メツチェゴー！　メメメメツチェゴー！」（赤い配管工風に）

正直アホとしか思えないハヤトの提案に、再び3人のテンションが上がっていく。

その勢いは最初の頃に勝るとも劣らない……どころか、間違いなく最初のテンションを軽く凌駕しているようにも見える。

「……なんだろ、何か凄く嫌な予感が」

「リオスも？ 俺もさっきから何かこう、背筋に薄ら寒い予感が……」

「お二人もですか？ 実は私も……」

一方で標的にされた3人は、背筋を駆け巡る寒気にブルツと体を震わせた。

後にリオス達は「この時感じた直感に従って、さっさと逃げれば良かった」と涙ながらに語ることになる。しかし、それは所詮のちに語ったことであり、この時3人はのんびりとお菓子を食べ、飲み物を飲んで笑いあっていたのだ。

「「「……」」」

そんなリオス達の後ろにゆらりと浮かぶ、3つの影。

「ん？」

「あれ？」

「え？」

不意にかかった影に気付き、3人がそれぞれ後ろを振り返る。
その瞬間――

「「「お前ら女装しろおおおおおつつつ！！」」

「「「ええええええつつ！？」」」

――3人の後ろにいたハヤト、ルーク、ユウキが叫びながら襲い掛かってきた。

その動作はまさに神速。リオス達が彼らに反応するよりも先に、目にも留まらぬ速さでリオス達を羽交い絞めにし、逃げられぬように拘束していく。

「ちよっ！？ な、なにしてんのハヤト！？」

「ええからええから！ おいちゃんに全部任しとき！ 痛いことせえへんから！」

「なんで関西弁！？」

リオスはハヤトに羽交い絞めにされ、何とか脱出しようともがくも、万力の如くしめつけるハヤトの力に、ただうごうごと身をよじるしかできない。

「ふやつ、ル、ルーク、そんなとこ触っちゃだめえ……」

「ふっふっふ、ここか？　ここがええのんかあ！？」

「だ、だからどこ触って……ひゃんっ！」

アルトリアは、服を脱がそうとするルークに体を触られ顔を真っ赤にしている。

「ユウキさん！？　何でそんな鼻息荒いんですか！　怖いんですけど！」

「大丈夫、先っばだけ！　先っばだけだから！！」

「何がですか！？　ちょっと本当に離してくださいよ！　ホント怖いんですから！！」

アウルはアウルで、鼻息荒く目を血走らせるユウキに捕まり、ちよつとした貞操の危機を感じ、なんとか彼の拘束から逃れようと全力で抵抗していた。

しかし、どうやらハヤト達はあまりの悲しさに理性を失っている

ようで、どれだけリオス達が抵抗しても、説得しようとしても聞く耳を持つとしないのだった。

一方その頃、男子寮のリオス達がいる部屋へと続く廊下では、ティアナを始めとした女子数名がサントクロースの格好をして歩いていた。ちなみに、全員ちゃんとミニスカートを穿いている。

「うー、さすがにちょっと寒いわね」

「な、何でこんな格好にしたのよティアナ」

「あたしじゃないわよ、スバルがこれにしようって騒いだの」

寒そうに手を擦り合わせるミコトの問いに、ティアナも同じように手を擦りながら答えた。

暖房の効いている部屋の中ならともかく、冬場の廊下でミニスカ―トはやはり寒いのだろう。見ているこっちは心が温かくなるが、本人達は別なのだから。

「え〜？ だって、クリスマスって言ったらサンタでしょ？」

「そうだよ〜。それにホラ、こういうカッコの方が、男の子は喜ぶと思うし！」

ティアナとミコトの隣では、同じくミニスカサンの格好をしたスバルとソフィアが、楽しそうにスキップしながらそう答えて笑っている。

そんなスバル達を見て、彼女らの後ろを歩く美卯と蒼、そしてゆずの3人が溜息を吐く。

「ならソフィア達だけでやればいいじゃない。何で私まで……」

「全くだな。この寒い中、何で私達がハヤトたちの為にこんな格好をしなければならないんだ」

「ほんにのう。尤も、なんとなくこんな服を着たわらわ達もわらわ達じゃが」

溜息として吐いた息すら白い廊下を歩きつつ、スバルとソフィア以外は全員が寒そうに自分の体を抱きしめて文句を漏らす。

そもそも何故彼女達がこんな格好で男子寮を歩いているかと言うと、ハヤトを筆頭としたクリスマスに予定の無い男子が可哀想なので、暇な女子全員でサプライズをしてやろう……という事らしい。

「ていうか、これでハヤト達が出かけてたらお笑いよね」

「確かにそうじゃな。スバル、ソフィア、その辺りは確認をとっておるのかや？」

「「あ……」」

「……………アンタ達ね」

言われて初めて気付いたという顔をするスバル達に、ティアナは頭を抱えた。

こんな恥ずかしい格好までしたのに、行ってみたら誰も居なかったなど出来の悪いコントもいいところだ。ティアナが頭を抱えるのも仕方ないというものだろう。

「まあその辺は大丈夫でしょ。リオスとかは分からないけど、ハヤトとかルークがクリスマスに外出なんてほぼあり得ないしね」

けれど頭を抱えるティアナの横で、ミコトがけらけら笑いながら中々酷い事を呟く。

ただ、その場に居る全員が、彼女の言葉を聞いて「確かに」と納得しているのが涙を誘う。

「それじゃあ最終確認ね。これから皆でハヤト達が居る部屋に行つて、せーので突撃」

「そしたら後は皆でクリスマスパーティーに突入……………だよね？」

「うん！ ティア達もそれでいい？」

楽しそうに確認するスバルとソフィアの言葉に全員頷きを返す。
それを確認して嬉しそうに笑うと、2人はティアナ達を先導して
足早にハヤト達が居る部屋——つまりリオスの部屋を目指して歩く。
ほどなく彼女らはリオスの部屋がある階へとやってきたのだが。

「あら、なんだか凄く盛り上がってるみたいね」

「そうじゃのう。こっちは廊下の一番端だと言うに、ここまで声が
聞こえてくるのじゃ」

「なんか、あたし達抜きでも大丈夫なんじゃないの？」

階段を上った彼女たちの耳に、うるさいと感じる程に廊下に響く
ハヤト達の声が聞こえてくる。

何だ、自分達抜きでも盛り上がってるじゃないかとティアナ達は
思うが、だからと言ってこのまま引き返すのも馬鹿らしい。ここま
で来たんなら、最後まで行くのが乙女道。

「ま、人数が多くて困るということもないだろうさ」

「そうだよ。ほら、みんな準備はいい？」

「出来てるならいくよー？」

ティアナ達は覚悟を決め、それぞれ自分の格好を最終チェックする。

そして、彼女らはクリスマスお決まりの文句と共に、部屋へと続くドアを勢いよく開け――

「「「「「メリークリスマス……ス……」」」」」

――目の前に広がっている光景に、一斉に言葉を失った。

「大丈夫やつて！ ホンマ痛くせえへんから！」

「だから何で関西弁なのさ！ ていうかい加減にしないと本気で怒るよ！？」

「ふはははは！ ここやる？ ここがええねんやる！？」

「ふあっ……だ、だからやめてってばあ……！」

「な！？ なにもしない！ 着替えてくれたら何もしないから！！」

「それを信用して欲しいなら、まずは離れてくださいよ！ ホント怖いですって！！」

部屋に入ったティアナ達の目の前に広がっていたのは、半分ほど

服を脱がされて涙目になっているリオス、アルトリア、アウルの3人と、彼らに馬乗りになって鼻息を荒くしているハヤト達だった。……どう見ても【腐女子大歓喜！】な状況です。本当にありがとうございます。

「あっ！？ ティアナ、スバル！ た、助けてええ！！」

「ゆず！ 美卯！ お願いだからこっち来てえ！」

「ミコトさん！ 蒼さん！ 助けてください！！」

そんな彼女達に気付いたりリオス達が助けを求めるが、ティアナ達は何も言わずに気まずそうな表情で扉を閉めつつ、ハヤト達に向かってこう呟いた。

「……………ごめつくり」「……………」

「……待つてええええ！！！！」「……」

聖夜に響いた悲しき絶叫は、結局ティアナ達に届く事は無かったとか。

ちなみにこの後、リオス達は暴走したハヤト達によって3人とも綺麗に女装させられ、日が変わるまでハヤト達の似非リア充気分を味わうことに付き合わされたらしい。

第4陸士訓練校。

ここでは日夜厳しい訓練と、一流大学も真つ青な座学を教えている。

もちろんそこに在籍している生徒達は、その全員が自分に厳しい人間達だ。

これは、そんな第4陸士訓練学校で起きた痛々しい事件を伝える物語である。リア充滅べ。

・今回のおまけ

【女装したリオス達】

リオス「……しくしく」

アリア「……しくしく」

アウル「……」（落ち込み）

ハ・ル・ユ「」「ベネ！ デイ・モールトベネ！」「」

リオス「後で絶対復習してやる」

アリア「俺も付き合う」

アウル「流石にこれは許せる範囲を超えてますね」

【女子達の感想】

ティアナ「……スバル。写真撮った？」

スバル「咄嗟だったから2枚だけ」

ゆず「わらわは3枚じゃ」

ミコト「あたし6枚」

蒼「甘いな、私は12枚だ」

美卯「何でみんな写真撮ってるのよ……」

ゆず「決まってるじゃろ」

蒼「後で脅しの材料に使うためさ」

美卯「うわ、黒い……」

第10話 『メリークリスマス 〜野郎たちの哀歌〜』（後書き）

調子に乗りすぎたのは認めよう。だが後悔はしていない。
どうも、ラモンです。

クリスマスネタを思いついたので、帰ってきてから突貫工事。
そのせいで色々と自重できなかったが、これはこれでいいかなとも
思ったり思わなかったり。

大丈夫だ、作者の皆さんに怒られる準備は出来ている。
何も問題はない。

そんな訳で、怒られたら即座に消すか、書き直します（汗）
クリスマスとかマジ無くなればいいんだよ。畜生め！（えー）

今回はまた何か思いついたら、脊髓反射で書こうと思います。
誰が出てくるかはわかりませんが、楽しんでもらえるように頑張りますね。

それではまた、次の話で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5850x/>

陸士訓練学校のドタバタな日常

2011年12月25日23時50分発行